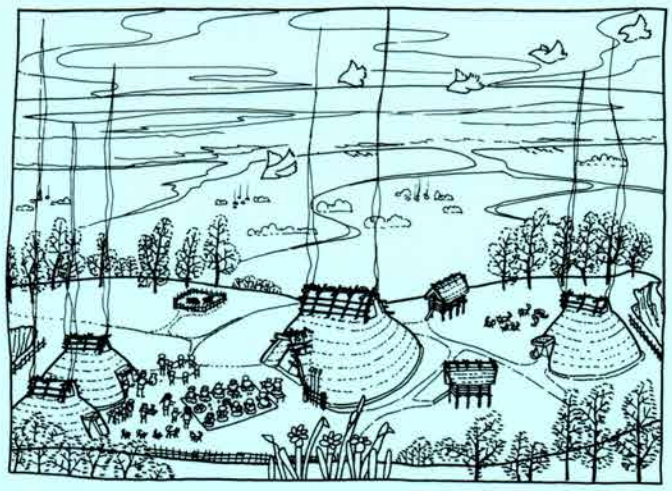
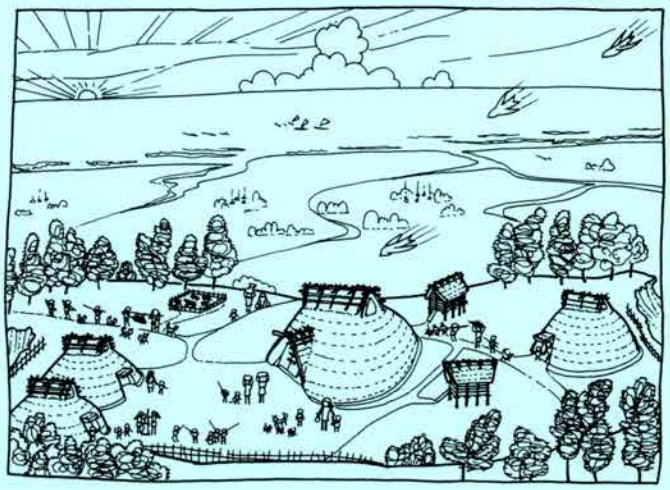
金沢市額谷（ぬかだに）遺跡

－都市計画道路鈴見新庄線整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－





「額谷弥生ムラの四季」

春・集い

夏・夕焼け

1998

石川県立埋蔵文化財センター

金沢市額谷（ぬかだに）遺跡

1998

石川県立埋蔵文化財センター

写真Ⅰ　遺跡遠景

遺跡遠景（北西から）

調査区遠景（南東から）

例　　言

1　本書は石川県金沢市額谷（ぬかだに）町地内に所在する、額谷遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2　額谷遺跡の発掘調査は、石川県土木部都市計画課所管の都市計画道路３・３・６鈴見新庄線整備事業の施工に起因するもので、石川県金沢土木事務所の依頼により石川県立埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査に係る費用は石川県金沢土木事務所が負担した。

4　現地調査から出土遺物整理、報告書刊行に至るまでには下記の機関、個人の協力を得た。
［機関］石川県土木部都市計画課、石川県金沢土木事務所、石川県教育委員会文化財課、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会、金沢市教育委員会、国際航業株式会社、村落遺跡研究会
［個人］岡本淳一郎、樫田　誠、唐川明史、久保有希子、千場勉、谷口宗治、福海貴子、増山仁、横山貴広、吉田淳（個人名五十音順、敬称略）、石川県立埋蔵文化財センター・社団法人石川県埋蔵文化財保存協会職員各位

5　発掘調査は平成７年度から平成９年度にかけて実施しており、調査面積、各年度の内容、費用は下記の通りである。

［調査面積］	約1,500㎡		
［調査内容］	**平成７年度**	現地調査、出土遺物整理	（費用　14,498,491円）
	平成８年度	出土遺物整理	（費用　1,400,000円）
	平成９年度	報告書作成・刊行	（費用　1,500,000円）

6　出土遺物の整理については、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に作業を委託して行った。

7　本報告書の執筆、編集は安　英樹（石川県立埋蔵文化財センター主事）が行なった。

8　表紙のイラスト「額谷弥生ムラの四季」は唐川明史氏から原図の提供を受けて、安が構成した。

9　本書についての凡例は下記の通りである。
⑴方位は座標北を指し、座標は国土座標第Ⅶ系に準拠している。⑵水平基準は海抜高で示している。⑶縮尺は図内に示した。⑷土層図・断面図について、地山は「レンガ」で示した。⑸出土遺物番号は図・写真で共通している。⑹その他の凡例については、遺構はⅣ、遺物はⅤで示した。

10　発掘調査で得られた記録資料、出土遺物は石川県立埋蔵文化財センターで保管している。

目　次

報告書抄録

Ⅰ　位置と環境 …… 1
　1　遺跡の位置 …… 1
　2　周辺の遺跡 …… 1

Ⅱ　経緯と経過 …… 4
　1　事業概要 …… 4
　2　分布調査 …… 4
　3　現地調査 …… 5
　4　屋内整理 …… 5

Ⅲ　調査の概要 …… 7
　1　調査区の設定 …… 7
　2　微地形と層序 …… 7
　3　遺構と遺物 …… 7

Ⅳ　遺　構 …… 21
　1　調査方法 …… 21
　2　竪穴系建物 …… 21
　3　掘立柱建物 …… 31
　4　火葬遺構 …… 35
　5　その他の遺構 …… 38

Ⅴ　遺　物 …… 44
　1　弥生土器 …… 44
　2　土師器・陶磁器・銭貨 …… 48
　3　石器・石製品 …… 48
　4　その他の遺物 …… 48

Ⅵ　まとめ …… 54
　1　弥生時代の建物と集落 …… 54
　2　近世・近代の火葬場と墓 …… 59

注・参考文献 …… 60

図　目　次

図1　石川県・金沢市の位置 …… 1
図2　額谷遺跡と周辺の遺跡 …… 2
図3　調査区の位置 …… 6
図4　調査区のグリッド …… 8
図5　主な遺構の位置 …… 8
図6　調査区全体 …… 9
図7　調査区分割1 …… 10

図８　調査区分割３ …… 11
図９　調査区分割５ …… 12
図10　調査区分割７ …… 13
図11　調査区分割９ …… 14
図12　調査区分割11 …… 15
図13　調査区分割２ …… 16
図14　調査区分割４ …… 17
図15　調査区分割６ …… 18
図16　調査区分割８ …… 19
図17　調査区分割10 …… 20
図18　竪穴系建物ＳＩ１ …… 22
図19　竪穴系建物ＳＩ１土層 …… 23
図20　竪穴系建物ＳＩ２・３・10・掘立柱建物ＳＢ７ …… 27
図21　竪穴系建物ＳＩ４～６・８・９ …… 28
図22　竪穴系建物ＳＩ４～６・８・９土層 …… 29
図23　竪穴系建物ＳＩ７・掘立柱建物ＳＢ８ …… 30
図24　掘立柱建物ＳＢ１ …… 32
図25　掘立柱建物ＳＢ２～６ …… 33
図26　火葬遺構１ …… 36
図27　火葬遺構２ …… 37
図28　ＳＤ７・ＳＫ30・ＳＫ35・ＳＸ７ …… 39
図29　弥生土器１ …… 45
図30　弥生土器２ …… 46
図31　弥生土器３ …… 47
図32　土師器・陶磁器・銭貨 …… 49
図33　石器・石製品 …… 50
図34　竪穴系建物の分類模式 …… 55
図35　建物と集落の推移 …… 57
図36　火葬遺構の配置 …… 59

イラスト１「額谷弥生ムラの四季」春・夏 …… 表紙
イラスト２「額谷弥生ムラの四季」秋・冬 …… 裏表紙

表　目　次

表１　溝 …… 40
表２　土坑 …… 40
表３　落ち込み …… 41
表４　小穴 …… 41
表５　弥生土器 …… 51
表６　土師器・陶磁器 …… 53
表７　銭貨 …… 53
表８　石器・石製品 …… 53
表９　建物 …… 58

写　真　目　次

Ⅰ　遺跡遠景（巻頭）
Ⅱ　調査作業
Ⅲ　竪穴系建物ＳＩ１
Ⅳ　竪穴系建物ＳＩ２・３・10
Ⅴ　竪穴系建物ＳＩ４～６
Ⅵ　竪穴系建物ＳＩ７～９
Ⅶ　掘立柱建物ＳＢ１
Ⅷ　掘立柱建物ＳＢ２ほか
Ⅸ　溝・落ち込み・土坑
Ⅹ　火葬遺構・調査区全景
XI　弥生土器１
XII　弥生土器２
XIII　弥生土器３
XIV　土師器・陶磁器・銭貨
XV　石器・石製品ほか

報告書抄録

ふりがな	かなざわしぬかだにいせき
書名	金沢市額谷遺跡
副書名	都市計画道路鈴見新庄線整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	安　英樹
編集機関	石川県立埋蔵文化財センター
所在地	石川県金沢市米泉町４丁目１３３番地　ＴＥＬ．０７６－２４３－７６９２
発行年月日	平成10年２月16日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
ぬかだにいせき 額谷遺跡	いしかわけんかなざわし 石川県金沢市 ぬかだにまちちない 額谷町地内	17201	１０４	36度 30分 16秒	136度 37分 48秒	19950925～ 19951215	1,500	都市計画道路鈴見新庄線整備工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
額谷遺跡	集落跡	弥生	竪穴系建物10軒 掘立柱建物８軒 溝24条 土坑70基 落ち込み19基 小穴約300基	弥生土器 土師器（蔵骨器） 陶磁器 石器・石製品 鉄器 銭貨	特大型竪穴をはじめとする弥生時代後期の建物を多数復元した。 近世・近代の火葬場と火葬墓は調査例が少ない。
	火葬場・ 火葬墓	近世・近代			

Ⅰ　位置と環境

1　遺跡の位置

本書で報告する額谷（ぬかだに）遺跡は石川県金沢市額谷町に所在する。金沢市は石川県域の中央やや南寄りに位置する県庁所在地であり、県域の南東に連なる白山山系の山々から流下する犀川と浅野川の二つの主要河川に挟まれた地域が市域の中心となっている。江戸時代の加賀藩百万石の城下町として、また日本三名園の一つ兼六園を擁する情緒豊かな地方都市として著名である。

図1　石川県・金沢市の位置

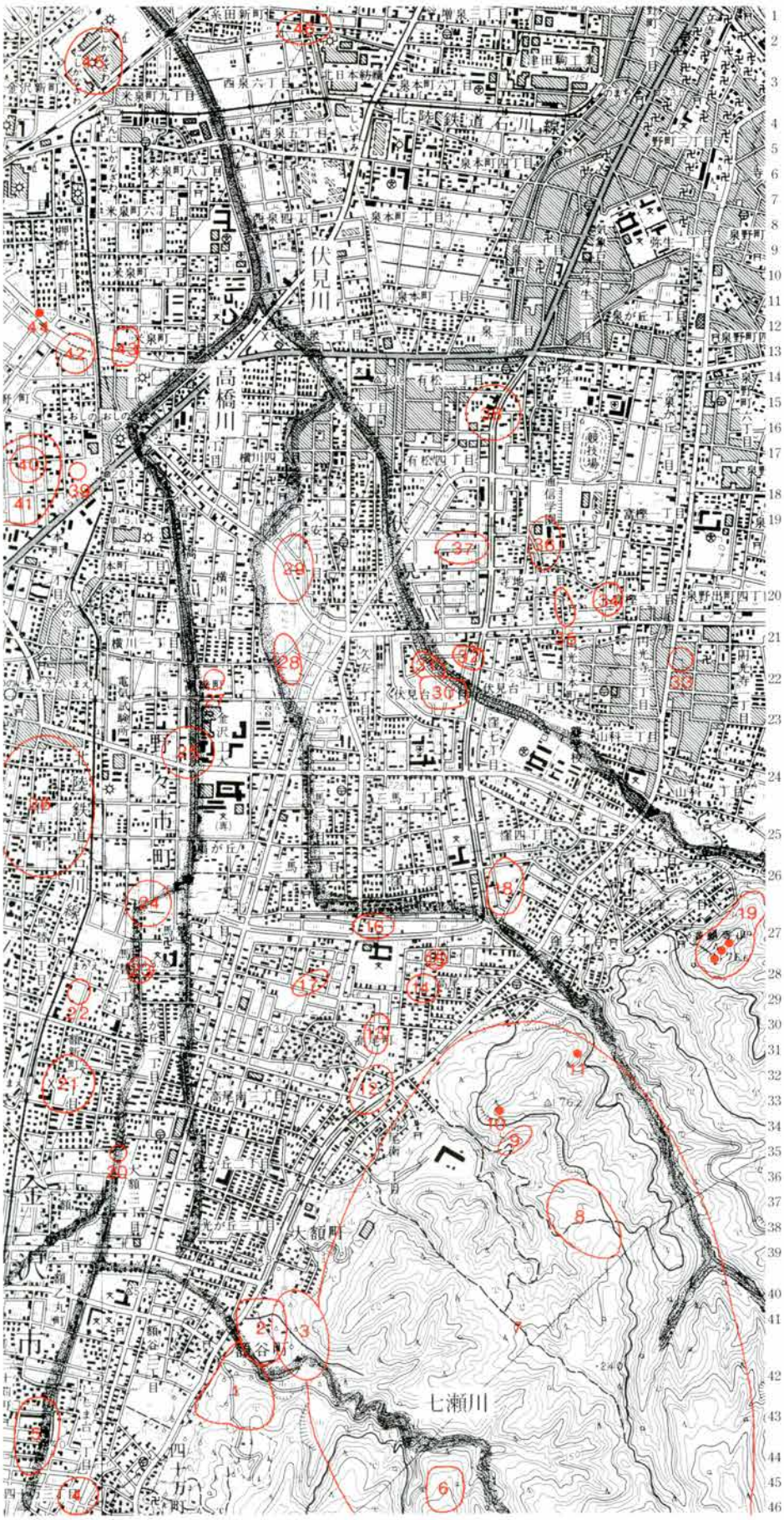
額谷町は、白山山系の先端部として市域の南西部に連なる富樫山地の麓に位置する集落である。山麓に接して広がる平野は手取川扇状地の東端部にあたり、扇頂から扇端へ向けて放射状に流れる中小河川が幾筋も形成されている。これらはかつての手取川の流路といわれ、平野を灌漑する用水として利用されている。額谷町の周辺の平野を潤す主な河川は、富樫用水の支流でもある高橋川である。高橋川は用水の取水口を設けている鶴来町から山麓に沿って北流し、伏見川と合流、さらに下流で犀川へ注いでいる。伏見川に合流するまでに、山地から流れ出る多くの谷川の水を受け入れていることが他の河川とは異なる特徴であり、額谷町の北東に流れ出る七瀬川も高橋川に注いでいる。周辺は近年、住宅や道路の建設、河川の改修などの開発が著しく、水田地帯であった景観は一変している。

なお、額谷町は神護景雲２（西暦 768）年創建と伝える延喜式内社である額東神社を鎮守としている。かつては額七か村の総社で、集落の東方の山麓にあったものが長享年間（西暦1487～1489年）の一向一揆による戦乱で消失し、集落内の現在地へ移転したという[1]。また、江戸時代から昭和初期にかけては火鉢等の材料として重宝された「額谷石」を産出しており、七瀬川上流の山中にはその石切り場が見られる。現在の額谷町は宅地化が進行する一方で、福祉施設や各種の公園を集積するなど「憩いの場」づくりにも余念がないようである。

額谷遺跡は集落の背後に迫る山地の先端部に立地している。昭和50年ごろに林道を開削した際に弥生土器が出土しているのが発見され、弥生時代の遺跡として周知されたという。正式な記録がないため詳細は不明であるが、おそらくは現在の墓地公園へ至る道路のことであろう。また、集落から山地へ上っていく小道の通った一帯を地元では「ドキザカ」と通称しており、おそらく土器が出土したことがあるのであろう。やはり詳細は不明ながら、額谷遺跡の一部である可能性が高い。

2　周辺の遺跡

額谷遺跡の周辺の遺跡は、発見されているものだけでも50遺跡を超える[2]。発掘調査が行われている遺跡も数多いが、それらの大半は開発行為に伴う緊急発掘調査である。遺跡の立地は、平野と山地



1 額谷遺跡(弥生・近世)
2 額谷ドウシンダ遺跡(縄文～平安)
1982年金沢市教委発掘調査
3 額谷カネカヤブ遺跡(縄文・弥生・古代・中世)
1992・1993年金沢市教委発掘調査
4 四十万遺跡(縄文)
5 三十苅遺跡(奈良・平安)
6 御廟谷墳墓群(中世) 県指定史跡
7 高尾城跡(室町)
8 高尾山寺遺跡(不詳)
9 狐青横穴群(古墳)
10 高尾古墳(古墳)
11 高尾ジョウザブロウ横穴(古墳)
12 高尾A遺跡(奈良・平安)
13 高尾天神堂遺跡(平安)
14 高尾新町遺跡(奈良・平安)
15 高尾新マトバ遺跡(奈良・平安)
16 高尾イシナ塚古墳(古墳)
17 高尾公園遺跡(平安)
1980年金沢市教委発掘調査
18 窪遺跡(古墳・中世)
19 満願寺山遺跡(弥生)
満願寺山古墳群(古墳)
満願寺山砦跡(中世)
20 大額キョウデン遺跡(弥生～中世)
1993年県埋文センター発掘調査
21 額新町遺跡(古墳・平安)
1993年金沢市教委発掘調査
22 馬替遺跡(縄文・奈良・平安・中世)
1992年金沢市教委発掘調査
23 扇台遺跡(弥生・古墳・平安)
1991・1992年県埋文センター,
1993・1995・1996年金沢市教委発掘調査
24 扇が丘ハワイゴク遺跡(縄文・弥生・平安・中世)
1990・1991年県埋文センター,
1997年野々市町教委発掘調査
25 扇が丘ゴショ遺跡(弥生・古代・中世)
1989・1990・1992年県埋文センター発掘調査
26 富樫館跡(中世)町指定史跡
1986・1988～1990・1992年～
野々市町教委発掘調査
27 高橋セボネ遺跡(弥生・奈良)
1990・1991年野々市町教委発掘調査
28 久安トノヤシキ遺跡(古墳)
29 久安さんまい川遺跡(平安)
30 円光寺向田遺跡(奈良・平安)
31 寺地向田遺跡(奈良)
32 寺地シンドロ遺跡(古墳～平安)
33 円光寺A遺跡(縄文)
34 寺地A遺跡(縄文・奈良・平安)
35 寺地B遺跡(奈良・平安)
36 有松C遺跡(縄文～古墳)
37 有松A遺跡(縄文)
38 有松D遺跡(古墳・平安・室町)
39 押野ウマワタリ遺跡(弥生)
1990・1991年野々市町教委発掘調査
40 押野館跡(室町)
41 押野タチナカ遺跡(弥生・古墳・中世)
1980～1984・1993・1994年
野々市町教委発掘調査
42 押野大塚遺跡(縄文・弥生)
1981・1992年野々市町教委発掘調査
43 米泉遺跡(縄文・弥生・平安)
1987年県埋文センター発掘調査
44 押野大塚古墳(古墳)
45 日本たばこ金沢工場遺跡(奈良・平安)
46 増泉穴田遺跡(弥生・古墳)

図2　額谷遺跡と周辺の遺跡（S=1/25,000）

に大別され、平野部に立地するものが圧倒的に多い。この傾向は遺跡の実態をある程度反映すると同時に、平野部への開発行為の集中をも表していると言える。時期的には縄文時代から室町時代まで、幅広い時代に見られ、平野部にはいくつかの時代が短期間ずつ断続的に複合した遺跡が多い。

縄文時代の遺跡は中期以前と後期以降で分布が大きく変化している。中期以前の遺跡は山地裾に立地する額谷カネカヤブ遺跡（図２の３）以外ではほとんど見られない。これに対して縄文後期以降の遺跡は馬替遺跡（22）など、平野部を中心に複数見られる。立地が弥生時代以降とほぼ共通する縄文後晩期の遺跡には初期農耕集落の存在も予測されるが、明確な遺構を確認した遺跡はほとんどなく、その実態は不明である。

弥生時代は平野部を中心にきわめて多くの遺跡が存在するが、前期や中期の遺跡はほとんど見られず、大半が後期、それも後期後半から終末の時期[3]に集中する。高橋セボネ遺跡（27）、扇が丘ゴショ遺跡（25）、扇台遺跡（23）、大額キョウデン遺跡（20）、額谷ドウシンダ遺跡（２）などでは、単位としてはやや小規模なものもあるが集落として認識できる遺構・遺物が確認されている。各遺跡は同時並存を考えてよいものが多く、水系を共有してブロック的にまとまった農耕集落群と理解したい。こうした弥生後期の状況は地下水が自噴するような金沢市域の平野部と共通しており、地形は異なるがどちらも初期農耕に適していたと見たい。私見では富樫山地の流水とも連絡した高橋川の比較的安定した水系が当地域の集落の発展を促した可能性を考えている。

古墳時代は前期の集落が平野部に、中後期の古墳・横穴が山地に見られるが、それぞれが対応するはずの前期古墳と中後期の集落はほとんど見つかっていない。前期古墳の所在は満願寺山古墳群（19）に求めたいところであるが、弥生時代の墳丘墓の可能性もあろう。また、扇状地扇端部で既に確認されている御経塚シンデン古墳群のように、平野部に築かれた古墳群の存在も考慮すべきである。

奈良時代後半から平安時代前半にかけて、当地域の遺跡数は再び増加するようであり、密度の高い分布状況は弥生後期のものにきわめて近くなっている。そして「お堂」を連想させる四面庇付掘立柱建物を検出した扇が丘ハワイゴク遺跡（24）、仏器的な須恵器や基壇材と思われる塼（せん）を出土した額谷カネカヤブ遺跡（３）の他、集落とは考えにくい山中に立地する遺跡が散見される等、信仰との関連が深まっていると言える。こうした様相は律令国家体制の弛緩に伴った初期荘園を核とする開発の進行と、密教を中心とした仏教の地方・民間への流行や、天長９（西暦 832）年には登拝道が開かれていたという白山信仰の広がりといった当時の社会背景をうかがわせる。

鎌倉時代から室町時代にかけての当地域は、加賀の中小武士団から出自して守護大名となった富樫氏の本拠であり、一向一揆衆との抗争で滅亡した地でもある。遺跡としては富樫館跡（26）、高尾城跡（７）など富樫氏に直接関連するものの他でも、富樫氏が加賀国守護として君臨した鎌倉時代末から室町時代にかけての館跡・集落が見られ、当時守護所が置かれ加賀の中枢として機能していたはずの地域として、きわめて重要な様相と言えよう。なお、富樫氏累代の墓所と伝える御廟谷墳墓群（６）については、高尾城の一部として形成されたとする高井勝巳氏の見解と、前代から継続してきた山間寺院とする宮本哲郎氏の見解がある[4]。

Ⅱ　経緯と経過

1　事業概要

本書で報告する額谷遺跡の発掘調査は、都市計画道路３・３・６鈴見新庄線の整備工事に起因する。この路線は東部環状道路、加賀産業開発道路とともに金沢都市圏の外環状道路に位置付けられる幹線道路である。このうち東部環状道路については建設省がすでに事業に着手しており、鈴見新庄線においても、街路事業、土地区画整理事業等による整備が順次進められている。

現在の鈴見新庄線は人家が連担しており、道路が曲がりくねっているうえ、幅員が狭いにも係わらず、約10,000台／12ｈと過密な交通量があり、人家への飛び込み事故や児童の交通事故が相次ぎ、交通の危険地帯となっている。また、周辺地区の宅地開発により、今後ますます交通量の増大が予想され、さらなる交通安全の確保が求められている。

このため、道路を幅員の広い車道と歩行者や自転車がゆったりと通行できる歩道に分離し、交通の円滑化と額谷・四十万地区の生活環境の保全と快適な町づくりを目的とし、石川県土木部都市計画課（以下、都市計画課）が推進している金沢市街地都市計画事業の一環として、幹線道路を整備する計画が策定されたものである。道路の幅員は25ｍで、幅員構成は自転車歩行者道4.5ｍ×２、路肩0.5ｍ×２、車道6.5ｍ×２、中央帯２ｍである。

2　分布調査

石川県立埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）では、事業の施工を担当する石川県金沢土木事務所（以下、金沢土木事務所）の工事計画の提示に対して、埋蔵文化財の有無を事前に確認する分布調査を実施する必要があり、施工についてはその結果をもって協議する方針で対処してきた。埋蔵文化財分布調査は、了解が得られた区間から順次実施している。これまでに分布調査を実施した七瀬川から北側の区間では、遺跡は発見されていない。

本書で報告する額谷遺跡の発掘調査に係る工事区間については、金沢土木事務所は平成７年１月６日付けで事業区間の埋蔵文化財分布調査を埋文センターに依頼した。埋文センター企画調整課では区域内の埋蔵文化財の分布状況について資料調査を行ったところ、周知の額谷遺跡（県番号1104）の範囲に重複していることが判明した。埋文センターは額谷遺跡の分布状況を試掘調査で確認し、その結果をもって再度協議する必要があると判断し、バックホーを使用した試掘調査を計画、金沢土木事務所担当者と協議の上、平成７年２月13日に実施した。調査区域は七瀬川から南側の用地買収が完了した区間を対象にし、調査費用については金沢土木事務所が負担した。

その結果は、区間の南側で埋蔵文化財の分布が確認され、額谷遺跡の一部であることが判明した。調査結果は埋文センターが平成７年２月20日付けで金沢土木事務所に回答し、今後の対応については、埋蔵文化財が分布する区域については工事前に発掘調査が必要であるとした。調査結果をもとに金沢土木事務所・埋文センターが協議した結果、発掘調査については、平成６年度内は埋文センターの発掘調査スケジュールがすでに完了しているため実施が不可能であり、翌平成７年度以降に実施することで合意となった。

3　現地調査

額谷遺跡の発掘調査については、平成７年４月28日付けで金沢土木事務所から依頼があり、埋文センターでは同年後半の現地調査を計画し、回答した。

現地調査は、沢田まさ子（埋文センター調査第一課主任主事、以下職名はいずれも当時）、安英樹（同主事）が担当し、浅野豊子（同嘱託）が補佐した。統括は中島俊一（調査第一課課長）、新屋康夫（総務課課長）が行った。また、埋文センターが実施している市町村埋蔵文化財専門職員長期研修の実地研修として、千場勉（能登島町教育委員会）が調査に参加している。

［参加作業員］赤木晴信、浅田恵子、伊藤直子、池上治夫、乙　澄範、加成美千代、北村正作、北本寛、熊野淳夫、桑本ツタ子、近藤　章、坂井和子、坂井恵美子、坂野紀子、三納久子、嶋崎博美、下田多美恵、高村綾子、高山良子、寺西朝子、中野恵美子、中野キミヨ、西村雅恵、西村靖子、後本晴美、橋浦一枝、平嶋　正、堀　あかね、松本和雄、松本金一、水岡美紀、宮川孝子、山岸祥子

現地調査に際しては、事前に金沢土木事務所担当者と打ち合わせを行ない、用地境・調査範囲の確認、立木の伐採、排土の処理、仮設事務所の設置場所、作業員の手配等について調整したのち、平成７年９月25日から着手した。表土の除去はバックホーを用いて行い、遺構検出・掘り下げから作業員を投入した。調査の状況からは、調査範囲の一部変更が必要と判断され、金沢土木事務所の了解を得て、調査区を一部北側へ拡張し、また調査区外の斜面にトレンチ調査を行った。図化に用いる基準点の測量及びグリッドの設定は業者委託で10月17・18日に行った。図化については、ラジオコントロールヘリコプター撮影による空中写真測量図化を業者委託で12月９日に実施した。作業は12月15日に完了、調査区を引き渡し、現地調査は終了した。調査面積は約1,500㎡である。

調査の成果については12月７日に報道機関に発表し、12月10日に一般を対象とした現地説明会を実施している。現地説明会当日は好天に恵まれ、約100名の参加者があった。なお、当日は金沢市教育委員会から額谷カネカヤブ遺跡の出土遺物を借り受けて展示し、好評を博している。

4　屋内整理

平成７年度は現地調査の終了後、空中写真測量図の校正作業、出土遺物の整理作業を行った。スタッフは現地調査と同じである。出土遺物の整理作業は主に社団法人石川県埋蔵文化財保存協会（以下、埋文保存協会）に委託して行い、洗浄作業を平成８年１月29日から３月29日まで行った。埋文保存協会の作業担当者は岡本晃、浅井勝郎、末富しげ子である。

平成８年度は６月13日付けで金沢土木事務所から依頼を受けて、出土遺物の整理作業を行った。作業は安が担当し、沢田（調査第一課主査）、浅野が補佐した。統括は小嶋芳孝（調査第二課課長）、新屋康夫（総務課課長）が行った。出土遺物の整理作業は主に埋文保存協会に委託して行い、記名、分類、接合、実測、遺物・遺構実測図のトレース作業を平成８年９月２日から９月30日まで行なった。埋文保存協会の作業担当者は松田智恵子、小林なお子、尾崎昌美、横田真佐子、馬場正子、北康子である。

平成９年度は６月９日付けで金沢土木事務所から依頼を受けて、出土遺物の写真撮影、原稿執筆、挿図・図版作成を行い、発掘調査報告書を編集、印刷し、刊行した。作業は安が担当し、沢田（調査第一課調査専門員）、浅野が補佐した。統括は小嶋芳孝（調査第二課課長）、新屋康夫（総務課課長）が行った。

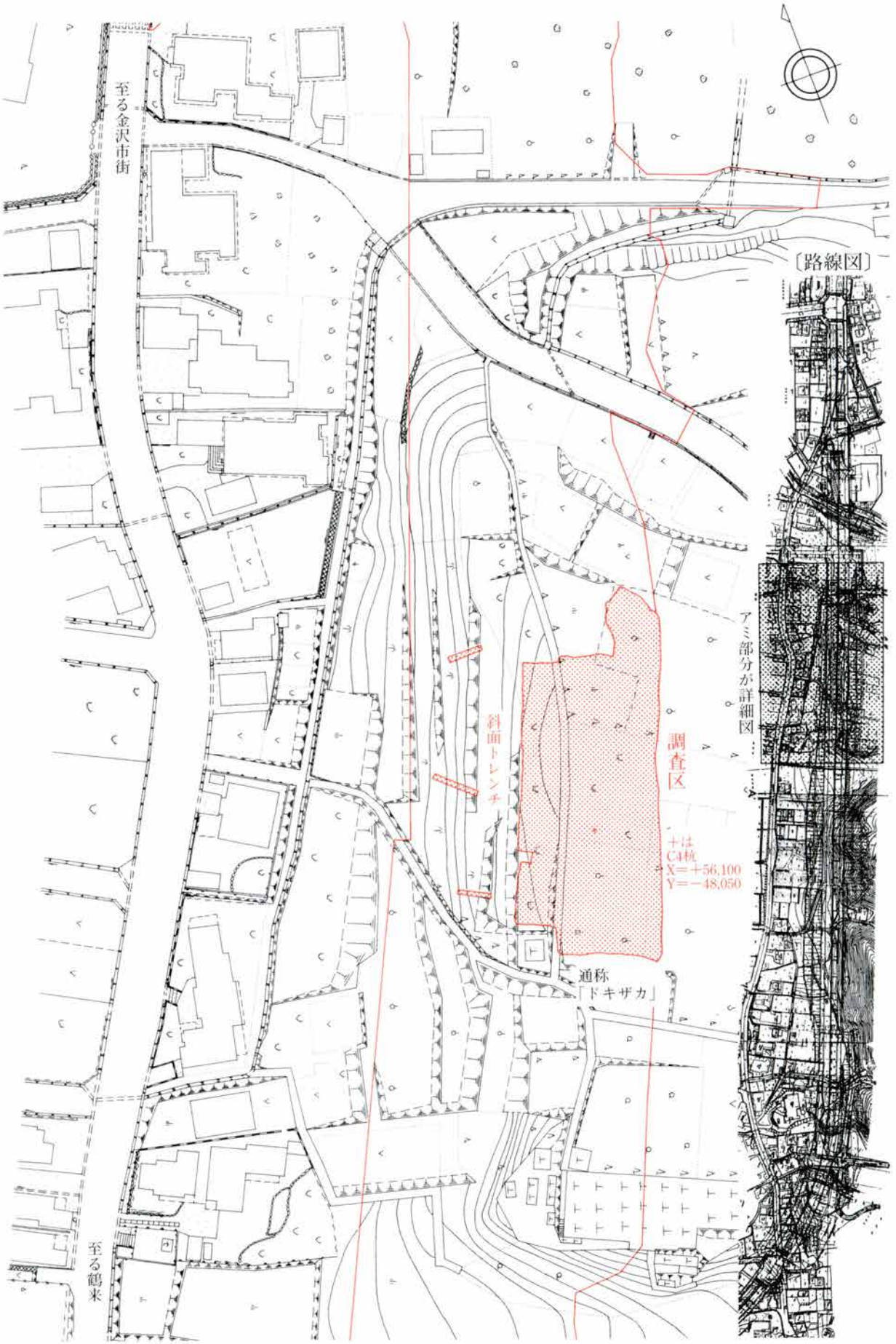


図3　調査区の位置（詳細図 S＝1/1,000・路線図 S＝1/7,000）

Ⅲ　調査の概要

1　調査区の設定

現地調査の方法はグリッド法による全面発掘調査である。グリッドは10ｍ方眼で、主軸を国土座標の東西南北方位に沿わせて設定した。基準点は東西軸を算用数字（０～６）、南北軸をアルファベット大文字（Ａ～Ｅ）で表記して組み合わせた区割りを行い、グリッド名は北西の基準点をわりあてた。グリッドと座標の対応は、Ｃ４杭がＸ＝＋56,100、Ｙ＝－48,050である。基準点「０」はグリッド設定後に調査区を拡張したために生じた。また、グリッド主軸に対して道路線形が斜行しているため、用地境界に接するグリッドの面積は他と均等にはならず、Ａ０・Ａ１・Ａ２・Ａ６・Ｂ０・Ｄ５・Ｄ６・Ｅ３・Ｅ４・Ｅ５・Ｅ６区となるグリッドは調査区外に位置し、実際には存在しない。

2　微地形と層序

調査区は富樫丘陵の先端部の斜面に位置しており、眼下の平野部はもとより、好天時にはその先の日本海までを視野に含めるパノラミックな眺望を誇る。標高は64～66ｍを測る。地形は北、南、西の三方に下降しているが、調査区内の傾斜は等高線の間隔が示すように非常に緩やかであり、概ね水平方向６ｍに対して垂直50㎝程度の比高差を測るに過ぎない。調査区の東側、すなわち山地側へはしばらく緩傾斜地が続いており、畑、果樹園として利用されている。調査区の北端及び南端では等高線が巻き込んでおり、谷が入り込んできている。また、平野部へ向かう調査区の西側は調査区外で急激に下降する急崖となる。層序は厚さ20～30㎝の表土を除去するとすぐに安定した地山となり、遺構が検出できた。遺物包含層は確認できなかった。

以上から、調査区は平野へ向かって張り出している尾根筋に相当する地形と思われる。ただし、極端な緩傾斜については自然地形とは考えにくい。層序からみても、開墾された時点の切り盛りで削平を受けたものと思われ、後述する調査の成果ではっきりと証明されている。同様に、調査区北方の谷は現状ではあまり起伏が目立たないが、調査では急激に落ち込む地形を確認しており、開墾時に埋められている可能性が高いものといえよう。

3　遺構と遺物

発掘調査の結果、溝24条、土坑70基、落ち込み19基、小穴約300基等の遺構が検出された。これらの遺構のうち、主に溝、小穴について配置を検討したところ、調査区の東半部に弥生時代後期の建物跡が多数存在する集落となることが判明し、竪穴系建物[5]は10軒、掘立柱建物は８軒が復元できた。さらに丘陵に立地する弥生時代の環濠集落となる可能性を考えて、調査区西側の急斜面にトレンチを設定したが、遺構は確認されなかった。その他の遺構では、調査区の西端に火葬場と思われる落ち込み、火葬に関係する土坑、火葬墓と思われる土坑があり、出土した陶磁器から、近世・近代の時期と確認された。

出土した遺物は総量でコンテナバット10箱におよぶ。内容は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、近世・近代土師器、鉄器、石器、石製品、銭貨、動物遺体、植物遺体、焼土塊である。量的には弥生時代後期の集落に伴う土器が圧倒的に多く、その他の遺物は少ない状況である。

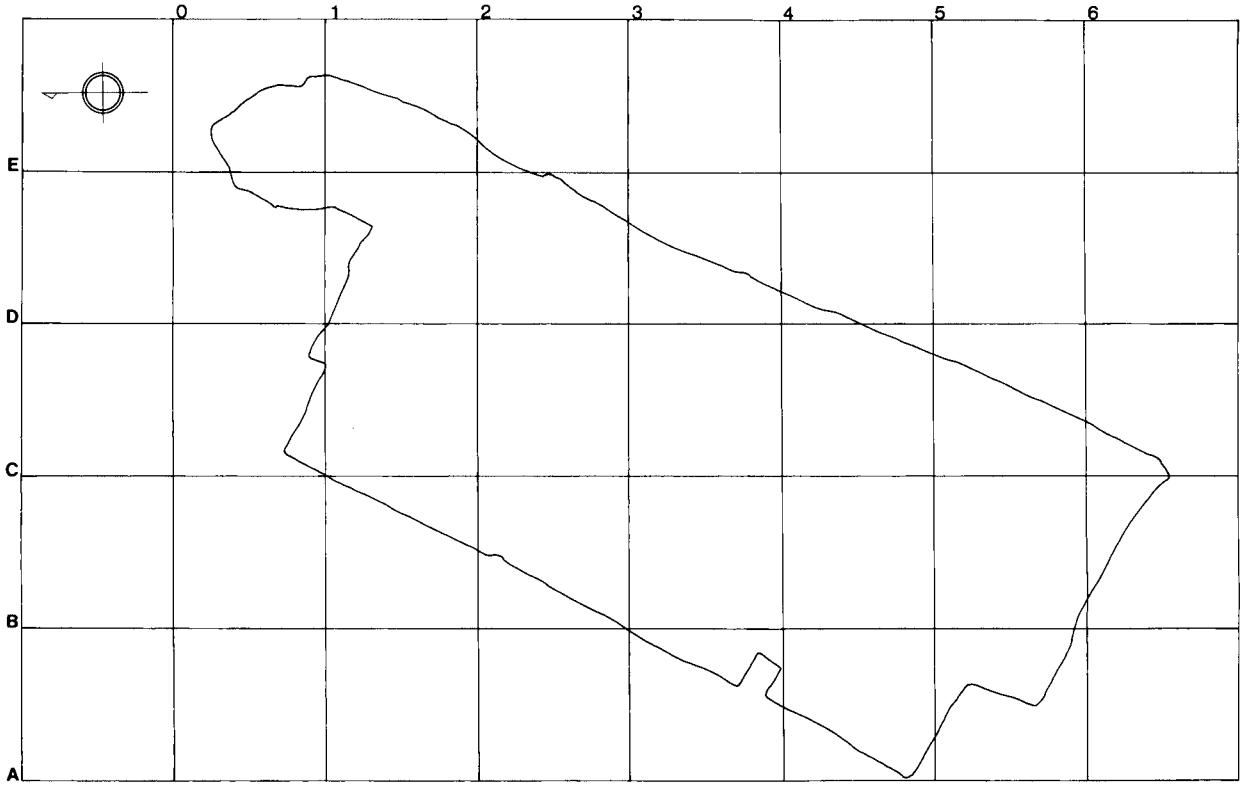


図4　調査区のグリッド（S＝1/500）

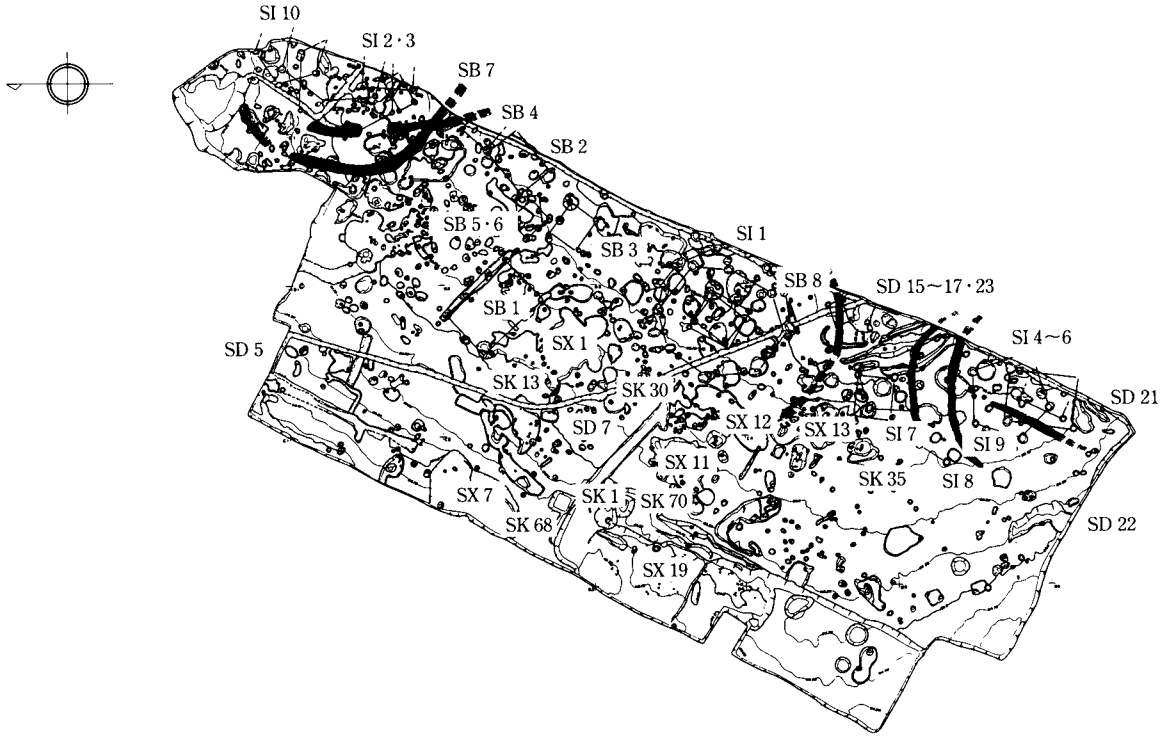


図5　主な遺構の位置（S＝1/500）

図6　調査区全体（1/300）

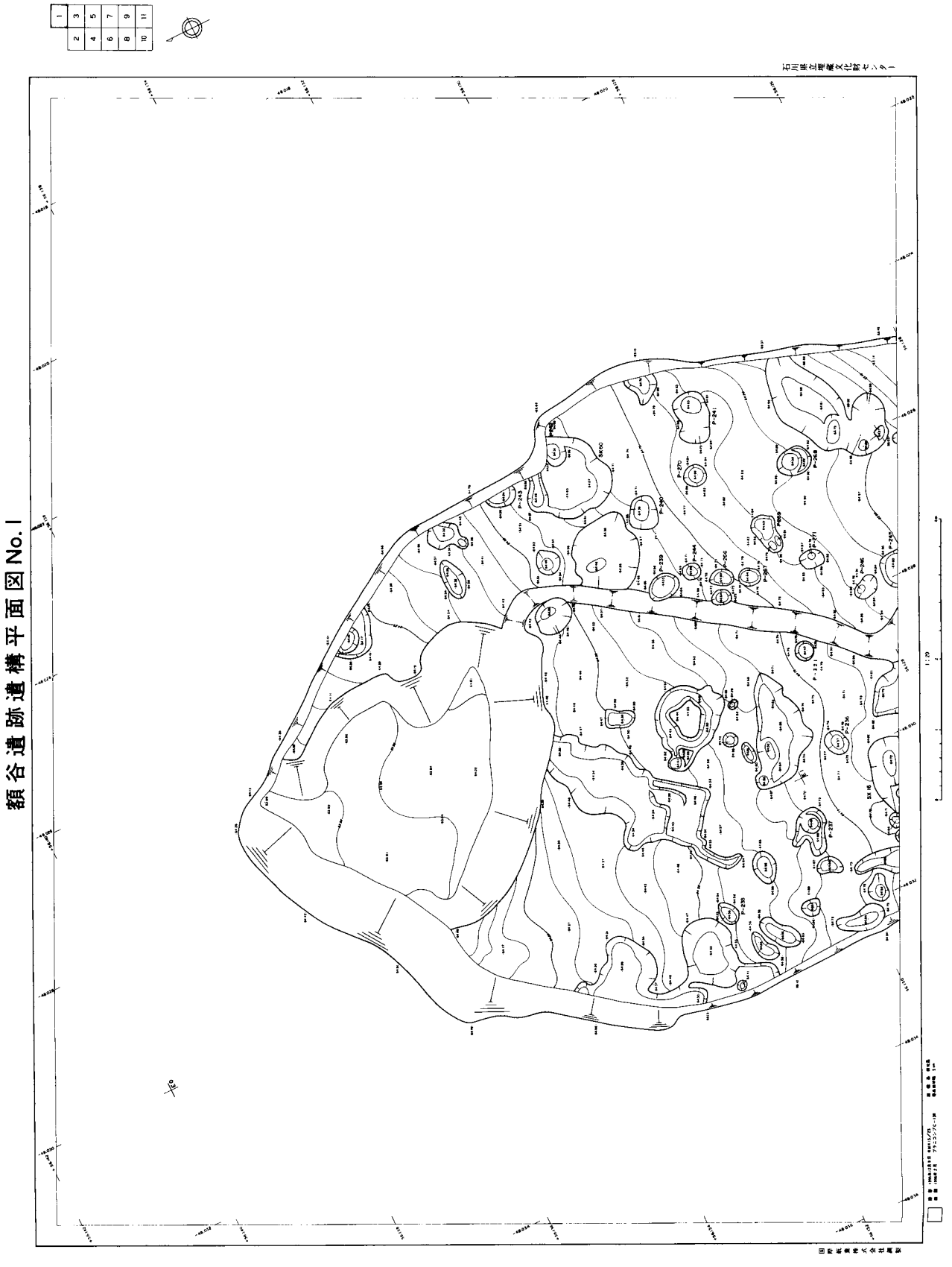


図7　調査区分割1（1/80）

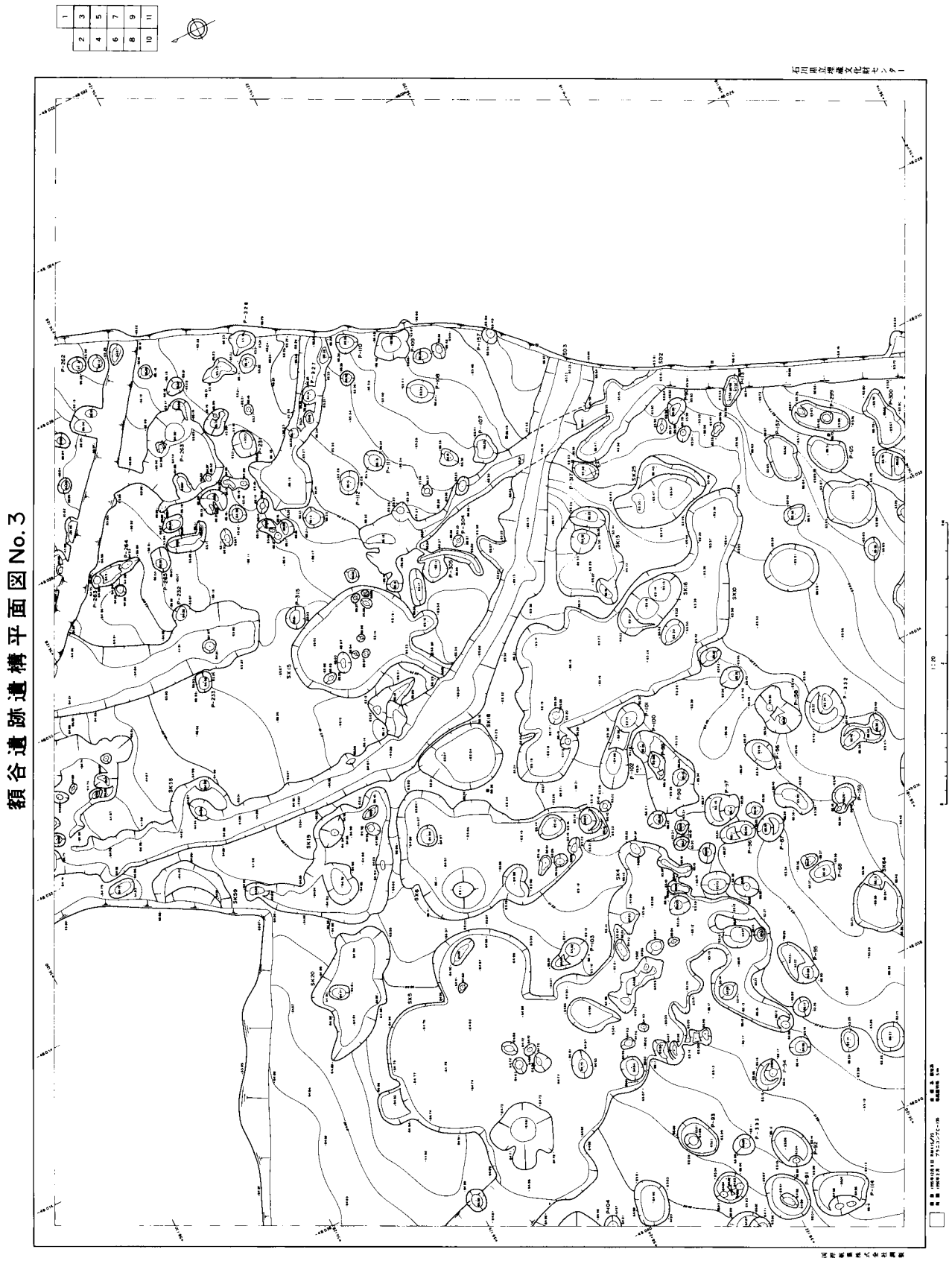


図8　調査区分割3（1/80）

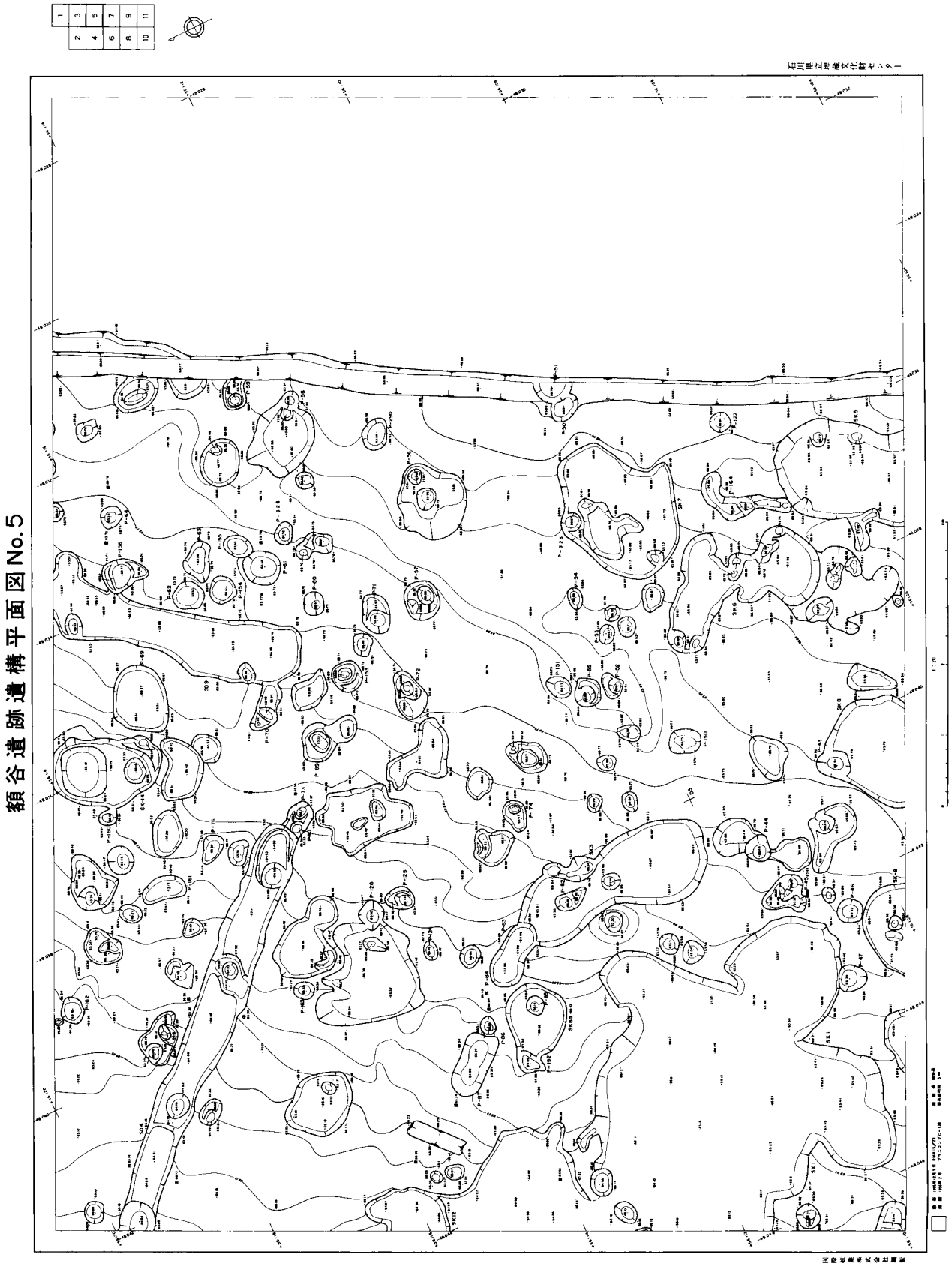


図9　調査区分割5（1/80）

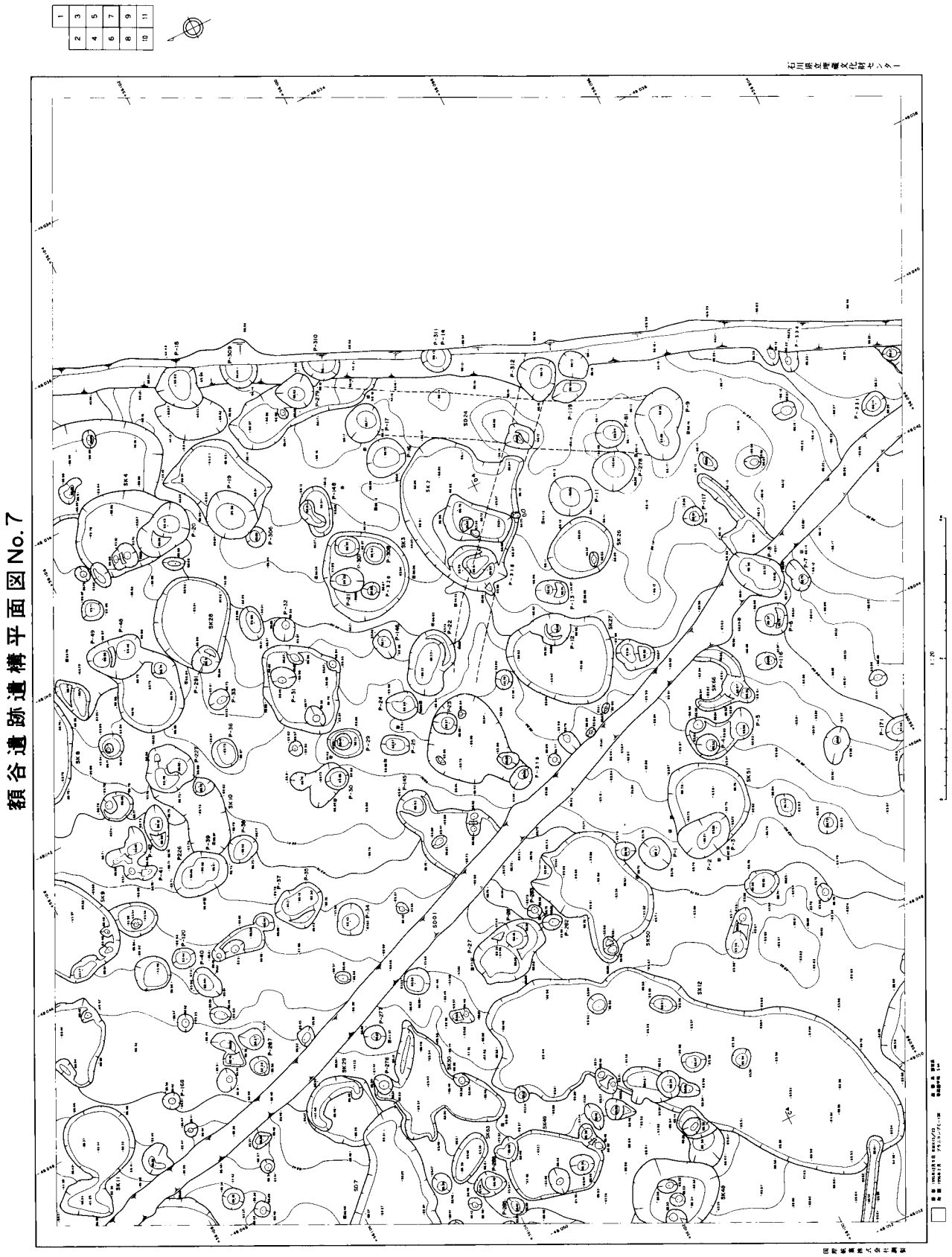


図10　調査区分割７（１/80）

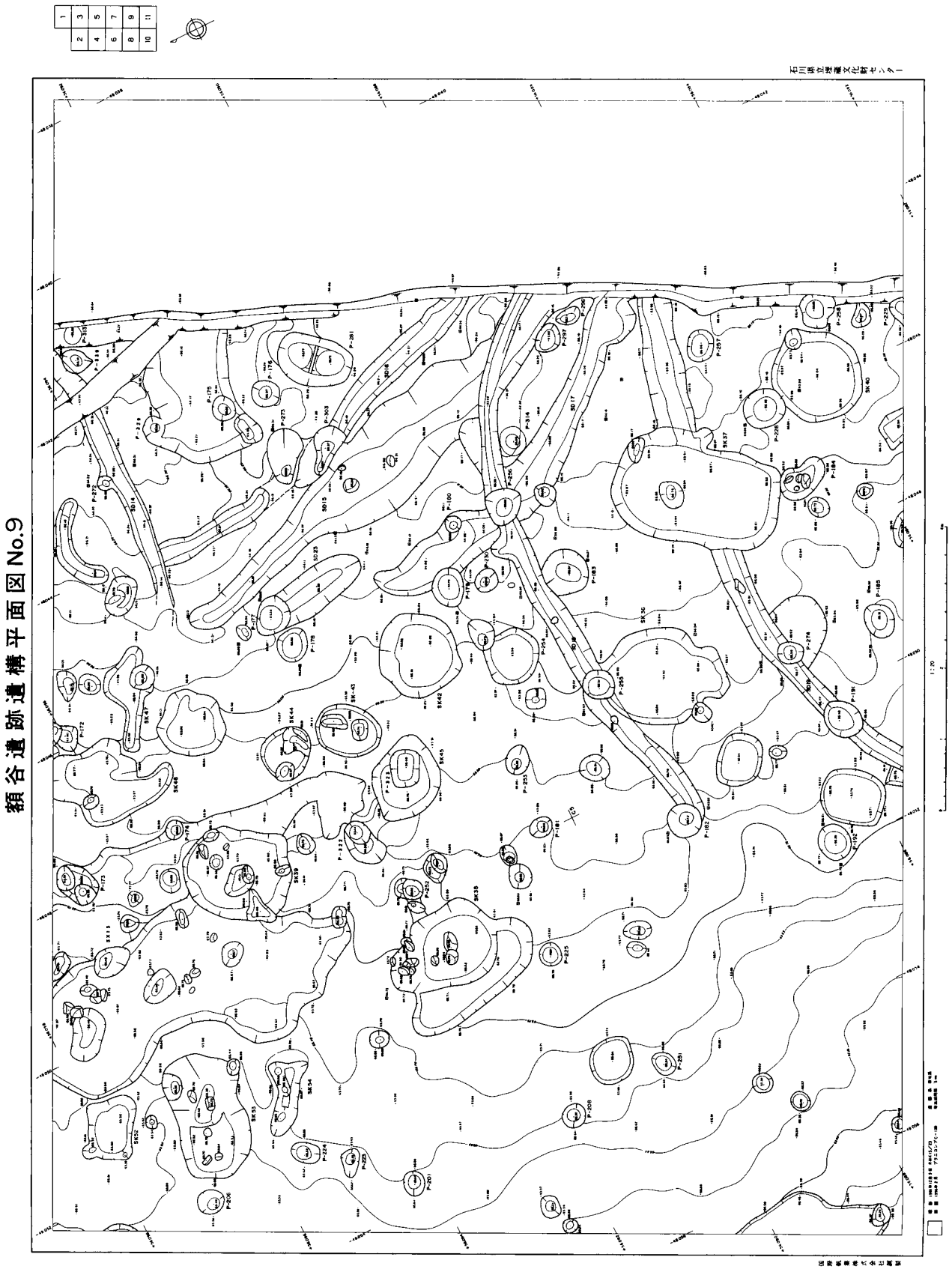


図11　調査区分割9（1/80）

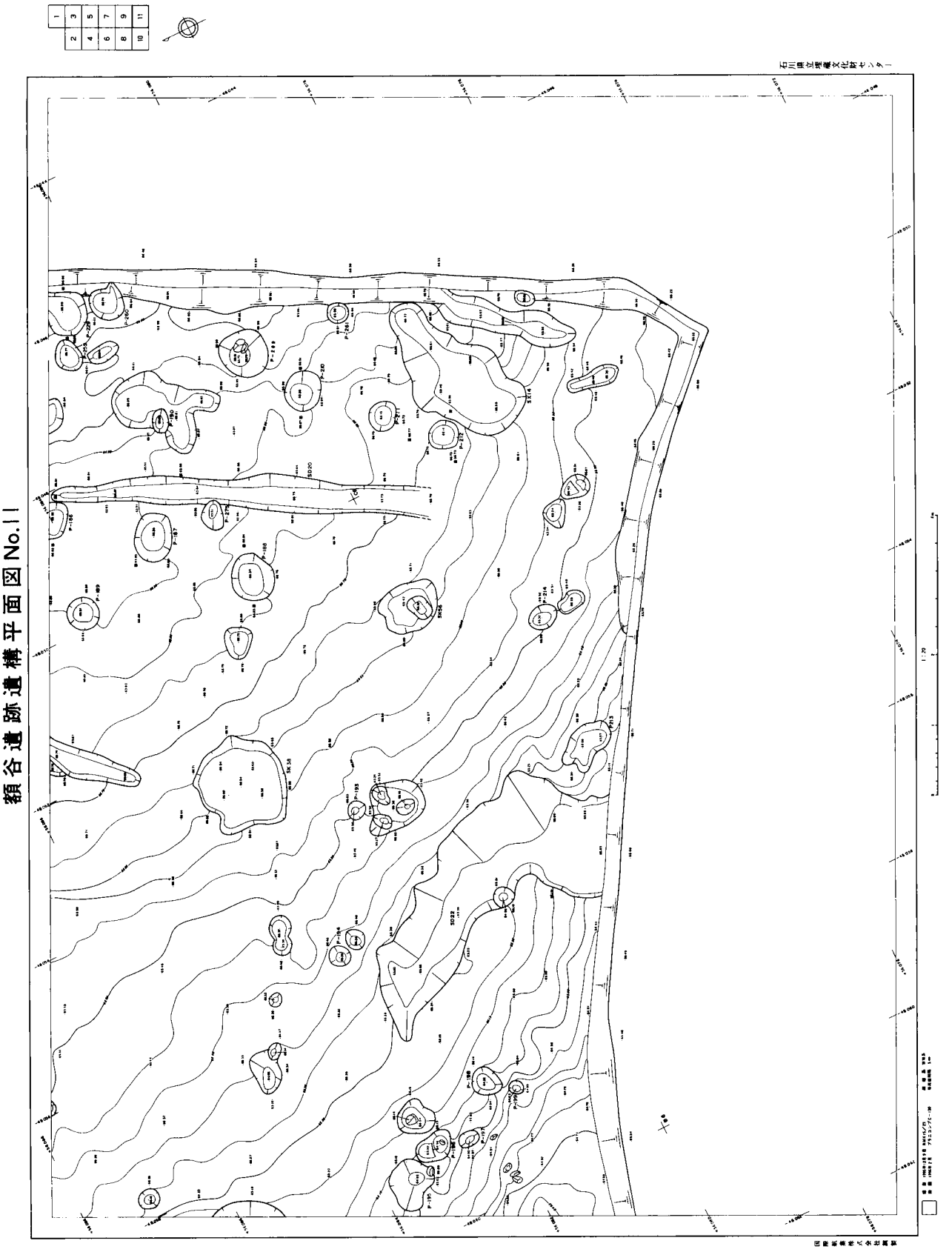


図12　調査区分割11（1/80）

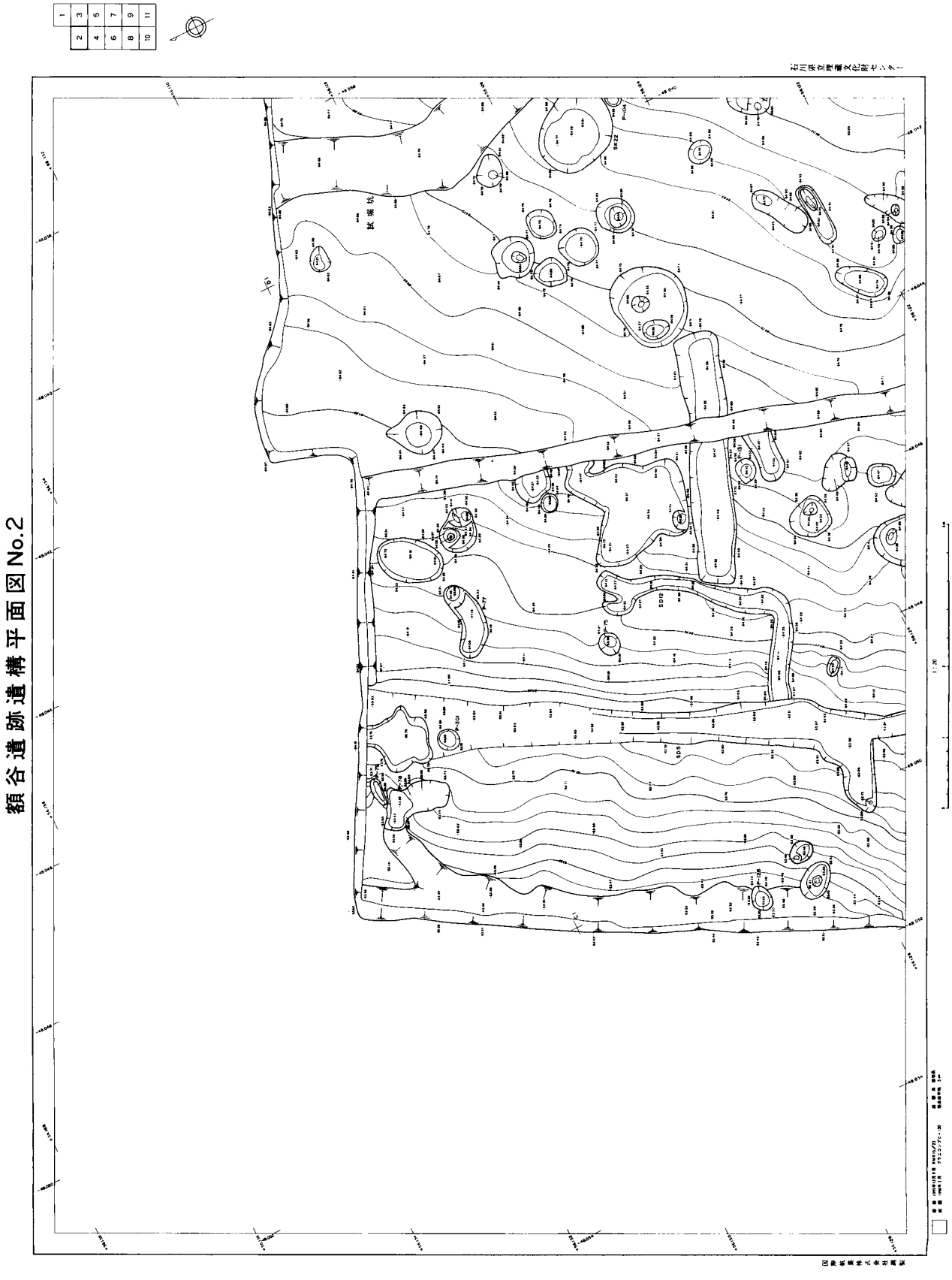


図13　調査区分割２（1/80）

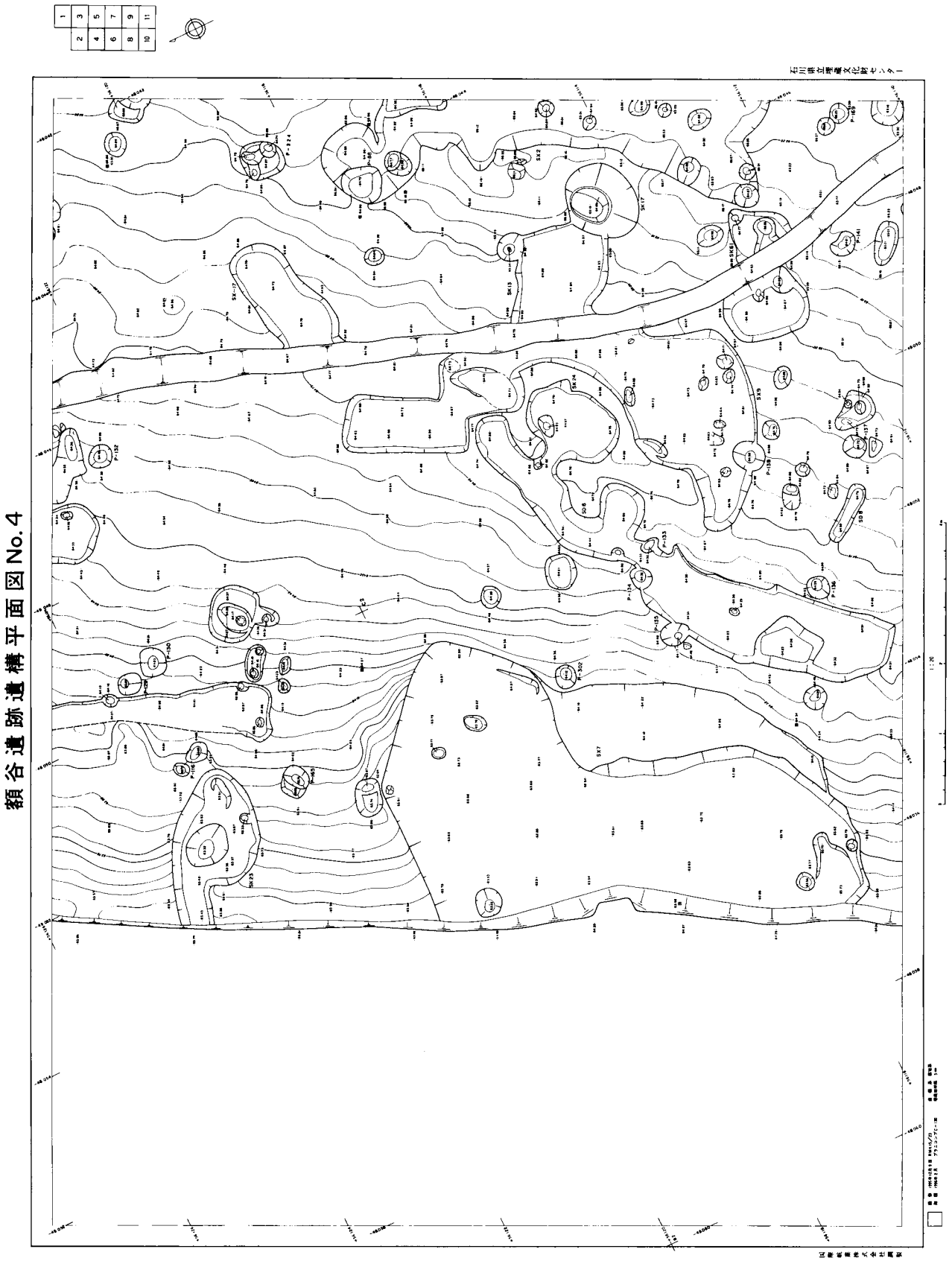


図14　調査区分割4（1/80）

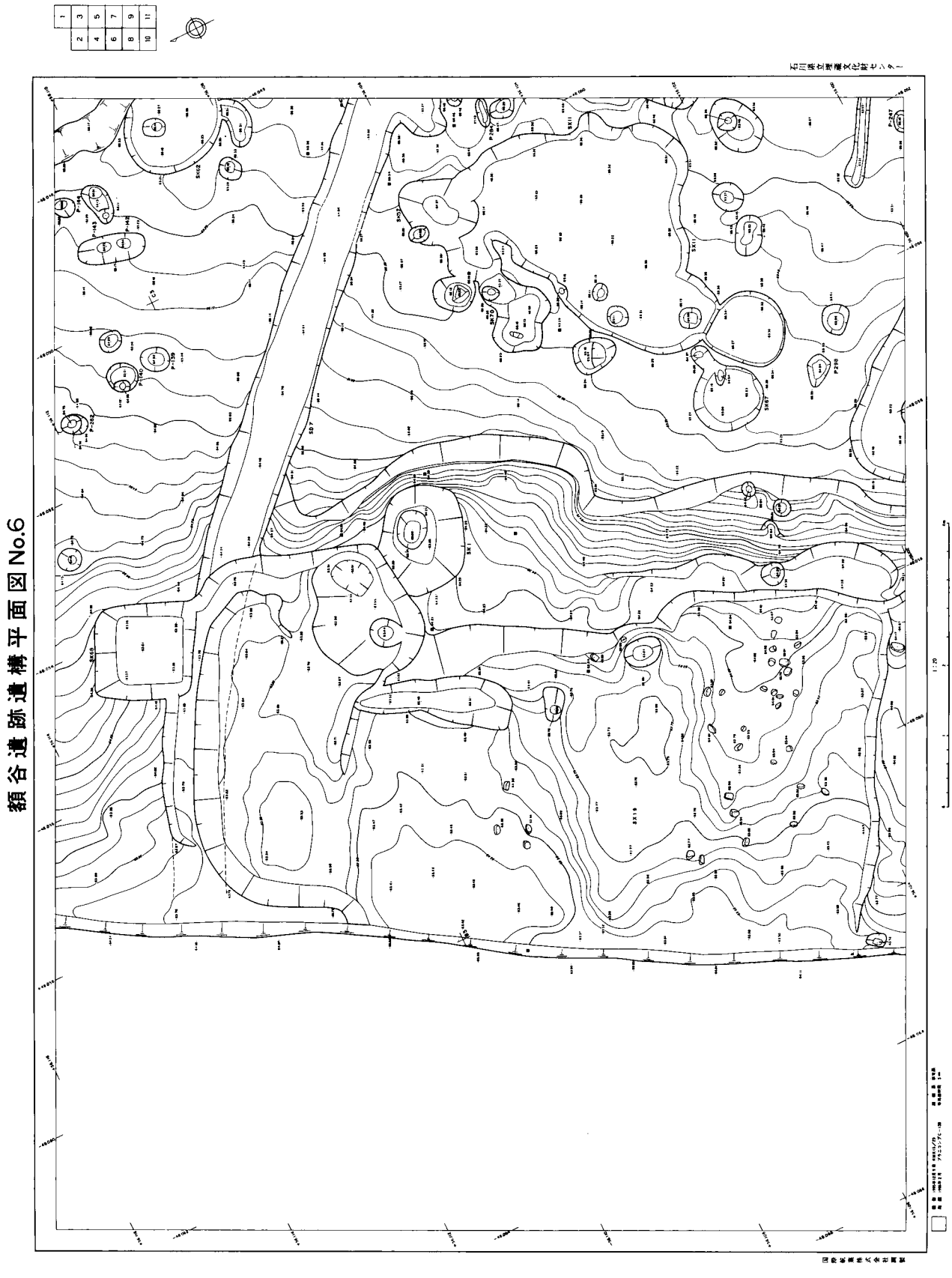


図15　調査区分割6（1/80）

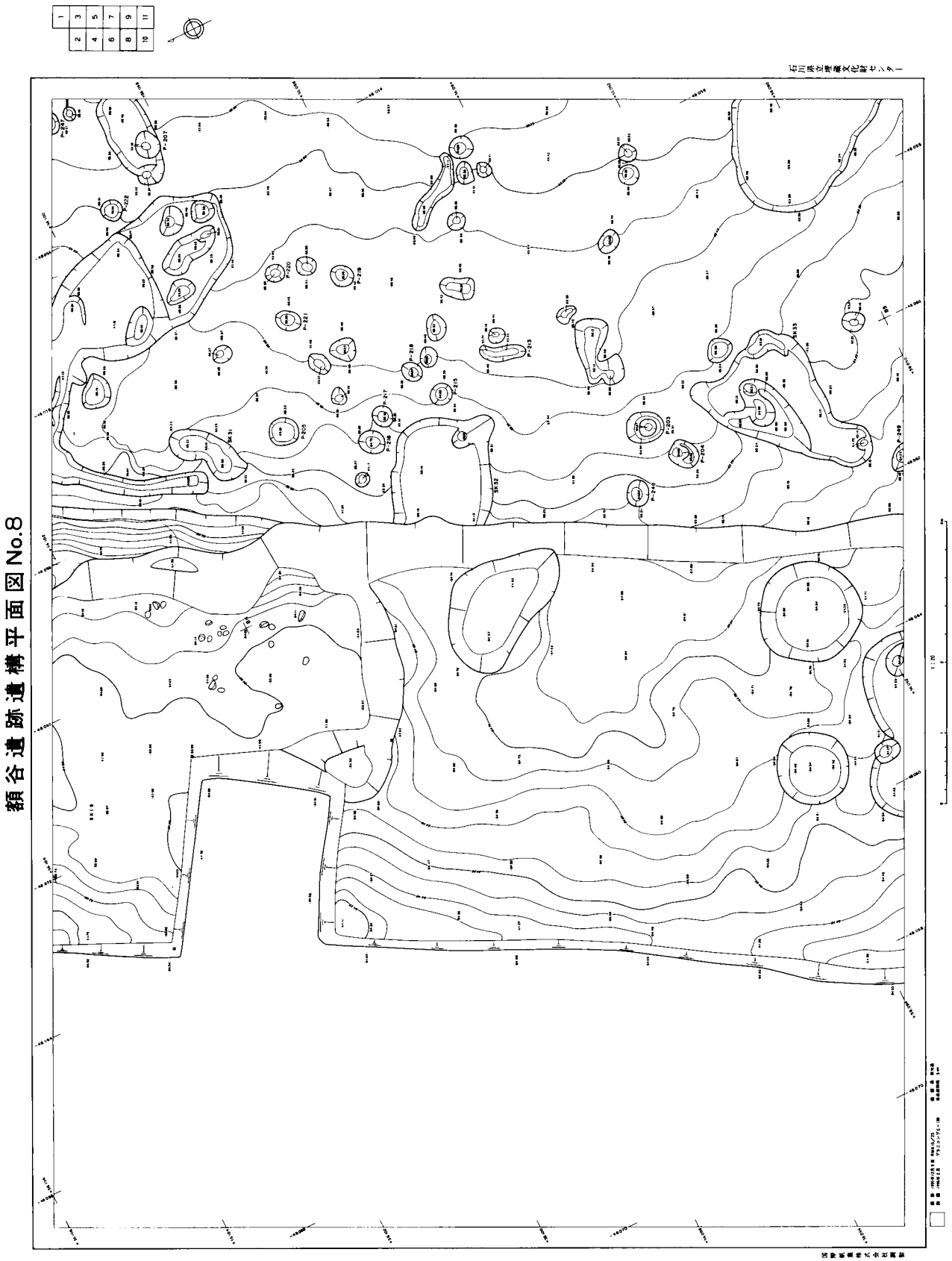


図16　調査区分割８（１/80）

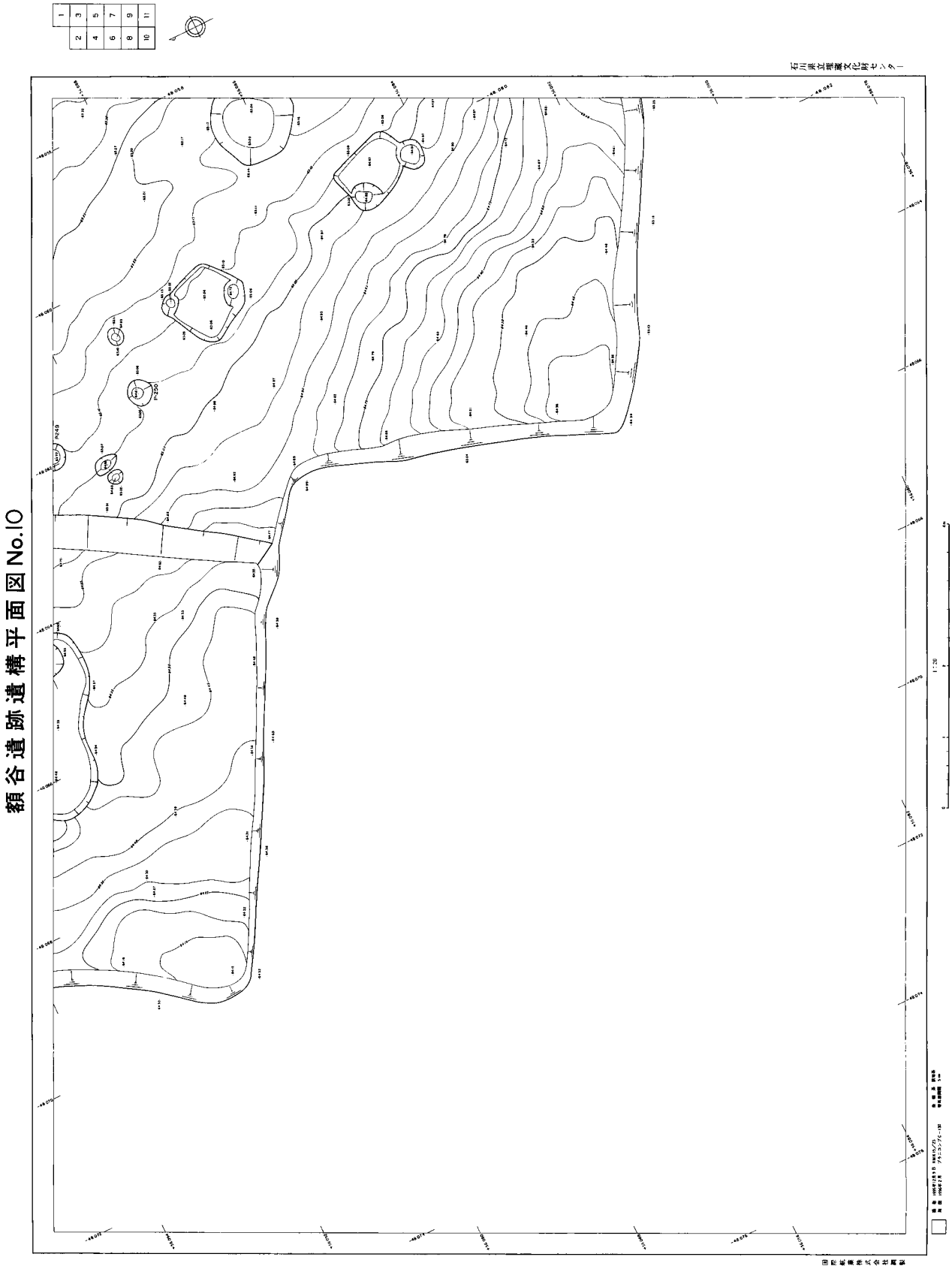


図17　調査区分割10（1/80）

Ⅳ　遺　構

1　調査方法

現地調査で検出された遺構は、その形状に応じてＳＤ（溝）、ＳＫ（土坑）、ＳＸ（落ち込み）、Ｐ（その他小穴など）の略号と算用数字（１～）の番号で表記したが、その区分は多分に感覚的でそう厳密なものではない。調査方法としてはまずプランを検出し、基本的に半掘、あるいは畦を残して断面形、埋土堆積を観察し、必要に応じてメモもしくは実測図を作成した後、全掘する方針を採った。最も高密度で分布するＰのなかには柱穴も相当量存在すると感じられたが、一帯の削平と遺構の錯綜が著しかったため、建物の存在は竪穴系建物、掘立柱建物ともに群としての配置や規模を大まかに把握したにすぎず、確定するには至らなかった。遺構の図化は空中写真測量によって縮尺1/20で行い、等高線は５㎝ごとで原図を作成し、全体図は原図をもとに縮尺1/100で編集している。

建物遺構は現地調査終了後に空中写真、平面図、土層図などの記録資料を検討することによって復元した。建物の検討は規模、埋土堆積の似通った主柱穴の配列と周溝の組み合わせを中心に行い、各種遺構の組み合わせで一軒の建物を構成するものを包括してＳＩ（竪穴系建物）、ＳＢ（掘立柱建物）に区別して表記し、算用数字の番号を振った。また、同一建物の建て替えが想定される場合、アルファベット小文字（ａ～）で細分した。以下に担当者の理解を提示していくが、建物遺構の軒数、規模、配置を確定するにはまだまだ検討が不十分と感じている。本書では図７～17、表１～４など遺構の記録データもできる限り掲載して、識者の後日の検討に委ねることにしたい。

2　竪穴系建物

ＳＩ１ａ・ｂ・ｃ（図18・19、写真Ⅲ）

Ｃ３区～Ｄ４区にかけて位置する。周溝ＳＤ14とそれに伴う柱穴で設定した。ＳＤ14は幅21～37㎝、深さ６～11㎝の浅い溝で、埋土は暗褐色粘質土である。建物の南西側でのみ確認でき、他の部分は削平されたと思われる。断面形状からは壁周溝と判断される。重複する遺構との関係はＰ272よりも後出することが確認できている。

主柱穴は概ね径50～70㎝、深さ50㎝前後で、埋土は暗褐色か黒褐色の粘質土を基調とする。ａ～ｃの３組の配置を復元しており、北から反時計回りでａはＰ227・Ｐ37・Ｐ26・Ｐ１・Ｐ６・Ｐ278・Ｐ17・Ｐ19の８本、ｂはＰ226・Ｐ27・Ｐ３・Ｐ８・Ｐ９・Ｐ309・Ｐ20・Ｐ49で、ｃはＰ39・Ｐ27・Ｐ２・Ｐ８・Ｐ９・Ｐ18・Ｐ20・Ｐ48で同じく８本かそれ以上である。ｂ・ｃは柱がほぼ同一位置で、ａとは位置をずらしており、ｃの柱穴は間層に焼土層があるなど焼土を顕著に含む堆積パターンが特徴的である。Ｐ26・Ｐ27の重複などから、ａ・ｂ・ｃの順の先後関係とわかる。

これら以外の遺構として、建物中心部付近にも柱穴が多く確認された。まず、主柱よりも内側で４本配置が２組確認され、概ね径30～50㎝、深さ20～40㎝を測り、主柱よりもひとまわり小さくて浅い。埋土と位置関係からａかｂにＰ29・Ｐ319・Ｐ12・Ｐ320が、ｂかｃに一つは攪乱で失われてＰ30・Ｐ13・Ｐ21がそれぞれ対応し、副柱的な柱穴と推定する。内側の主柱のさらに内側に位置する小穴のうち、ほぼ中央に位置するＰ22は径50㎝、深さ40～60㎝を測り、灰穴炉か、ほとんど類例がないが心柱的な柱穴と考えたい。Ｐ24・Ｐ25は埋土に焼土を含む小穴で、灰穴炉の可能性がある。なお、ＳＫ２は主柱穴と同様に多量の焼土が出土しており、建物に付属する土坑となる可能性が高い。ＳＫ３につ

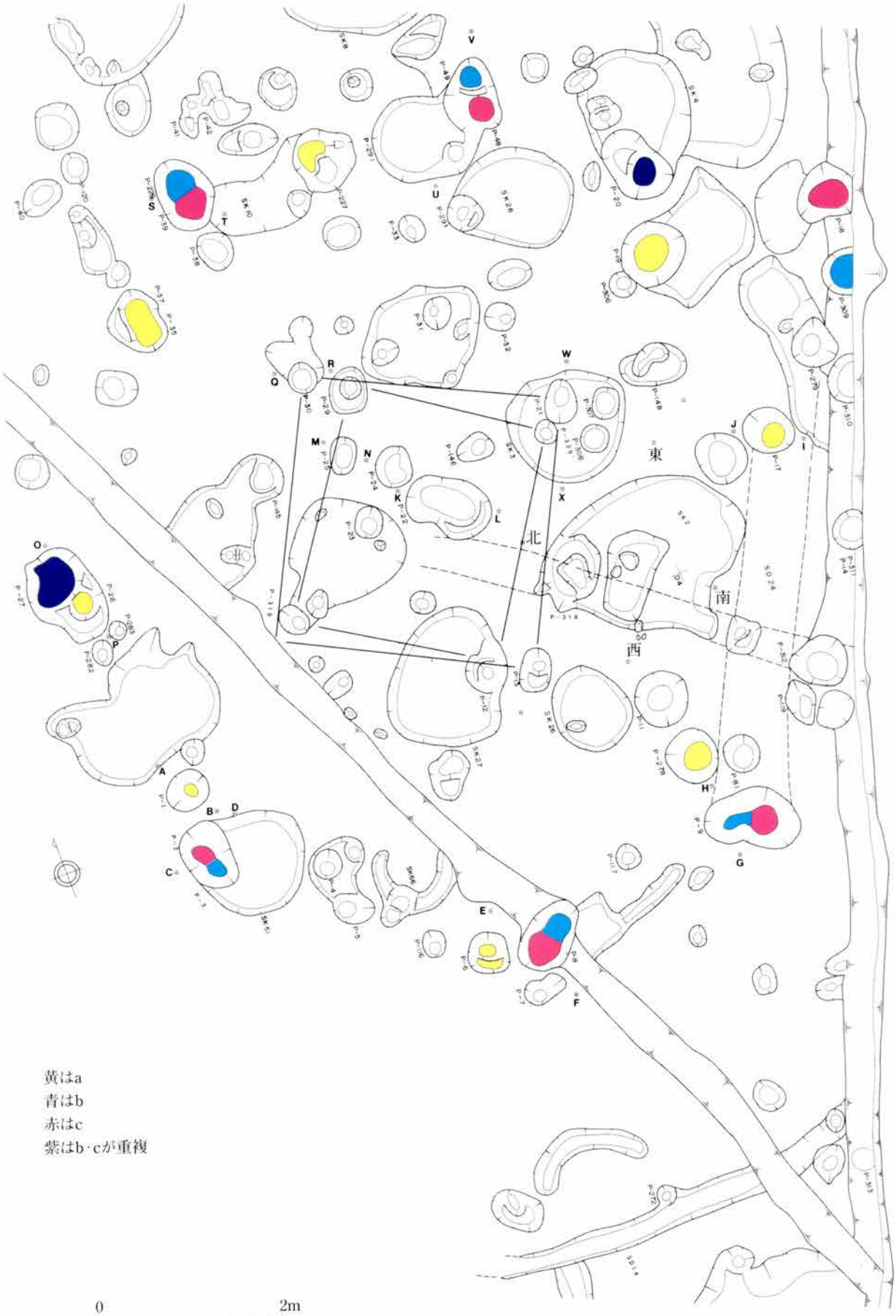
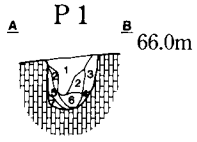
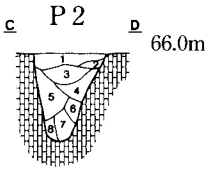


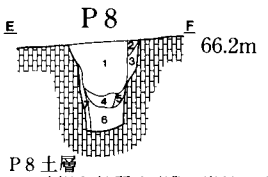
図18　竪穴系建物SI 1（1/60）



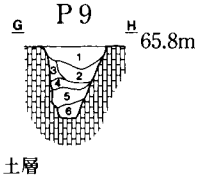
P 1 土層
1 黒褐色粘質土
2 黒褐色粘質土(地山ブロック少量、炭含む)
3 褐色粘質土(地山ブロックを多数含む)
4 褐色粘質土(3より地山ブロックの含み少ない)
5 3と同じ
6 暗褐色粘質土(2より地山ブロックの含み少ない)
7 4と同じ



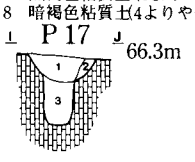
P 2 土層
1 黒褐色粘質土
2 黒褐色土(木根により地山ブロック含む)
3 赤褐色焼土(炭多く含む)
4 暗褐色粘質土(小地山ブロック多く含む)
5 褐色粘質土(地山・暗褐色土混合のブロック含む)
6 黒褐色粘質土(炭・地山ブロック少し含む)
7 黒褐色粘質土(6よりシルト質強い。炭含む)
8 暗褐色粘質土(4よりやや粒子細かくシルト質強し)



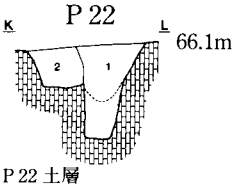
P 8 土層
1 暗褐色粘質土(濃、炭粒・土器含む)
2 褐色粘質土(しまり悪い、木根か)
3 濁黄褐色粘土(ブロック状、褐色土含む)
4 赤褐色焼土
5 黄褐色粘土(ブロック状、3より濁りない)
6 濁黄褐色粘土(3と同じ)
7 褐色粘質土(淡、木根か)



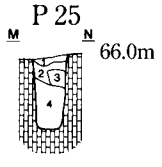
P 9 土層
1 暗褐色炭(褐色土・地山ブロック含む)
2 褐色粘質土(炭、大粒の地山ブロック含む)
3 暗褐色粘質土(炭・褐色土ブロック少量含む)
4 暗褐色粘質土(3と似るが、ブロック大粒となる)
5 褐色粘質土(2と似る)
6 暗褐色粘質土(4と似る)



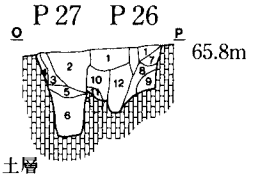
P 17 土層
1 暗褐色粘質土
2 黄褐色粘質土(褐色土ブロック多く含み濁る)
3 暗褐色粘質土
(黄色粘土ブロック多く含み濁る、2よりしまり良い)



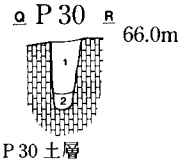
P 22 土層
1 暗褐色粘質土(黄色粘土ブロック・炭粒含む。点線から下は不明)
2 暗褐色粘質土(1より黄色粘土ブロック大粒・多量)



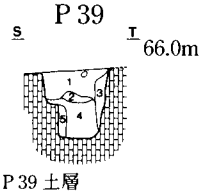
P 25 土層
1 黒褐色炭
2 暗褐色炭
3 暗褐色粘質土・褐色粘質土の混合
(大粒の地山ブロックを含む)
4 暗褐色粘質土
(小粒の地山ブロック多く含む)



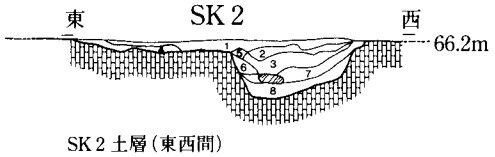
P 26・P 27 土層
1 暗褐色粘質土(黄色粘土ブロック含む)
2 暗褐色粘質土(炭粒含む、比較的均質で濃い)
3 暗褐色粘質土(3より淡いがほぼ同質)
4 暗褐色粘質土(黄色粘土ブロック大小多く含む)
5 赤褐色焼土(上部に炭粒見られる)
6 暗褐色粘質土(岩盤状の黄色粘土ブロック含み、淡い)
7 暗褐色粘質土(4とほぼ同じ)
8 黄褐色粘土(褐色土ブロック含み、斑状)
9 暗褐色粘質土(黄色粘土ブロック少し含む)
10 黄褐色粘土(8とほぼ同じ)
11 暗褐色粘質土(9より黄色粘土ブロック少し含む)
12 暗褐色粘質土(黄色粘土ブロック・黒色粘土ブロック・炭粒含む)



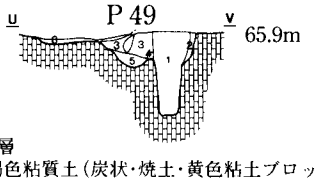
P 30 土層
1 黒褐色粘質土(炭・地山ブロック多く含む)
2 暗褐色粘質土(炭・地山ブロック多く含む)



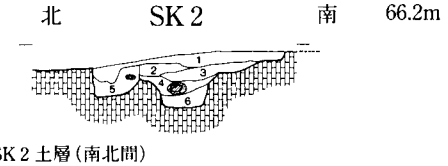
P 39 土層
1 黒褐色粘質土(炭・焼土多く含む)
2 赤褐色焼土(炭多く含む)
3 暗褐色粘質土(炭・焼土・地山ブロック含む)
4 褐色粘質土(地山ブロック多く含む)
5 3と同じ



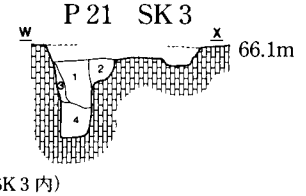
SK 2 土層(東西間)
1 黒褐色粘質土(炭・焼土含む)
2 暗赤褐色粘質土(炭・焼土層)
3 暗褐色粘質土(炭・焼土・地山ブロック含む)
4 褐色粘質土
5 褐色粘質土(ブロック状)
6 褐色粘質土(4とほぼ同じ)
7 暗褐色粘質土(地山ブロック多く含む)
8 黒褐色粘質土(炭・焼土含む)



P 49 土層
1 暗褐色粘質土(炭状・焼土・黄色粘土ブロック少し含む)
2 暗褐色粘質土(大粒の黄色粘土ブロックとの混層)
3 暗褐色粘質土(1とほぼ同質、やや淡い) 1の掘り方か
4 黄褐色粘質土(暗褐色土含み、濁る)
5 暗褐色粘質土(1・3より淡い。比較的均質)手前にくるピットの掘り方か
6 暗褐色粘質土(きわめて大粒の黄色粘土ブロックとの混層)



SK 2 土層(南北間)
1 黒褐色粘質土(炭・焼土含む)
2 暗赤褐色粘質土(炭・焼土層)
3 暗褐色粘質土(炭・焼土層・2より炭大きい)
4 暗褐色粘質土(炭・焼土・地山ブロック含む)
5 褐色粘質土(しまり悪い)
6 黒褐色粘質土(炭・焼土含む)



P 21 土層(SK 3 内)
1 暗褐色粘質土(炭・焼土少し含む、黄色粘土ブロック含む、濃暗)
2 暗褐色粘質土(1に近い、黄色粘土ブロック少ない)
3 暗褐色粘質土・黄色粘土ブロック大(混層)
4 暗褐色粘質土(黄色粘土ブロック大小含み、斑状)

0 2m

図19 竪穴系建物 SI 1 土層 (1/60)

いては内側の柱穴と重複していることから併存はしないが、他に別の柱列が見いだせればそちらに伴う土坑かもしれない。その他の遺構の多くは、建物との関係が不明確である。

遺物は土器、石、焼土塊が出土しており、図29の１・２の弥生土器を図化し、掲載した。１は周溝と先行するＰ272の中間から出土しており、建物の時期の上限を示す。

ＳＩ１は東端が調査区外へ出ているが、Ｐ22をほぼ中心で想定すると、円形プランの特大型の竪穴系建物に復元できる。ＳＤ14は、壁周溝とすると柱穴との間隔が広がりすぎることから、外周溝かもしれない。建物の時期は出土遺物から、弥生時代後期終末を中心とする。重複する他の建物との関係は、ＳＢ８よりも後出する。建て替えはａ・ｂ・ｃの順で認められ規模が拡大している。ｃの段階以降火災に遭っているが、堆積状況から見ていわゆる「火付けかたづけ」の可能性があろう。

ＳＩ２（図20、写真Ⅳ）

調査区北端の拡張区、Ｅ１区・Ｅ２区にかけて位置する。周溝ＳＤ２とそれに伴う柱穴Ｐ109・Ｐ263で設定した。ＳＤ２は南側で幅30～40㎝、深さ10～15㎝、北側で幅約60㎝、深さ７～12㎝を測り、埋土は暗褐色粘質土である。直線的に走る浅い溝が削平されて間がとぎれたのだろう。断面形状と位置関係から壁周溝と判断され、重複するＳＤ３よりも後出する。主柱穴は径50㎝前後、深さ25㎝を測り、埋土は黒褐色粘質土を基調とする。４本主柱の一辺と思われ、この位置ならＳＤ２の両端は壁のコーナーにかなり近い部分であろう。遺物は土器、石、炭化木、焼土塊が出土し、うち図29の３・４を図化し、掲載した。

ＳＩ２は全体の約半分が調査区外へ出ているが、一辺10ｍ程度の四角形プラン・４本主柱の竪穴系建物に復元できる。時期は出土遺物から弥生時代後期終末に位置付けられる。重複する他の建物との関係は、ＳＩ３よりは新しく、ＳＢ７については不明である。

ＳＩ３ａ・ｂ（図20、写真Ⅳ）

調査区北端の拡張区、Ｄ０区～Ｅ２区にかけて位置する。周溝ＳＤ３とそれに伴う柱穴で設定した。ＳＤ３は幅45～70㎝、深さ30～40㎝を測る、断面Ｕ字の深くてしっかりした掘り込みをもって弧状に走る溝で、地形が下降する北へ向かって浅くなってとぎれている。Ｅ０区に位置する浅い溝とは方向が共通しており、環状に連結していた可能性もある。埋土は黒褐色粘質土と暗褐色粘質土があり、重複するＳＤ２、ＳＫ18より先行する。断面形状から外周溝と判断される。

主柱穴は概ね径30～40㎝、深さ15～30㎝を測り、埋土は暗褐色粘質土を基調とする。ａ・ｂの２組の配置を確認しており、北から反時計回りでａはＰ321・Ｐ233・Ｐ112・Ｐ241、ｂはやや北東にずれてＰ240・Ｐ245・Ｐ231で、どちらも東半が調査区外へ出ているが、外周溝との位置関係からも６本主柱を想定できる。柱穴に重複がないために、ａ・ｂの先後関係は不明である。

遺物は土器、石器（すり石・打製石斧）、炭化木、焼土塊、鉄器が出土し、うち図29の５・６、図33の２を図化し、掲載した。

ＳＩ３は全体の約半分が調査区外へ出ており、壁が削平で失われているので正確な規模は明らかにできないが、外周溝をもつ６本主柱の竪穴系建物が復元される。建て替えについてはａとｂでかなり主柱の位置がずれていることから、空白期を挟んで断続する可能性があり、周溝はａとｂ共通ではない可能性もある。参考までに柱と外周溝の中間に壁を想定すると、直径９ｍの円形か１辺５ｍの六角形プラン、ａで50～60㎡程度の床面積が算出される。時期は出土遺物から弥生時代後期終末を中心とする。重複する他の建物との関係は、ＳＩ２よりも古く、ＳＩ10、ＳＢ７については不明である。

ＳＩ４（図21・22、写真Ⅴ）

調査区の南東部、Ｃ５区を中心に位置する。周溝ＳＤ18とそれに伴う柱穴で設定した。ＳＤ18は幅

30～40cm、深さ12～22cmを測る、断面U字の深くてしっかりした掘り込みをもった溝で、柱穴群の南側を弧状に走り、西側で完結している。埋土は暗褐色粘質土である。重複する遺構との関係はP182・P255・P256などの柱穴よりは後出で、SD15・SD17・SK36よりは先行する。近接するSD19とはほぼ並走する位置関係になる。SD18は断面形状から外周溝と判断される。

主柱穴は概ね径40～60cm前後、深さ45～70cmを測り、埋土は暗褐色粘質土を基調とする。北から時計回りでP185・P228・P210・P188で、東端が調査区外へ出ている5本ないし6本主柱を想定できる。柱穴P228は重複するSK40より先行する。なお、柱列内に位置するP260は他の柱穴よりひと回り小さく、焼土が出土していることから、灰穴炉となる可能性がある。この場合P260と主柱との位置関係を考えると、6本主柱の建物とするのが適切であろうか。

遺物は土器、石が出土し、うち図29の7を図化し、掲載した。弥生時代後期後半に位置付けられる。

SI4は建物の東部が調査区外へ出ており、壁が削平で失われているので正確な規模は明らかにできないが、外周溝をもつ5本ないし6本主柱の竪穴系建物に復元したい。参考までに柱と外周溝の中間に壁を想定すると、直径9mの円形か1辺5mの多角形プラン、50～60㎡程度の床面積が算出される。時期は出土遺物から弥生時代後期後半である。重複する他の建物との関係は、SI8・SI10よりも新しい。また、遺物と建物型式からみてSI5よりは古いと考えている。

SI5（図21・22、写真V）

調査区の南東部、C5区を中心に位置する。周溝SD19とそれに伴う柱穴で設定した。SD19は幅35～45cm、深さ11～21cmを測る、断面U字の深くてしっかりした掘り込みをもった溝で、柱穴群の南側を弧状に走り、西側で完結している。埋土は暗褐色粘質土である。重複する遺構との関係はP191などの柱穴よりも後出で、SK37よりも先行する。近接するSD18とはほぼ並走する位置関係になる。SD19も断面形状から外周溝と判断される。

主柱穴は概ね径45～70cm前後、深さ46～64cmを測り、埋土は暗褐色粘質土を基調とする。P187・P229・P212で、南端が調査区外へ出ている4本主柱を想定できる。柱穴P187はその掘り方がSD20に接しており、SD20より先行することが確認されている。柱列内に位置するP209は径約70cm、深さ約27cmを測り、底から石が出土している。他の柱穴よりひと回り大きいが浅く、ほぼ中央に位置することから、建物に付属する土坑となる可能性がある。ただし、同じ理解は重複するSI6でも可能であり、その帰属は明らかでない。

遺物は土器、石、炭化木が出土し、うち図29の8～10を図化し、掲載した。弥生時代後期終末に位置付けたい。

SI5は建物の東部が調査区外へ出ており、壁が削平で失われているので正確な規模は明らかにできないが、外周溝をもつ4本主柱の竪穴系建物に復元したい。参考までに柱と外周溝の中間に壁を想定すると、1辺8mの四角形プラン、60㎡超の床面積が算出される。時期は出土遺物から弥生時代後期終末である。重複する他の建物との関係は、層序からSI9より新しく、SI6よりも古い。また建物型式からSI4よりも新しいと考えている。

SI6（図21・22、写真V）

調査区の南端近く、C5区・C6区にかけて位置する。周溝SD20とそれに伴う柱穴P190・P211で設定した。SD20は南西・北東方向に直線的に走る溝で、その両端は不明確であるが、削平されている印象を受ける。幅は最大で約50cm、深さ約9cmを測る浅い溝で、埋土は木痕の影響が大きくて褐色粘質土である。重複するP186・P187・P275よりも後出する。断面形状と位置関係から壁周溝とする。主柱穴はP211が径約40cm、深さ約64cmを測り、P190はプランの不明確な落ち込みと重複

しており規模は正確にできない。4本主柱の1辺と思われ、この位置ならＳＤ20の両端は壁のコーナーにかなり近い部分であろう。遺物は土器、石、焼土塊が出土した。

ＳＩ６は全体の約半分が調査区外へ出ているが、一辺５ｍ程度の四角形プラン・４本主柱の竪穴系建物に復元したい。詳しい時期はわからないが、重複する建物との関係ではＳＩ５より新しくなる。

ＳＩ７ａ・ｂ（図23、写真Ⅵ）

Ｃ４区・Ｃ５区に位置する。確実な周溝が捉えられず、柱穴のみで設定した。掘立柱建物とは柱穴規模、柱間距離の違いで区別でき、周溝は完全に削平されたと思われる。主柱穴は概ね径35～50cm前後、深さ25～50cmを測り、埋土は暗褐色粘質土を基調とする。ａ・ｂの２組の配置を復元しており、北から時計回りでａはＰ322・Ｐ178・Ｐ179・Ｐ253の四角形配置、ｂはやや南にずれてＰ323・Ｐ255・Ｐ256・Ｐ177の台形配置で、どちらも４本主柱を想定できる。柱穴に重複がないために、ａ・ｂの先後関係は不明であるが、同一建物の建て替えならば、柱筋が整ったａから先行建物の規制によって不整となったｂへ移行したと解釈するのが適切であろう。他の遺構との関係では、ａはＳＤ17に先行し、ｂはＳＤ18・ＳＤ23に先行する。遺物は土器、焼土塊が出土している。

ＳＩ７は、柱穴群の東側に位置するＳＤ16の一部が壁周溝となる可能性があり、その距離をもとにして、１辺５ｍ前後の四角形プランの竪穴系建物を復元し、建て替えを想定したい。詳しい時期はわからないが、重複する建物との関係はＳＩ４より古い。

ＳＩ８（図21・22　、写真Ⅵ）

Ｂ５区に位置する。確実な周溝が捉えられず、柱穴のみで設定した。主柱穴はＰ182・Ｐ192の１対のみであるが、確実に存在する両柱穴を建物として理解するには柱間約２ｍの２本主柱の配置としか考えられないので、あえて設定した。概ね径50cm前後、深さ約40cmを測り、埋土は暗褐色粘質土を基調として、Ｐ182は木痕の影響からかやや淡い色調となる。Ｐ182は重複するＳＤ18に先行している。遺物は土器が出土している。

ＳＩ８は、壁が削平で失われているので正確な規模は明らかにできないが、四角形プランの小型の竪穴系建物を復元したい。詳しい時期はわからないが、重複する建物との関係はＳＩ４より古い。

ＳＩ９（図21・22、写真Ⅵ）

Ｂ５区・Ｃ５区に位置する。確実な周溝が捉えられず、柱穴のみで設定した。主柱穴はＰ189・Ｐ191の１対のみであるが、ＳＩ10と同じ理由から、柱間約２ｍの２本主柱の配置と考えた。概ね径45～55cm、深さ30cm前後を測り、埋土は暗褐色粘質土を基調とする。Ｐ191は重複するＳＤ19に先行している。遺物は土器が出土している。

ＳＩ９も正確な規模は明らかでないが、ＳＩ８と同様に四角形プランの小型の竪穴系建物を復元したい。詳しい時期はわからないが、重複する建物との関係はＳＩ５より古い。

ＳＩ10（図20、写真Ⅳ）

調査区北端の拡張区、Ｅ０区・Ｅ１区に位置する。確実な周溝が捉えられず、柱穴のみで設定した。主柱穴は北からＰ243・Ｐ239・Ｐ268で、東半が調査区外へ出ている５本ないし６本主柱を想定できる。概ね径35～50cm、深さ30～60cmを測り、埋土はＰ243・Ｐ239が暗褐色粘質土、Ｐ268が黒褐色粘質土を基調とする。遺物は土器が出土している。

ＳＩ10は全体の約半分が調査区外へ出ており、壁が削平で失われているので正確な規模は明らかにできないが、５本ないし６本主柱で円形ないし多角形プランの竪穴系建物を復元したい。詳しい時期、重複する建物との関係は不明である。

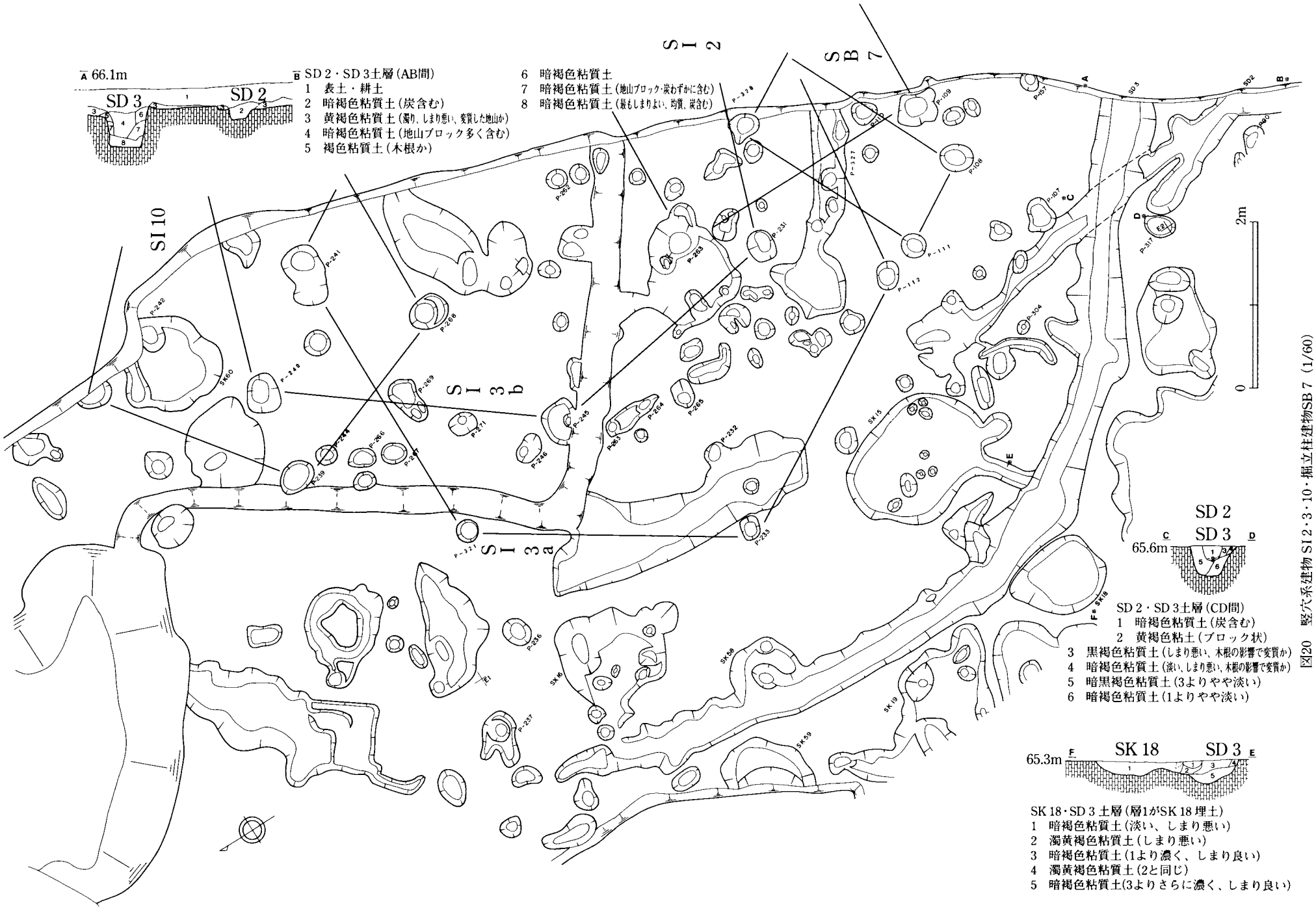


図20 竪穴系建物 SI 2・3・10・掘立柱建物SB 7 (1/60)

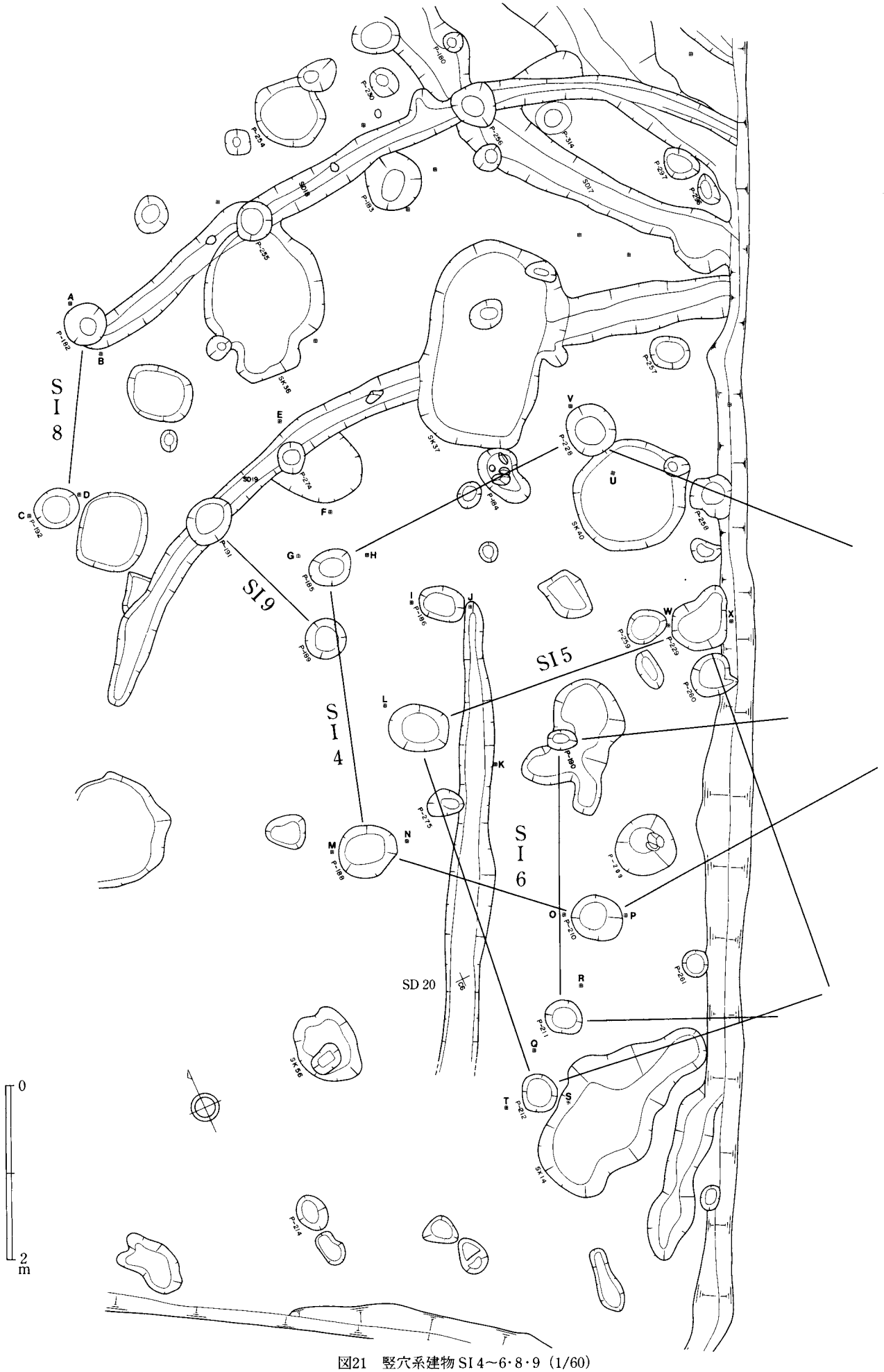
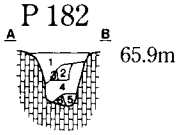


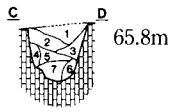
図21　竪穴系建物SI 4～6・8・9（1/60）

P 182



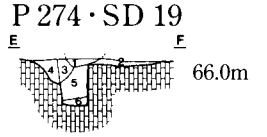
P 182 土層
1 暗褐色粘質土(黄色粘土ブロック大小含む)
2 褐色粘質土(しまり悪い、木根か)
3 黄褐色粘土(ブロック状)
4 褐色粘質土(黄色粘土ブロック含む)
5 褐色粘質土(やや濃暗、均質)
6 黄褐色粘質土(褐色土ブロック含み、濁る)

P 192



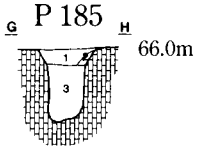
P 192 土層
1 暗褐色粘質土(炭・黄色粘土含む)
2 暗褐色粘質土(黄色粘土ブロック大小含む)
3 暗褐色粘質土(2よりも黄色粘土ブロック少ない)
4 暗褐色粘質土(2よりも黄色粘土ブロックやや多い)
5 暗褐色粘質土(1と似るが、よりしまり良い)
6 暗褐色粘質土(やや黒色がかる、黄色粘土ブロック含み7に近い質)
7 黄褐色粘土(褐色粘土ブロック含み、濁る)

P 274・SD 19



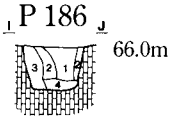
P 274・SD 19土層(層1がSD19埋土、層2は別遺構か)
1 褐色粘質土
2 褐色粘質土・黄色粘土ブロック(混層)
3 褐色粘質土・黄色粘土ブロック大小(混層)
4 暗褐色粘質土(濃暗、均質)
5 暗褐色粘質土(炭・黄色粘土ブロック含む)
6 暗褐色粘質土(5と似るが濃暗、しまり良い)

P 185



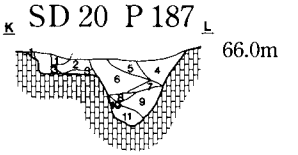
P 185 土層
1 暗褐色粘質土(炭・黄色粘土ブロックわずかに含む)
2 暗褐色粘質土(1・3よりやや淡い)
3 暗褐色粘質土(1・2より炭・黄色粘土ブロックやや多い)

P 186



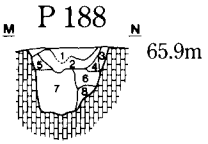
P 186 土層
1 暗褐色粘質土(黄色粘土ブロック・炭含む、焼土わずかに含む)
2 暗褐色粘質土(炭含む、黄色粘土ブロック多く含む)
3 暗褐色粘質土(炭含む、1・2の中間的な量の黄色粘土ブロック含む)
4 黄褐色粘土(しまり良いが、炭・黒色粘土ブロック含んでやや濁る)

SD 20 P 187



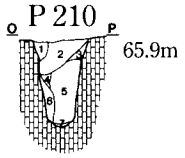
P 187・SD 20 土層(層1がSD 20 埋土)
1 褐色粘質土(黄色粘土ブロック含む、木根の影響か)
2 暗褐色粘質土(黄色粘土ブロック大含む)
3 暗褐色粘質土(2と似るが、黄色粘土ブロック多く含む)
4 暗褐色粘質土(黄色粘土ブロック大小含む)
5 暗褐色粘質土(4と似るが黄色粘土ブロック少ない)
6 暗褐色粘質土(5よりさらに黄色粘土ブロック少ない)
7 暗褐色粘質土(6よりさらに黄色粘土ブロック少ない)
8 暗褐色粘質土(黄色粘土ブロック・炭含む)
9 暗褐色粘質土(8と似るが、炭が含まれない)
10 暗褐色粘質土(周囲よりやや淡い)
11 暗褐色粘質土(大粒の炭目立って含む)

P 188



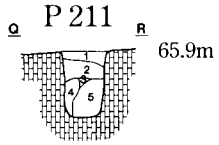
P 188 土層
1 暗褐色粘質土(黄色粘土ブロック・炭含む・やや淡い)
2 暗褐色粘質土(黄色粘土ブロック大小含む、暗濃)
3 暗褐色粘質土(2と似るが、炭含み、さらに暗濃)
4 2と似るが、やや淡明
5 暗褐色粘質土・黄色粘土ブロック(混層)
6 暗褐色粘質土(黄色粘土ブロック多く含む)
7 暗褐色粘質土(6より黄色粘土ブロック少ない、大粒の炭含む)
8 黒褐色粘質土(黄色粘土・炭含む)

P 210



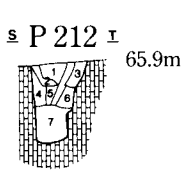
P 210 土層
1 暗褐色粘質土(黄色粘土ブロック少し含む)
2 黄褐色粘質土
(ブロック状、炭含み、やや濁る)
3 暗褐色粘質土
(黄色粘土ブロック少し含み、1より淡い色調)
4 暗褐色粘質土(3と同じか)
5 暗褐色粘質土
(1・3より黄色粘土ブロック多く含み、色調は3・4に近い)
6 黄褐色粘土(均質、しまり良い)
7 黒色粘質土(湧水のため詳細不明)

P 211



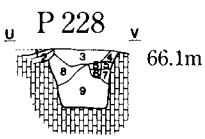
P 211 土層
1 暗褐色粘質土
(比較的均質、黄色土ブロックごく少量含む)
2 暗褐色粘質土
(黄色粘土ブロック大小多く含む、炭含む)
3 暗褐色粘質土(均質)
4 暗褐色粘質土
(2よりやや黄色土ブロック少ない)
5 暗褐色粘質土
(黄色土ブロック大小含み、小が多い)

P 212



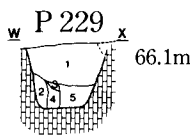
P 212土層
1 褐色粘質土(木根の影響で変質か)
2 黄褐色粘土(ブロック状、橙色がかる)
3 黄褐色粘土(2と同質だが、木根の影響か褐色がかる)
4 暗褐色粘質土(黄色粘土ブロック斑点状に含む)
5 暗褐色粘質土(4・6より均質だが、木根の影響もある)
6 暗褐色粘質土(4とほぼ同じ)
7 暗褐色粘質土
(5に似る、黄色粘土ブロックわずかに見える程度含む)

P 228



P 228土層(層1・2はSK 40 埋土)
1 褐色粘質土(黄色土含み濁る)
2 黄褐色粘質土(しまり悪い)
3 暗褐色粘質土(炭少し含む)
4 暗褐色粘質土(黄色粘土ブロック含む)
5 黄褐色粘質土(ブロック状)
6 暗褐色粘質土(黄色粘土ブロック多く含む)
7 暗褐色粘質土(4に似るが、炭含み、黄色粘土ブロックやや多い)
8 黄褐色粘質土(やや褐色がかり、しまり悪い)
9 黄褐色粘質土(8に似るが、より明るい色調)

P 229



P 229 土層
1 暗褐色粘質土
(炭・焼土含む、黄色粘土ブロック大小多く含む)
2 暗褐色粘質土(やや淡い、大粒の炭目立つ)
3 暗褐色粘質土(2に似るが、炭目立たなくなる)
4 暗褐色粘質土(2・3よりも濃暗、均質)
5 暗褐色粘質土
(1に似るが、黄色粘土ブロック大が含まれない)

0 2m

図22 SI 4 ～ 6・8・9 土層 (1/60)

図23　竪穴系建物 SI 7・掘立柱建物 SB 8 (1/60)

3　掘立柱建物

ＳＢ１（図24、写真Ⅶ）

Ｃ２区・Ｄ２区に位置する。溝ＳＤ４と柱穴Ｐ83・Ｐ84・Ｐ86・Ｐ87・Ｐ88・ＳＫ12で設定した。Ｐ73・Ｐ80・ＳＸ１・ＳＸ３などと重複するが、これらの多くは性格不明の遺構である。

建物の北東部の桁柱列は、幅45～65cm、深さ最大35cmを測る断面箱型の溝ＳＤ４の底に主柱穴Ｐ１～Ｐ４が掘り込まれており、２段掘り状を呈する。ＳＤ４はいわゆる布掘溝である。柱穴径は溝幅とほぼ一致するが、Ｐ１とＰ３は掘り方がやや南西に寄って溝をはみ出すようである。柱穴は全般にやや浅めで、溝底からの深さは20～40cm、溝検出面からの深さは最大で75cmを測る。埋土は溝部分が暗褐色粘質土基調で、柱穴部分は黄褐色粘質土と黒褐色粘質土が加わって構成される。Ｐ１は掘り方内に、Ｐ３は底に間層を挟んで、それぞれ黒褐色粘質土の柱痕部が観察される。

南西部の桁柱列はＰ83・Ｐ84、Ｐ86・Ｐ87、ＳＫ12、Ｐ88が４本の主柱穴となり、北東部のように布掘溝をもたないことがたちわりで確認されているが、柱穴の埋土はよく似たものである。南側のＰ83・Ｐ84とＰ86・87は長径が１ｍに達する楕円もしくは隅丸四角形プランで、深さは40～45cmを測る。堆積土層から、前者は２基の柱穴の重複、後者は柱の入念な埋め込みが観察される。北側のＳＫ12とＰ88は攪乱されてプランがはっきりしないが、配置から主柱穴と判断される。

主柱穴以外の遺構としては、桁柱列の外側に並行して主柱穴と似た埋土の小穴が列をなしており、柵ないし塀の可能性がある。また、Ｐ125・Ｐ324は棟持柱的な配置をとる小穴である。小穴の多くは木根とははっきりと区別できるので、積極的に評価しておきたい。

遺物は土器、石、石器（磨製石斧か）、鉄片、焼土塊、陶磁器が出土した。このうち陶磁器は攪乱されたＳＫ12からの出土であり、建物の時期を示すものではない。

ＳＢ１は、北西桁のＳＤ４Ｐ１～Ｐ４がそれぞれ南西桁のＰ83・Ｐ84、Ｐ86・Ｐ87、ＳＫ12、Ｐ88と対になる、梁行１間・桁行３間の片側布掘の掘立柱建物である。そして棟持柱や、柵か塀が付属する可能性が高い。梁柱間は約3.5ｍ、側柱間は約1.5～２ｍ、床面積は約20㎡を測り、桁行はＮ－43°－Ｗを指す。梁間で対応する各主柱穴は底面の標高がほぼ同じで、建て上げの規格を感じさせる。いくつかの主柱穴で想定される建て替えについては、古いほうをａ、新しいほうをｂとしておく。おそらく建て替えは何本かの柱を動かしたか交換した程度の、建物の補修と想定したい。建物の時期は弥生時代後期であろうが、出土した土器が小破片であり、確定できなかった。

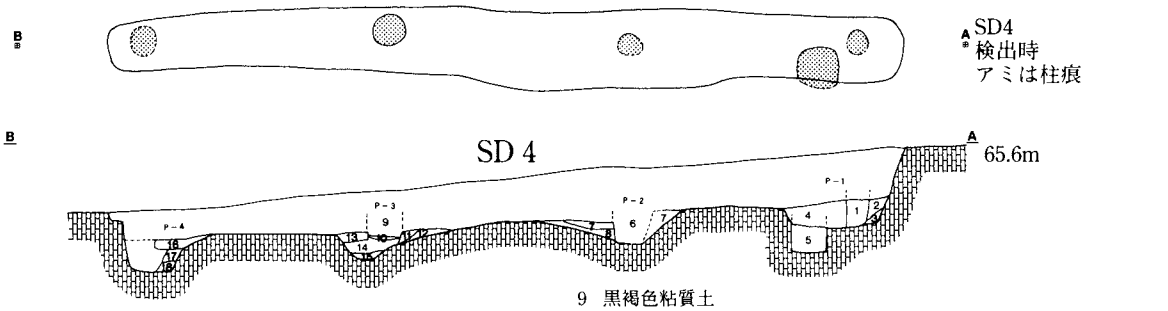
ＳＢ２（図25、写真Ⅷ）

Ｄ２区に位置する。主柱穴Ｐ58・Ｐ63・Ｐ64・Ｐ65で設定した。Ｐ64・Ｐ65では柱痕部分が観察できており、規模は径30～45cm、深さは20～40cmである。Ｐ63・Ｐ65がやや大径で、Ｐ58は上面が攪乱されている。Ｐ65はＳＢ４の主柱穴も兼ねており、柱穴２基が重複している。遺物は土器、石が出土した。土器は小破片で図化していないが、弥生時代後期後半に位置付けられる。

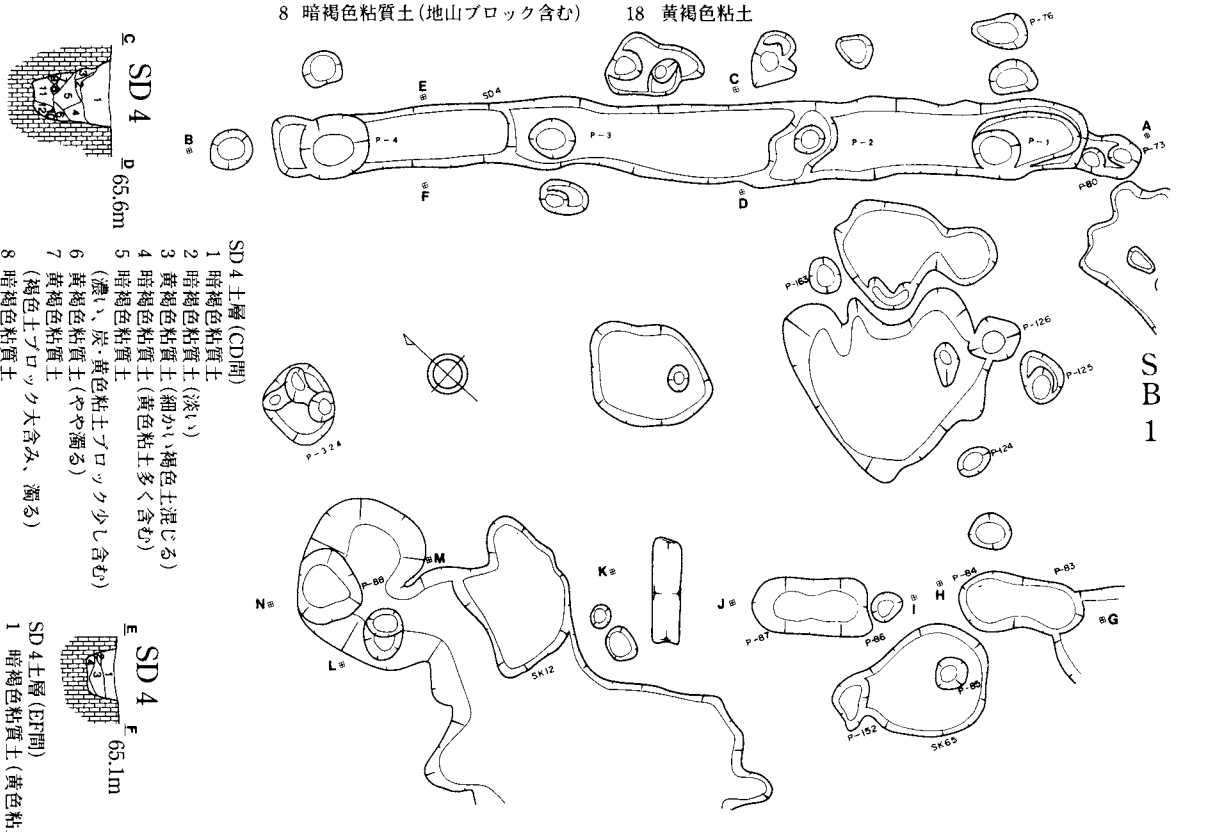
ＳＢ２は東端が調査区外へ出ているが、Ｐ63とＰ65を桁行の隅柱とする、梁行１間・桁行２間の掘立柱建物と想定する。梁間約2.6ｍ、桁間はやや不均等で1.4～２ｍ、床面積は10㎡を下回ろう。桁行はＮ－51°－Ｅを指す。重複するＳＢ４との先後関係は不明である。

ＳＢ３（図25、写真Ⅷ）

Ｄ２区・Ｄ３区に位置する。主柱穴Ｐ54・Ｐ56・Ｐ57・Ｐ72・Ｐ151・Ｐ325で設定した。径30～50cm、深さは15～40cmである。Ｐ56・Ｐ325は上面が攪乱されている。遺物は弥生土器、石が出土した。

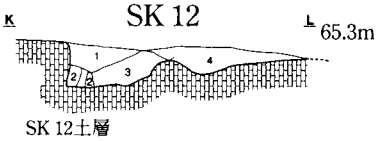


SD 4 土層(AB間)
1 黒褐色粘質土(地山ブロック含む)
2 濁黄褐色粘質土
3 黒褐色粘質土
4 黒褐色粘質土(地山ブロック含む)
5 黒褐色粘質土(地山ブロック含む)
6 濁黄褐色粘質土
7 濁黄褐色粘質土
8 暗褐色粘質土(地山ブロック含む)
9 黒褐色粘質土
10 黄褐色粘土
11 濁黄褐色粘質土
12 暗褐色粘質土
13 濁黄褐色粘質土(褐色土ブロック含む)
14 暗褐色粘質土(黄色粘土ブロック含む)
15 濁黄褐色粘質土
16 黄褐色粘質土
17 濁暗褐色粘質土
18 黄褐色粘土

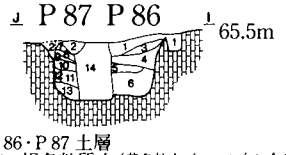


SD 4 土層(CD間)
1 暗褐色粘質土
2 暗褐色粘質土(淡い)
3 黄褐色粘質土(細かい褐色土混じる)
4 暗褐色粘質土(黄色粘土多く含む)
5 暗褐色粘質土
(濃い、炭・黄色粘土ブロック少し含む)
6 黄褐色粘質土(やや濁る)
7 黄褐色粘質土
(褐色土ブロック大含み、濁る)
8 暗褐色粘質土
(黄色粘土ブロック大小含む)
9 黒褐色粘質土
10 暗褐色粘質土
(濃く9に近い色調、比較的均質)
11 暗褐色粘質土(細かい黄色土少し含む)
12 黄褐色粘質土(褐色土ブロック含む)

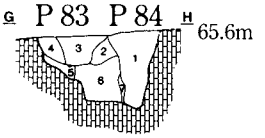
SD 4土層(EF間)
1 暗褐色粘質土(黄色粘土少し含む)
2 褐色粘質土(均質だが、しまり悪い)
3 暗褐色粘質土(黄色粘土ブロック大小含む、炭少し含む)
4 暗褐色粘質土(比較的均質、しまり良い)



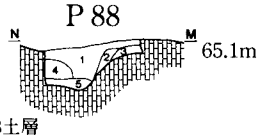
SK 12土層
1 暗褐色粘質土(淡い)
2 暗褐色粘質土(濃い、しまり良い)
3 暗褐色粘質土(濃い、地山ブロック含む)
4 暗褐色粘質土(1よりさらに淡い、地山ブロック含む)



P 86・P 87 土層
1 褐色粘質土(黄色粘土ブロック少し含む)
2 褐色粘質土(黄色粘土ブロック多く含む)
3 褐色粘質土(2とほぼ同じ)
4 黄褐色粘土(細かい褐色土含み濁る)
5 暗褐色粘質土(濃い、黄色粘土ブロック含み濁る)
6 暗褐色粘質土(黄色粘土ブロック大多く含む)
7 黄褐色粘土(やや濁)
8 暗褐色粘質土(均質)
9 7とほぼ同じ、互層をなす
10 8とほぼ同じ、互層をなす
11 黄褐色粘土(均質)
12 黒褐色粘質土(しまり悪い)
13 褐色粘質土(しまり良い)
14 暗褐色粘質土(黄色粘土ブロック少し含む、しまり良い)



P 83・P 84 土層
1 暗褐色粘質土
(黄色粘土ブロック含み、濃く、しまり良い)
2 黄褐色粘質土
(ブロック状で、褐色土含み濁る)
3 褐色粘質土
(黄色粘土ブロック含む、木根により変質か)
4 褐色粘質土
(3より黄色粘土ブロック大きく多い)
5 暗褐色粘質土
(黒色粘質土・黄色粘土ブロック含む)
6 暗褐色粘質土
(黒色粘質土・黄色粘土ブロック含む)
7 黄褐色粘土
(ブロック状で、黒褐色土含み濁る)



P 88土層
1 暗褐色粘質土(地山ブロック・炭含む)
2 暗褐色粘質土(1より淡い)
3 濁黄褐色粘質土(暗黒褐色土ブロック含み濁る)
4 黒褐色粘質土
5 黄褐色粘土
(岩盤質で、黒色土ブロック・暗褐色土ブロック含む)

0 2m

図24 掘立柱建物 SB 1 (1/60)

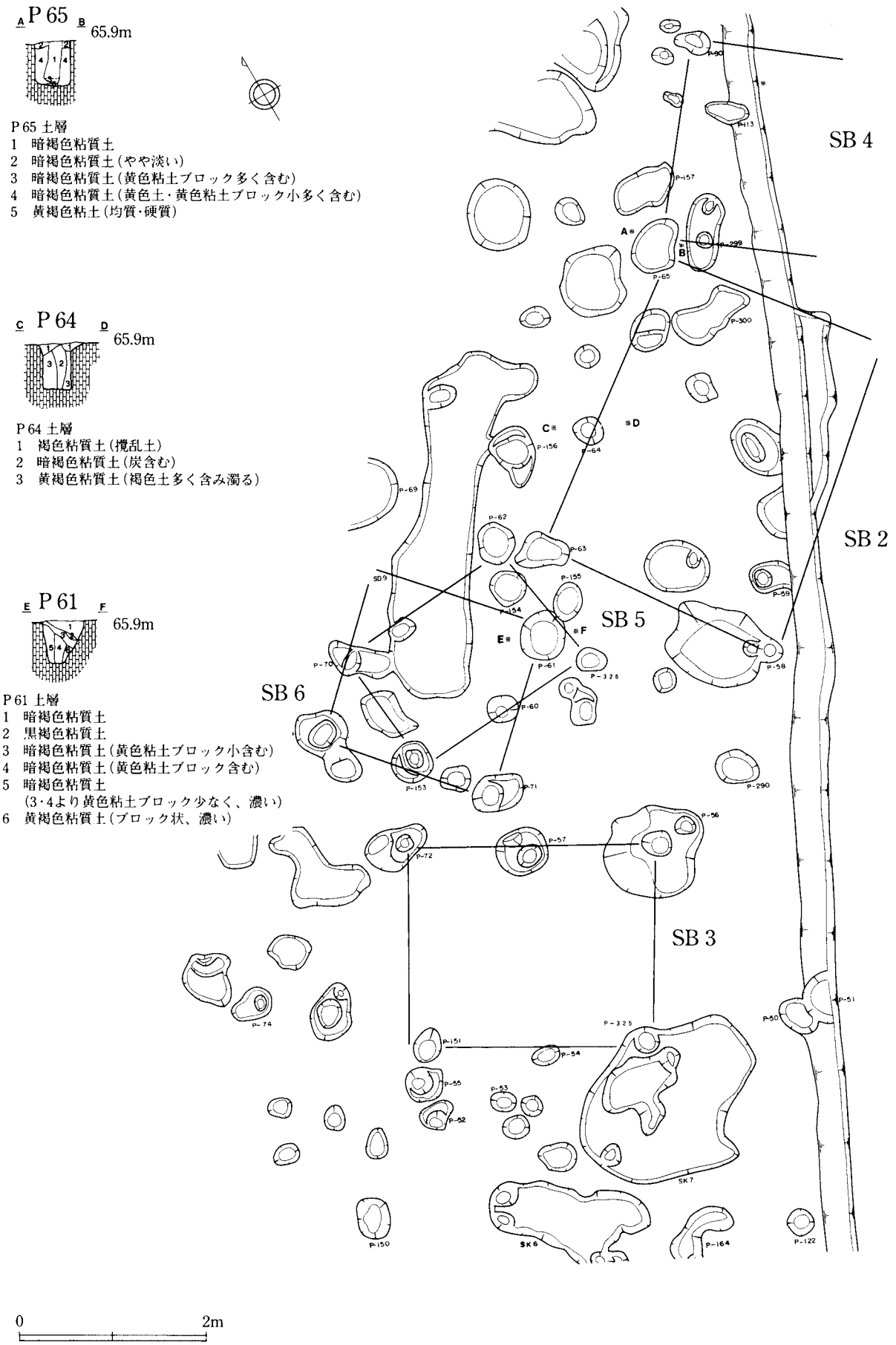


図25 掘立柱建物 SB 2～6 (1/60)

ＳＢ３は梁行１間・桁行２間の掘立柱建物として規模を確定したい。桁行はＮ－63°－Ｗを指し、梁間約2.2ｍ、桁間約1.2ｍ、床面積は約５㎡を測る。遺物は土器が出土しており、ＳＫ30出土の図30の17に接合した。建物の時期は弥生時代後期後半であろう。

ＳＢ４（図25、写真Ⅷ）

Ｄ２区・Ｅ２区に位置する。主柱穴Ｐ65・Ｐ90で設定した。Ｐ65はＳＢ４の主柱穴と重複しており、Ｐ90はＰ65よりもひと回り小さい柱穴である。遺物は出土しなかった。

ＳＢ４は１対の柱穴のみで設定したが、ＳＢ２の桁行の柱列に似た配置であることから、Ｐ65を隅柱とする、梁行１間・桁行２間以上の規模の掘立柱建物を想定したい。梁間と考えられる柱間は約２ｍを測り、Ｎ－40°－Ｅを指す。建物の時期は不明、重複するＳＢ２との先後関係も不明である。

ＳＢ５（図25、写真Ⅷ）

Ｄ２区に位置する。主柱穴Ｐ60・Ｐ62・Ｐ70・Ｐ153・Ｐ326で設定した。径30～40㎝、深さは15～22㎝を測る。遺物は土器が出土した。

ＳＢ５は主柱穴の一つがＳＤ９による攪乱で失われたものと思われ、梁行１間・桁行２間の掘立柱建物と想定したい。桁行はＮ－81°－Ｅを指し、梁間約1.5ｍ、桁間約1.1ｍ、床面積は約３㎡を測るきわめて小型の建物である。建物の時期は弥生時代後期であろうが、出土した土器が小破片であり、確定できなかった。重複するＳＢ６との先後関係は不明である。

ＳＢ６（図25、写真Ⅷ）

Ｄ２区に位置する。主柱穴Ｐ61・Ｐ71・Ｐ89で設定した。径40～50㎝、深さは15～40㎝を測る。遺物は土器が出土した。

ＳＢ６は北側の隅柱となる柱穴を確認できなかったが、ＳＤ９による攪乱も考慮して、梁行１間・桁行１間の掘立柱建物と想定したい。柱間の長いＰ71・Ｐ89間を梁行とすると、梁間約1.5ｍ、桁間約1.1ｍ、床面積は約３㎡と、きわめて小型の建物となり、桁行はＮ－48°－Ｅを指す。建物の時期は弥生時代後期であろうが、出土した土器が小破片であり、確定できなかった。柱主軸がほぼ揃うＳＢ１に非常に近い時期と考えている。また、重複するＳＢ５がほぼ同規模で桁行が２間であることを考えると、削平された竪穴系建物となる可能性もあろう。ＳＢ５との先後関係は不明である。

ＳＢ７（図20）

Ｅ１区に位置する。主柱穴Ｐ108・Ｐ110・Ｐ111・Ｐ327・Ｐ328で設定した。径30㎝前後、深さは７～12㎝ときわめて小さく浅い柱穴が特徴的である。遺物は出土しなかった。

ＳＢ７は梁行１間・桁行２間の掘立柱建物と想定したい。梁間約１ｍ、桁間約1.3ｍ、床面積は３㎡に満たないというきわめて小型の建物となり、桁行はＮ－70°－Ｅを指す。建物の時期は不明であるが、柱主軸がほぼ揃うＳＢ８とほぼ同じ時期と考えており、重複するＳＩ２・ＳＩ３よりも先行する可能性が高い。

ＳＢ８（図23）

Ｃ４区に位置する。主柱穴Ｐ272・Ｐ329・Ｐ330・Ｐ331・Ｐ334で設定した。径35㎝前後、深さは15～30㎝を測る、きわめて小さく浅い柱穴が特徴的である。遺物は重複して後出するＳＤ14との境から、図29の１の土器が出土した。弥生時代後期後半に位置付けられ、建物の時期の下限を示す。

ＳＢ８は削平された竪穴系建物となる可能性も考えたが、柱穴の規模、配置、主軸がＳＢ７とほぼ共通することから、梁行１間・桁行２間の堀立柱建物と想定したい。その場合、梁間約１ｍ、桁間約1.5ｍを測り、桁行はＮ－68°－Ｅを指す。建物の時期は弥生時代後期後半と考えており、重複するＳＩ１との先後関係は、ＳＩ１に先行することになろう。

4　火葬遺構

ＳＫ１（図27、写真Ⅹ）

Ｂ３区に位置する。火葬場と考えるＳＸ19よりも東側の高所の斜面に掘り込まれた土坑で、長径約1.55ｍ・短径約1.15ｍの不整長楕円形プランで、検出面からの深さ最大で約60㎝を測る。埋土は記録していないが、鮮やかな暗褐色土のほぼ単層だったと記憶している。坑底は浅く窪んで２段掘り状になっている。遺物は、坑底近くから近世・近代の土師器（蔵骨器）、陶磁器、石器（打製石斧）、焼骨片が、焼石を含む大小の礫多数とともに出土しており、一括して投げ込まれた状況を示すものと判断される。図32の３・４、図33の１を図化し、掲載した。

ＳＫ１の性格は近世・近代の火葬の過程の中で、遺体を荼毘に付した後の「かたづけ」土坑、またはＳＸ19廃絶時の祭祀土坑、あるいは墓そのものなどが考えられる。

ＳＫ70（図27、写真Ⅹ）

Ｂ３区に位置する。長径約1.1ｍ・短径約45㎝の北東・南西方向に細長い不整なプランで検出し（図27）、最終的には北西に折れるもっと不整なプランで完掘した（図15）が、蔵骨器と思われる近世・近代の土師器が埋め置かれていた略円形プランの北東部が遺構となり、その他の部分は木根か攪乱であろう。遺物は前述の土師器の蓋・身がセットで出土しており、図32の１・２のとおり掲載した。土師器身２は正位で埋め置かれ、長径20㎝ぐらいの礫が口縁に落ち込んでいた。礫の取り上げ後にその下位の埋土を除去すると、蓋１が正位で破砕した状態で出土した。埋土中からは骨片も少量出土している。

ＳＫ70は近世・近代の火葬墓と考えている。調査の状況からは、蔵骨器を埋め置いて上に礫を置いたものが、後に陥没したことが推察できる。置かれた礫は墓標のような意味をもつのだろう。

ＳＸ19（図26・27、写真Ⅹ）

Ａ３区・Ｂ３区を中心に位置する。丘陵の最先端部の斜面を、長辺約20ｍ、短辺約10ｍの略四角形の範囲で深く掘り込んでおり、底面は平坦に成形している。等高線にほぼ平行する東側肩部は上下２段にわたる落ちが見られるが、上段はＳＸ19よりも南へ伸びて続いていることからより新しい畑地の造成であり、ＳＸ19の本来の肩部は下段と思われる。埋土は高所側ほど厚くなるが、全般に締まりは悪い。底面は地山の礫層まで削り込んだ後、粘質土でより平坦に整地したものと思われる。

底面には遺構のほぼ中央で壁面に寄って整地土上に、焼石を含む大小の礫多数が南北約1.3ｍ・東西約80㎝の範囲でまとまりよく出土しており、意図して集めて配されたものと判断される。

遺物は、大量の埋土をバックホーで除去した関係もあるが、発見できたものはきわめて少なく、検出面および排土から近世・近代の磁器片、一銭銅貨、石板が出土した程度である。図32の５・６・11、図33の６を図化し、掲載した。

ＳＸ19は近世・近代の火葬施設で、集石は遺体を荼毘に付する棺台と考えている。検出時には完全に埋没していたが、その大量の埋土の出自は、周辺一帯の開墾で生じた切土の可能性がある。

小　結

ここでは近世・近代の火葬に関係した遺構として、土坑ＳＫ１、火葬墓ＳＫ70、火葬場ＳＸ19をとりあげた。火葬遺構と判断した詳しい論拠についてはⅥでふれたい。この他にもＳＫ１と位置や規模が似た土坑ＳＫ68や、火葬墓ＳＫ70に近接し被熱しているＳＫ57、六道銭とされる銭貨を出土した落ち込みＳＸ12、骨片を出土した遺構も多数存在するが、火葬に直接に関係した遺構は少ないと判断した。その論拠については、その他の遺構の項で後述する。

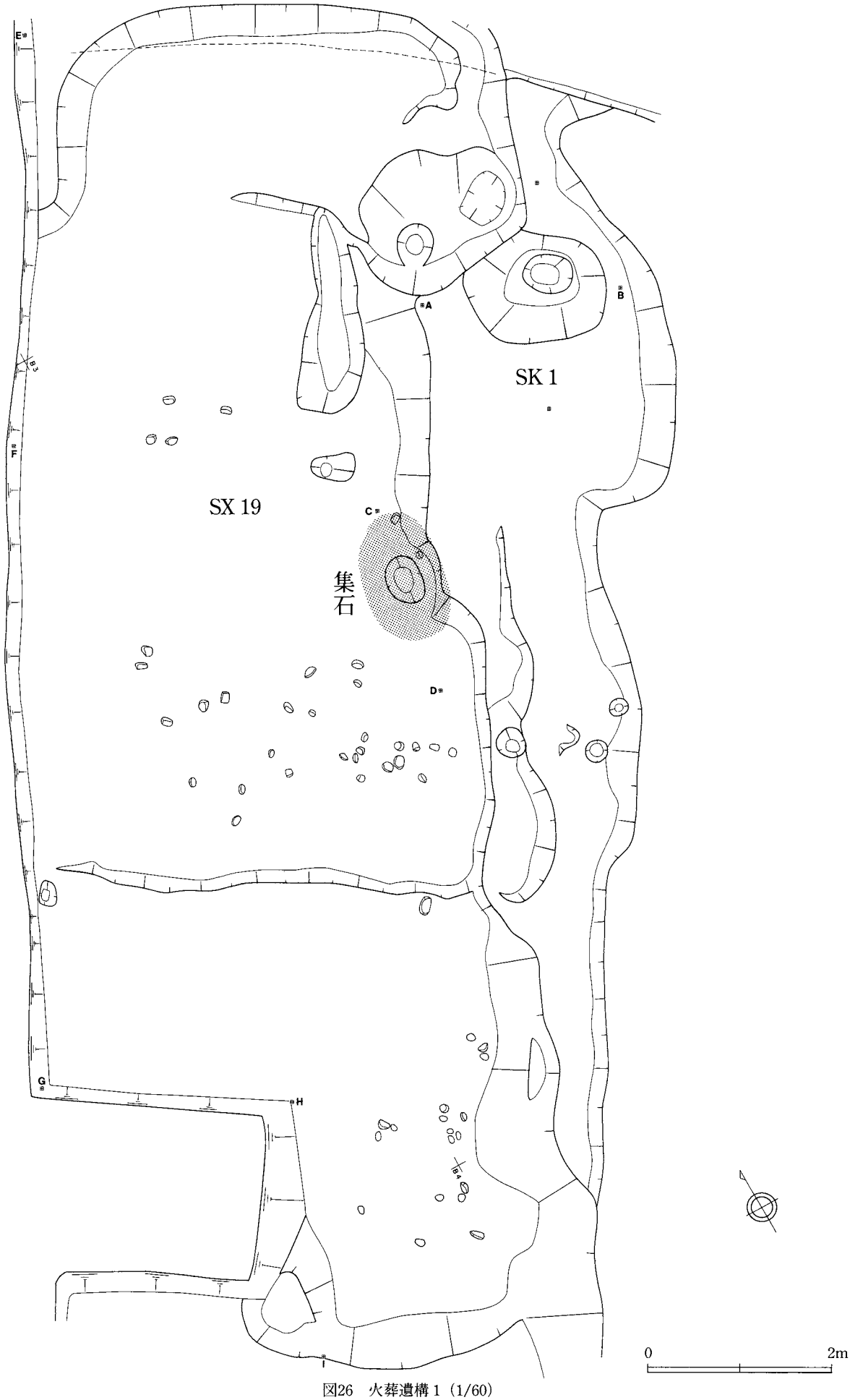


図26　火葬遺構１（1/60）

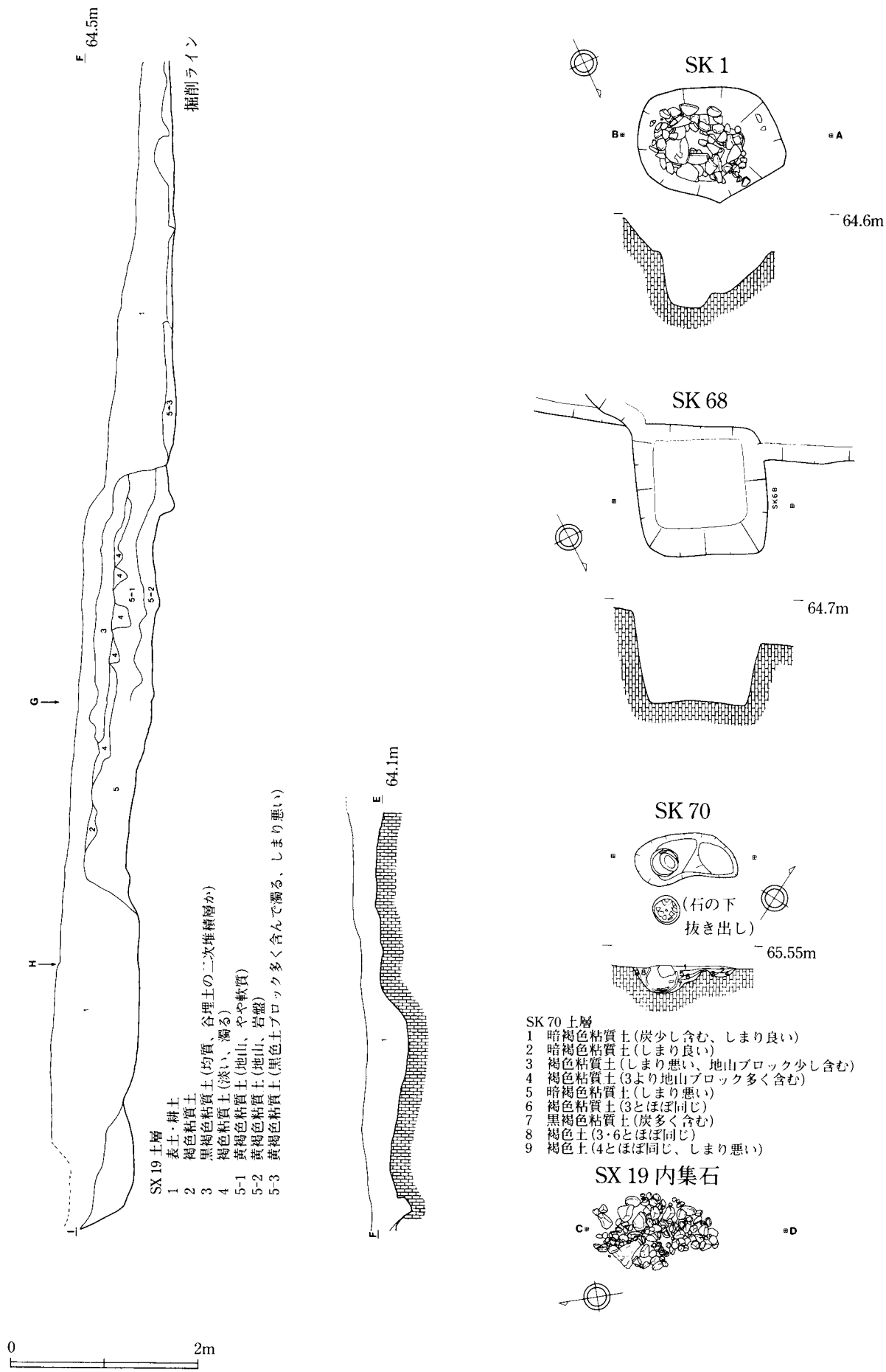


図27　火葬遺構 2 (1/60)

5　その他の遺構

溝（ＳＤ）

溝は、前項で竪穴系建物の外周溝・壁周溝、掘立柱建物の布掘溝など、建物の一部としたもの以外を記述する。全般に、その性格が把握できたものはほとんどないのが現状である。

Ｃ３区を中心に位置するＳＤ７は等高線にほぼ直交して北東・南西方向に直線的に走る、断面箱型の溝であり、概ね標高が低い平野側へ向かって深くなる。重複する遺構との関係は、ＳＫ68・ＳＸ19に先行する。遺物は多くの土器の他、石器(すり石、剝片)、炭化木が出土している。掲載した土器図30の１～５は弥生時代後期後半に位置付けられる。Ｃ４区・Ｃ５区に位置するＳＤ15・ＳＤ17は竪穴系建物が集中する地点に近接した位置にある、ＳＤ15は幅が不整で浅く直線的に走る溝、ＳＤ17は幅が比較的一定で深く弧状に走る溝である。重複する遺構との関係は、ＳＩ４の外周溝であるＳＤ18よりもＳＤ17が、さらにＳＤ15が後出する。遺物は土器、石が出土しており、ＳＤ17で掲載した図30の６・７は弥生時代後期後半、ＳＤ15で掲載した図29の13～16は後期終末に位置付けられる。形状から考えてＳＤ15・ＳＤ17は建物に関係する溝の可能性が高いが、うまく復元できなかった。出土遺物が乏しく、詳しい時期は明らかでないＳＤ16・ＳＤ21・ＳＤ22・ＳＤ23でも同様のことがいえる。

土坑（ＳＫ）

土坑は、前項で弥生時代の建物、近世・近代の火葬遺構としたもの以外を記述する。概してプランは不整で浅く、性格もはっきりしないものが多い。

弥生時代と思われる土器は大半の土坑から出土している。中でもＣ２区のＳＫ13、Ｄ２区のＳＫ14、Ｃ３区のＳＫ30、Ｂ４区のＳＫ35は弥生後期後半から終末の土器が比較的多く出土した土坑であり、図30の９～17、図31の１～４を掲載した。なんらかの形で集落に関係する遺構と思われるが、性格は不明である。近世・近代の陶磁器はＤ２区のＳＫ64から、火葬に伴うであろう骨片はＢ３区のＳＫ57とＣ３区のＳＫ62から出土している。ＳＫ57は被熱していたようであり、ＳＫ１・ＳＫ70とは細かい用途は異なろうが、火葬に関係した可能性が高い。Ｂ２区のＳＫ68はＳＫ１と位置、形状が似るが、埋土が異なり、ガラス片が出土していることから、より新しい時期の土取り穴などの可能性が高い。

落ち込み（ＳＸ）

落ち込みは、土坑より規模が大きめだが、浅く、プランも不整であり、著しく削平された遺構、風倒木痕、攪乱痕などが考えられる。Ｂ２区のＳＸ７については自然の谷地形と考えている。

遺物は縄文土器がＣ２区ＳＸ２から、火葬に伴うであろう骨片がＣ２区ＳＸ１・Ｄ１区ＳＸ10・Ｂ３区ＳＸ11・Ｃ３区ＳＸ13から、六道銭とされる銭貨（図32の７～10）がＣ３区ＳＸ12から、弥生時代と思われる土器は全ての落ち込みから出土している。しかし、少量で散発的な出土状況から、落ち込みの時期、性格は特定できておらず、むしろ遺物が二次的に流入した可能性のほうが高い。

その他小穴（Ｐ）

小穴は、土坑や落ち込みよりもよりもいくぶん小さいことを目安にして、ある程度の深さ・プラン・埋土をもつものの他、遺物が出土したものも加えて全てに番号を振った。前者については基本的に柱穴と考えて、前項で建物の復元に努めたが、十分に生かせなかったものも残っており、今後に検証を求めることにしたい。後者については木根なども含まれていよう。出土遺物は弥生時代後期と思われる土器が最も多い。Ｄ４区Ｐ14・Ｃ５区Ｐ275からは同時代と思われる鉄器も出土している。

なお、Ｃ１区・Ｄ１区・Ｄ２区に集中する小穴は、南からＰ332・Ｐ159・Ｐ68・Ｐ95・Ｐ94・Ｐ333が列状をなし、主軸が近接するＳＢ１の桁行と一致することから、柵などの可能性がある。

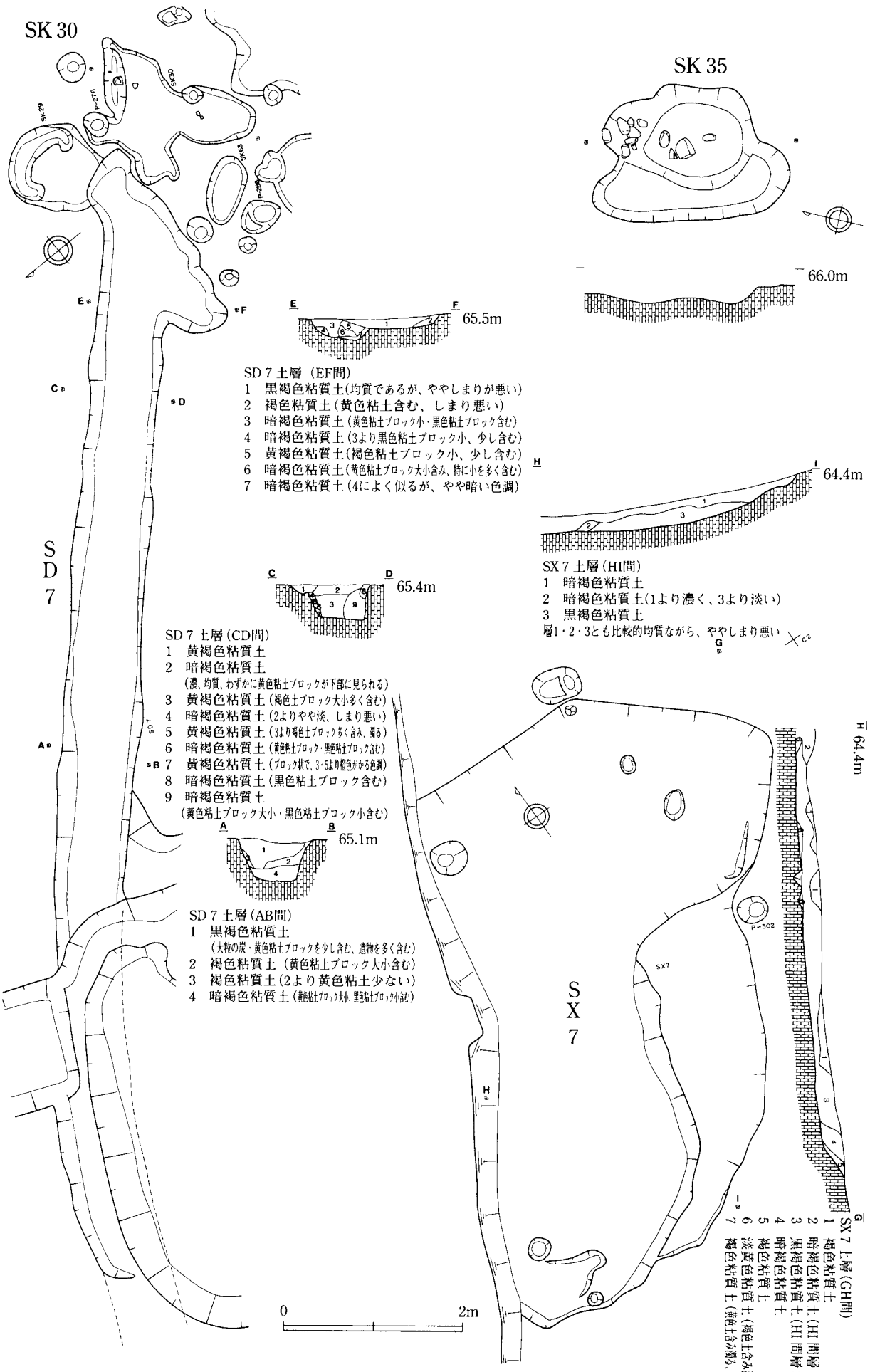


図28 SD 7・SK 30・SK 35・SX 7（1/60）

遺構表凡例

［遺構番号］現地調査時の分類（ＳＤ、ＳＫ、ＳＸ、Ｐ）ごとに、１から示した。建物（ＳＩ、ＳＢ）の一部となるものは特記事項とした。欠番となったもの、所在が不明になったものは、そのまま示し、現地調査後に新たに確認したものは番号を追加している。

［グリッド］遺構が位置するグリッドを表記した。規模の大きい遺構については複数示してある。

［埋　土］現地調査時の遺構の断面観察による埋土の大まかな土質、色調を記した。複数層観察できたものは、上位、下位、中心、縁のように位置を区別した。実測図を作成し掲載したものについては記述を省略した。色調は新版標準土色帳に準拠する。

［出土遺物］出土遺物の種類を記した。「土器」は弥生時代後期の土器が相当し、それ以外を指すときは（　）書きした。その他の種についても詳細がわかるものは（　）書きしている。

表１　溝

遺構番号	グリッド	埋土	出土遺物	特記事項
ＳＤ１				欠番
ＳＤ２	Ｅ１区・Ｅ２区	土層図あり	土器，石	ＳＩ２周溝，ＳＤ３より新
ＳＤ３	Ｄ１区・Ｅ１区	土層図あり	土器，石器（打製石斧），鉄器	ＳＩ３周溝，ＳＫ18より新，ＳＤ２より古
ＳＤ４	Ｃ２区・Ｄ２区	土層図あり	土器，石器（磨製石斧），石，焼土塊	ＳＢ１布掘溝
ＳＤ５	Ｂ１区・Ｃ０区・Ｃ１区	不明	土器	田の山道か
ＳＤ６	Ｂ２区・Ｃ２区	不明	土器	
ＳＤ７	Ｂ２区・Ｂ３区・Ｃ３区	土層図あり	土器，石器（すり石類・剥片），石，炭化木	断面箱型
ＳＤ８	Ｂ２区	不明	土器	
ＳＤ９	Ｄ２区	不明	土器	
ＳＤ10	Ｃ４区・Ｄ４区	不明	土器，炭化木	きわめて浅い
ＳＤ11	Ｃ４区・Ｄ４区	不明	不明	きわめて浅い
ＳＤ12	Ｃ４区・Ｄ４区	不明	土器	きわめて浅い
ＳＤ13	Ｃ４区	不明	土器，石	きわめて浅い
ＳＤ14	Ｃ４区	土層図あり	土器	ＳＩ１周溝，Ｐ272より新
ＳＤ15	Ｃ４区・Ｃ５区	土層図あり	土器，石（台石か）	ＳＤ18より新
ＳＤ16	Ｃ４区・Ｃ５区	土層図あり	土器	
ＳＤ17	Ｃ４区・Ｃ５区	土層図あり	土器，石	Ｐ・ＳＤ18より古
ＳＤ18	Ｃ５区	土層図あり	土器，石	Ｐより新，ＳＤ15より古
ＳＤ19	Ｂ５区・Ｃ５区	土層図あり	土器，炭化木	Ｐより新，ＳＫ37より古
ＳＤ20	Ｃ５区	土層図あり	土器，石，焼土塊	Ｐ187より新
ＳＤ21	Ｃ５区	不明	なし	きわめて浅い
ＳＤ22	Ｂ５区・Ｂ６区	暗褐色土（一部地山ブロック含む）	土器，石，炭化木	
ＳＤ23	Ｃ４区	土層図あり	土器	Ｐ177より新
ＳＤ24	Ｄ４区	不明	土器	

表２　土坑

遺構番号	グリッド	埋土	出土遺物	特記事項
ＳＫ１	Ｂ３区	土層図あり	土器（蔵骨器含む），石（焼石含む），陶器	火葬遺構
ＳＫ２	Ｃ３区・Ｄ３区	土層図あり	土器，石器（すり石），炭化木，焼土塊	ＳＩ１内土坑か
ＳＫ３	Ｃ３区	土層図あり	土器	ＳＩ１内土坑か
ＳＫ４	Ｄ３区	黒褐色土	土器，炭化木	
ＳＫ５	Ｄ３区	不明	土器	
ＳＫ６	Ｄ３区	不明	土器	
ＳＫ７	Ｄ３区	不明	土器	
ＳＫ８	Ｃ３区	不明	土器	
ＳＫ９	Ｃ３区	暗褐色土・地山土	土器	
ＳＫ10	Ｃ３区	不明	土器	
ＳＫ11	Ｃ３区	不明	土器	
ＳＫ12	Ｃ２区	土層図あり	土器，石，陶磁器，鉄器	ＳＢＩ柱穴
ＳＫ13	Ｃ２区	不明	土器，石器（すり石・剥片）	
ＳＫ14	Ｄ２区	暗褐色土・腐植土	土器，炭化木，石器（石錘）	
ＳＫ15	Ｄ１区	暗褐色土	土器	
ＳＫ16	Ｄ１区	暗褐色土	土器	
ＳＫ17	Ｃ２区	暗褐色土（炭含む）	なし	
ＳＫ18	Ｄ１区	土層図あり	土器	ＳＤ３より新
ＳＫ19	Ｄ１区	黒褐色土（炭含む）	炭化木	
ＳＫ20	Ｄ１区	不明	土器	
ＳＫ21	不明	不明	なし	
ＳＫ22	Ｄ１区	不明	石器（剥片）	
ＳＫ23	Ｂ１区	暗褐色土（下位地山ブロック含む）	土器	
ＳＫ24	Ｃ２区	不明	土器，石器（剥片）	
ＳＫ25	Ｄ２区	不明	炭化木	
ＳＫ26	Ｃ４区	不明	土器，石	
ＳＫ27	Ｃ３区・Ｃ４区	不明	土器	
ＳＫ28	Ｃ３区・Ｄ３区	黒褐色土	石	
ＳＫ29	Ｃ３区	暗褐色土	石器（剥片）	
ＳＫ30	Ｃ３区	暗褐色土	土器，珪化木	
ＳＫ31	Ｂ４区	暗褐色土（地山ブロック含む）	土器，石，炭化木	
ＳＫ32	Ｂ４区	不明	土器	
ＳＫ33	Ａ４区	褐色土・黄褐色土	なし	
ＳＫ34	不明	暗褐色土（地山ブロック含む）	土器	
ＳＫ35	Ｂ４区	暗褐色土	土器，石，炭化木	
ＳＫ36	Ｃ５区	暗褐色土（地山ブロック含む）	土器，石	Ｐ255・ＳＤ18より新
ＳＫ37	Ｃ５区	不明	土器，石	ＳＤ19より新
ＳＫ38	Ｂ５区	不明	土器，炭化木	
ＳＫ39	Ｃ４区	暗褐色～黒褐色土（炭含む）	土器，石，瓦	
ＳＫ40	Ｃ５区	不明	土器	
ＳＫ41	不明	不明	土器，炭化木	
ＳＫ42	Ｃ４区	暗褐色土（地山ブロック含む）	土器	
ＳＫ43	Ｃ４区	不明	土器	
ＳＫ44	Ｃ４区	不明	土器	
ＳＫ45	Ｃ４区	暗褐色土	なし	
ＳＫ46	Ｃ４区	淡暗褐色土	なし	
ＳＫ47	Ｃ４区	不明	土器，石	
ＳＫ48	Ｂ３区	不明	土器	
ＳＫ49	Ｃ３区	暗褐色土（地山ブロック含む）	土器，石	
ＳＫ50	Ｃ３区	黒褐色土（地山ブロック含む）	土器	
ＳＫ51	Ｃ４区	不明	土器	
ＳＫ52	Ｂ４区	不明	土器	
ＳＫ53	Ｂ４区	黒褐色土	土器，石，鉄器	
ＳＫ54	Ｂ４区	不明	土器	
ＳＫ55	不明	不明	土器，石	
ＳＫ56	Ｂ６区	暗褐色土	土器	
ＳＫ57	Ｂ３区	暗褐色土	骨	被熱，火葬遺構か
ＳＫ58	Ｄ１区	暗褐色土	なし	
ＳＫ59	Ｄ１区	暗褐色土	土器	
ＳＫ60	Ｅ０区	不明	なし	
ＳＫ61	Ｃ２区	不明	土器	

遺構番号	グリッド	埋土	出土遺物	特記事項
ＳＫ62	Ｃ３区	不明	骨	
ＳＫ63	Ｃ３区	不明	土器	
ＳＫ64	Ｄ２区	不明	土器，磁器	
ＳＫ65	Ｃ２区	不明	なし	
ＳＫ66	Ｃ４区	不明	土器	
ＳＫ67	Ｂ３区	不明	土器	
ＳＫ68	Ｂ２区	上位地山質土，下位黒褐色土	土器，鉄器（鋤先？），石，瓦，ガラス	
ＳＫ69	Ｄ２区	不明	土器	
ＳＫ70	Ｂ３区	土層図あり	土器（蔵骨器）	火葬遺構

表３　落ち込み

遺構番号	グリッド	埋土	出土遺物	特記事項
ＳＸ１	Ｃ２区・Ｃ３区	黒褐色土，暗褐色土	土器，石，骨	
ＳＸ２	Ｃ２区	黒褐色土（炭・焼土含む）	土器（弥生土器・縄文土器），石	
ＳＸ３	Ｃ２区	暗褐色土（炭含む）	土器，石，鉄器？	
ＳＸ４	Ｄ１区	暗褐色土	土器，石	
ＳＸ５	Ｄ１区	暗褐色土	土器，石	
ＳＸ６	Ｄ１区	暗褐色土	土器，石，炭化木	
ＳＸ７	Ｂ２区	土層図あり	土器，石器（剥片？）	自然の谷か
ＳＸ８	Ｃ２区	不明	土器	
ＳＸ９	Ｂ２区・Ｃ２区	不明	土器，鉄器，石	
ＳＸ10	Ｄ１区・Ｄ２区	暗褐色土	土器，骨	
ＳＸ11	Ｂ３区	暗褐色土（地山ブロック含む）	土器（弥生土器・蔵骨器），石器（剥片），骨	
ＳＸ12	Ｂ３区～Ｃ４区	淡暗褐色土（地山ブロック含む）	土器，石，銭貨（寛永通宝５枚）	
ＳＸ13	Ｂ４区・Ｃ４区	褐色～黒褐色土	石，骨	
ＳＸ14	Ｃ６区	褐色土	土器，炭化木	
ＳＸ15	Ｄ１区	暗褐色土	土器，石，鉄器	
ＳＸ16	Ｄ１区	暗褐色土	土器	
ＳＸ17	Ｃ２区	不明	土器	
ＳＸ18	不明	不明	土器	
ＳＸ19	Ａ３区・Ｂ３区	土層図あり	磁器，石製品，銭貨	火葬遺構，集石あり

表４　小穴

遺構番号	グリッド	埋土	出土遺物	特記事項
Ｐ１	Ｃ４区	土層図あり	土器	ＳＩ１柱穴
Ｐ２	Ｃ４区	土層図あり	土器	ＳＩ１柱穴
Ｐ３	Ｃ４区	不明	なし	ＳＩ１柱穴
Ｐ４	Ｃ４区	上位黒褐色土，下位不明	なし	
Ｐ５	Ｃ４区	上位黒褐色土，下位不明	なし	
Ｐ６	Ｃ４区	不明	土器	ＳＩ１柱穴
Ｐ７	Ｃ４区	不明	土器，石	
Ｐ８	Ｃ４区	土層図あり	土器，石	ＳＩ１柱穴
Ｐ９	Ｃ４区	土層図あり	なし	ＳＩ１柱穴
Ｐ10	不明	不明	なし	
Ｐ11	Ｃ４区	黒褐色土（地山ブロック含む）	土器	
Ｐ12	Ｃ４区	不明	なし	ＳＩ１柱穴
Ｐ13	Ｃ４区	不明	なし	ＳＩ１柱穴
Ｐ14	Ｄ４区	暗褐色土（地山土含む）	鉄器	
Ｐ15	不明	不明	なし	
Ｐ16	Ｄ３区	上位黒褐色土，中位暗褐色土，下位暗褐色土（地山土含む）	なし	
Ｐ17	Ｄ３区	土層図あり	土器	ＳＩ１柱穴
Ｐ18	Ｄ３区	暗褐色土（下位地山土含む）	土器	ＳＩ１柱穴
Ｐ19	Ｄ３区	上位暗褐色土	なし	ＳＩ１柱穴
Ｐ20	Ｄ３区	暗褐色土（地山土・炭・焼土含む）	土器，焼土塊	ＳＩ１柱穴，木根と重複して不整形
Ｐ21	Ｃ３区	黒褐色土（地山ブロック・炭・焼土塊混）	石	ＳＩ１柱穴
Ｐ22	Ｃ３区	土層図あり	なし	ＳＩ１柱穴
Ｐ23	Ｃ３区	不明	土器	ＳＩ１柱穴
Ｐ24	Ｃ３区	黒褐色土（炭・焼土含む）	土器，石	
Ｐ25	Ｃ３区	土層図あり	土器	
Ｐ26	Ｃ３区	土層図あり	土器	ＳＩ１柱穴
Ｐ27	Ｃ３区	土層図あり	土器，石	ＳＩ１柱穴
Ｐ28	不明	不明	なし	
Ｐ29	Ｃ３区	暗褐色土（地山土・炭含む）	なし	ＳＩ１柱穴
Ｐ30	Ｃ３区	土層図あり	なし	ＳＩ１柱穴
Ｐ31	Ｃ３区	不明	土器	ＳＩ１柱穴
Ｐ32	Ｃ３区	中心黒褐色土，縁地山土・暗褐色土）	石	
Ｐ33	Ｃ３区	暗褐色土（下位地山ブロック含む）	なし	
Ｐ34	Ｃ３区	暗褐色土（下位地山ブロック含む）	なし	
Ｐ35	Ｃ３区	不明	なし	
Ｐ36	Ｃ３区	暗褐色土	なし	
Ｐ37	Ｃ３区	不明	土器	ＳＩ１柱穴
Ｐ38	Ｃ３区	暗褐色土（炭・焼土含む）	なし	
Ｐ39	Ｃ３区	土層図あり	土器，焼土塊	ＳＩ１柱穴
Ｐ40	Ｃ３区	不明	土器	
Ｐ41	Ｃ３区	暗褐色土（地山土・炭含む）	土器	
Ｐ42	Ｃ３区	不明	なし	
Ｐ43	Ｃ３区	黒褐色土（下位地山土ブロック含む）	なし	
Ｐ44	Ｃ３区	暗褐色土（地山土含む）	なし	
Ｐ45	Ｃ３区	暗褐色土	土器	
Ｐ46	Ｃ３区	暗褐色土（下位地山土含む）	土器	
Ｐ47	Ｃ３区	暗褐色土	なし	
Ｐ48	Ｃ３区・Ｄ３区	暗褐色土（下位地山土含む）	なし	ＳＩ１柱穴
Ｐ49	Ｃ３区・Ｄ３区	土層図あり	土器，石，炭化木	ＳＩ１柱穴
Ｐ50	Ｄ３区	不明	土器	
Ｐ51	Ｄ３区	暗褐色土	なし	
Ｐ52	Ｄ２区	黒褐色土（炭含む）	なし	
Ｐ53	Ｄ２区	暗褐色土	なし	
Ｐ54	Ｄ２区	黒褐色土	なし	ＳＢ３柱穴
Ｐ55	Ｄ２区	黒褐色土（炭含む）	土器，石	
Ｐ56	Ｄ２区	黒褐色土（炭・焼土含む）	土器，石	ＳＢ３柱穴
Ｐ57	Ｄ２区	黒褐色土（炭・焼土含む）	土器	ＳＢ３柱穴
Ｐ58	Ｄ２区	黒褐色土（炭・焼土含む）	土器，石	ＳＢ２柱穴
Ｐ59	Ｄ２区	暗褐色土	なし	
Ｐ60	Ｄ２区	黒褐色土（炭含む，下位地山ブロック含む）	なし	ＳＢ５柱穴
Ｐ61	Ｄ２区	土層図あり	なし	ＳＢ６柱穴
Ｐ62	Ｄ２区	暗褐色土	土器	ＳＢ５柱穴
Ｐ63	Ｄ２区	黒褐色土（地山ブロック含む）	なし	ＳＢ２柱穴
Ｐ64	Ｄ２区	土層図あり	土器	ＳＢ２柱穴
Ｐ65	Ｄ２区	土層図あり	なし	ＳＢ２・ＳＢ４柱穴
Ｐ66	不明	暗褐色土（下位地山ブロック含む）	土器，石	
Ｐ67	Ｄ１区・Ｄ２区	黒褐色土（炭含む）	土器	
Ｐ68	Ｄ２区	暗褐色土（炭含む）	土器	
Ｐ69	Ｄ２区	上位黒褐色土，中位地山ブロック含む，下位暗褐色土	土器	
Ｐ70	Ｄ２区	暗褐色土	なし	ＳＢ５柱穴
Ｐ71	Ｄ２区	黒褐色土（炭・焼土含む）	土器	ＳＢ６柱穴
Ｐ72	Ｄ２区	暗褐色土	なし	ＳＢ３柱穴
Ｐ73	Ｄ２区	不明	なし	
Ｐ74	Ｄ２区	黒褐色土（炭・焼土含む）	なし	
Ｐ75	Ｃ１区	暗褐色土（炭含む）	土器	
Ｐ76	Ｄ２区	黒褐色土（炭含む）	なし	
Ｐ77	Ｃ１区	暗褐色土	なし	

遺構番号	グリッド	埋土	出土遺物	特記事項
P 78	C 0区	暗褐色土（地山ブロック含む）	土器	
P 79	C 0区	暗褐色土（地山ブロック含む）	土器	
P 80	D 2区	不明	なし	
P 81	C 4区	上位暗褐色土，下位地山土含む	土器	
P 82	C 2区	黒褐色土（下位地山ブロック・炭含む）	なし	
P 83	C 2区	土層図あり	土器	SB 1柱穴
P 84	C 2区	土層図あり	土器	SB 1柱穴
P 85	C 2区	暗褐色土（焼土塊含む）	なし	
P 86	C 2区	土層図あり	土器	SB 1柱穴
P 87	C 2区	土層図あり	土器	SB 1柱穴
P 88	C 2区	土層図あり	土器	SB 1柱穴
P 89	D 2区	中心黒褐色土・縁暗褐色土（地山ブロック含む）	土器、石	SB 6柱穴
P 90	E 2区	不明	なし	SB 4柱穴
P 91	C 1区	不明	なし	
P 92	D 1区	黒褐色土（下位地山ブロック・炭含む）	土器	
P 93	D 1区	不明	なし	
P 94	D 1区	黒褐色土	なし	
P 95	D 1区	不明	土器	
P 96	D 1区	暗褐色土（炭含む）	土器	
P 97	D 1区	暗褐色土	土器	
P 98	D 1区	黒褐色土	土器	
P 99	D 1区	暗褐色土	土器	
P 100	D 1区	暗褐色土	なし	
P 101	D 1区	暗褐色土（焼土含む）	土器	
P 102	D 1区	不明	土器	
P 103	D 1区	黒褐色土（炭含む）	土器	
P 104	D 1区	暗褐色土	なし	
P 105	不明	不明	なし	
P 106	不明	暗褐色土（下位地山ブロック含む）	土器	
P 107	E 1区	黒褐色土	なし	
P 108	E 1区	黒褐色土	なし	SB 7柱穴
P 109	E 1区	黒褐色土（炭含む）	土器	SI 2柱穴
P 110	E 1区	黒褐色土	なし	SB 7柱穴
P 111	E 1区	暗褐色土（地山ブロック・炭含む）	なし	SB 7柱穴
P 112	E 1区	暗褐色土	土器	SI 3柱穴
P 113	E 2区	不明	なし	
P 114	C 1区	暗褐色土	なし	
P 115	不明	不明	土器	
P 116	C 4区	黒褐色土	土器	
P 117	C 4区	不明	土器	
P 118	不明	不明	土器，焼土塊，焼石	
P 119	D 4区	暗褐色土	石	
P 120	C 3区	暗褐色土（下位地山ブロック含む）	土器	
P 121	不明	不明	土器	
P 122	D 3区	暗褐色土（炭含む）	なし	
P 123	不明	黒褐色土（炭含む）	なし	
P 124	C 2区	暗褐色土	土器	
P 125	D 2区	黒褐色土（炭含む）	なし	
P 126	D 2区	暗褐色土	なし	
P 127	C 3区	土層図あり	石	SK 2内
P 128	B 1区	暗褐色土	土器	
P 129	C 1区	暗褐色土	土器	
P 130	C 1区	暗褐色土（下位地山ブロック含む）	土器，石	
P 131	C 1区	暗褐色土（炭含む）	土器	
P 132	C 1区	黒褐色土	土器	
P 133	B 2区	黒褐色土（炭含む）	土器	

遺構番号	グリッド	埋土	出土遺物	特記事項
P 134	B 2区	中心暗褐色土，縁地山ブロック含む	土器	
P 135	B 2区	不明	土器	
P 136	B 2区	暗褐色土	なし	
P 137	B 2区	黒褐色土（炭・焼土含む）	土器	
P 138	B 2区	黒褐色土（下位地山ブロック含む）	土器，石	
P 139	B 2区	暗褐色土	土器	
P 140	B 2区	不明	焼石	
P 141	C 2区	黒褐色土	土器	
P 142	C 2区	褐色土（地山ブロック含む）	なし	
P 143	C 2区	褐色土（地山ブロック含む）	なし	
P 144	C 2区	黒褐色土	なし	
P 145	C 3区	上位黒褐色土（炭含む），下位褐色土	土器	
P 146	C 3区	褐色土	土器	
P 147	不明	不明	土器	
P 148	D 3区	不明	土器	SI 1柱穴
P 149	不明	不明	土器，石	
P 150	D 3区	不明	土器	
P 151	D 2区	暗褐色土	土器	SB 3柱穴
P 152	C 2区	黒褐色土（炭・焼土含む）	土器	
P 153	D 2区	黒褐色土（下位地山ブロック含む）	土器	SB 5柱穴
P 154	D 2区	黒褐色土（下位地山ブロック含む）	土器	
P 155	D 2区	暗褐色土（地山ブロック含む）	土器	
P 156	D 2区	暗褐色土（地山ブロック含む）	土器	
P 157	D 2区	暗褐色土（地山ブロック含む）	土器	
P 158	D 2区	暗褐色土（地山ブロック含む）	土器，石	
P 159	D 2区	暗褐色土（炭含む，下位地山ブロック含む）	土器	
P 160	D 2区	不明	土器，石	
P 161	D 2区	褐色土	土器	
P 162	D 2区	暗褐色土	土器，石	
P 163	C 2区	不明	石	
P 164	D 3区	不明	土器	
P 165	B 1区	暗褐色土（下位地山ブロック含む）	土器	
P 166	不明	不明	土器	
P 167	不明	不明	土器	
P 168	C 3区	暗褐色土	土器	
P 169	C 3区	暗褐色土	土器	
P 170	不明	不明	土器	
P 171	C 4区	不明	土器	
P 172	C 4区	不明	石器（すり石）	
P 173	C 4区	上位黒褐色土，下位褐色土	土器，石	
P 174	C 4区	不明	土器，石	
P 175	C 4区	不明	土器	
P 176	C 4区	暗褐色土（下位地山ブロック含む）	土器，焼土塊	
P 177	C 4区	土層図あり	土器，焼土塊	SI 7柱穴
P 178	C 4区	土層図あり	土器，焼土塊	SI 7柱穴
P 179	C 4区	土層図あり	土器，焼土塊	SI 7柱穴
P 180	C 5区	暗褐色土	なし	
P 181	C 5区	不明	土器	
P 182	B 5区	土層図あり	土器	SI 8柱穴
P 183	C 5区	土層図あり	土器，石，焼土塊	
P 184	C 5区	暗褐色土	土器，石	
P 185	C 5区	土層図あり	土器，石	SI 4柱穴
P 186	C 5区	土層図あり	なし	
P 187	C 5区	土層図あり	土器，石	SI 5柱穴
P 188	B 5区	土層図あり	石	SI 4柱穴
P 189	C 5区	暗褐色土（炭・地山ブロック含む）	土器	SI 9柱穴
P 190	C 5区	不明	なし	SI 6柱穴
P 191	B 5区	不明	土器	SI 9柱穴

遺構番号	グリッド	埋土	出土遺物	特記事項
P192	B5区	土層図あり	なし	SI8柱穴
P193	B5区	暗褐色土	土器，石	
P194	B5区	不明	土器	
P195	B5区	不明	土器，石，焼石	
P196	B5区	暗褐色土	土器	
P197	B5区	不明	土器	
P198	B5区	淡暗褐色土	土器	
P199	B5区	不明	土器，石	
P200	不明	不明	土器	
P201	B4区	不明	土器	
P202	不明	不明	土器	
P203	A4区	不明	土器，石	
P204	A4区	不明	土器，石	
P205	B4区	不明	土器	
P206	B4区	不明	土器	
P207	B4区	不明	土器	
P208	B4区	不明	石	
P209	C5区	不明	石	SI5内土坑か
P210	C6区	土層図あり	土器，石	SI4柱穴
P211	C6区	土層図あり	土器	SI6柱穴
P212	C6区	土層図あり	土器	SI5柱穴
P213	B6区	不明	土器	
P214	B6区	淡黒褐色土	土器，石	
P215	B4区	上位褐色土，下位暗褐色土	土器	
P216	B4区	暗褐色土	土器	
P217	B4区	不明	なし	
P218	B4区	暗褐色土	なし	
P219	B4区	暗褐色土（地山ブロック含む）	なし	
P220	B4区	暗褐色土（地山ブロック含む）	焼土塊	
P221	B4区	淡黒褐色（地山ブロック含む）	なし	
P222	B4区	不明	なし	
P223	B4区	不明	なし	
P224	B4区	暗褐色土	土器	
P225	B4区	黒褐色土	なし	
P226	C3区	暗褐色土（地山ブロック含む）	なし	SI1柱穴
P227	C3区	暗褐色土	なし	SI1柱穴
P228	C5区	土層図あり	土器	SI4柱穴
P229	C5区	土層図あり	石	SI5柱穴
P230	C5区	暗褐色土	なし	
P231	E1区	不明	なし	SI3柱穴
P232	E1区	不明	土器	
P233	D1区	不明	土器	SI3柱穴
P234	不明	不明	土器	
P235	不明	上位黒褐色土，下位暗褐色土	なし	
P236	E1区	上位黒褐色土，下位暗褐色土	なし	
P237	D0区	不明	なし	
P238	D0区	不明	土器	
P239	E0区	暗褐色土	なし	SI10柱穴
P240	E0区	暗褐色土（炭含む）	土器	SI3柱穴
P241	E1区	暗褐色土	土器	SI3柱穴
P242	E0区	暗褐色土（炭含む）	土器	
P243	E0区	暗褐色土（炭含む）	土器	SI10柱穴
P244	E0区	不明	なし	
P245	E1区	暗褐色土（炭含む）	なし	SI3柱穴
P246	E1区	暗褐色土	土器	
P247	B4区	暗褐色土	土器	
P248	A4区	不明	なし	
P249	A4区	不明	石	
P250	A5区	不明	なし	
P251	B4区	不明	なし	
P252	C4区	不明	土器，石	
P253	C4区	不明	土器	SI7柱穴
P254	C5区	不明	なし	
P255	C5区	土層図あり	なし	SI7柱穴
P256	C5区	不明	土器	SI7柱穴
P257	C5区	不明	なし	
P258	C5区	不明	土器，石	
P259	C5区	不明	土器，石	
P260	C5区	不明	土器	SI4炉か
P261	B6区	暗褐色土	土器	
P262	E1区	不明	なし	

遺構番号	グリッド	埋土	出土遺物	特記事項
P263	E1区	黒褐色土	土器，炭化木，焼土塊	SI2柱穴
P264	E1区	暗褐色土（地山ブロック含む）	土器	
P265	E1区	暗褐色土（地山ブロック含む）	土器	
P266	E1区	暗褐色土	なし	
P267	E1区	暗褐色土	土器	
P268	E1区	黒褐色土	土器	SI10柱穴
P269	E1区	暗褐色土	なし	
P270	E1区	暗褐色土	なし	
P271	E1区	暗褐色土	土器	
P272	C4区	土層図あり	土器	SB8柱穴，SD14より古
P273	C4区	暗褐色土（地山ブロック・焼土含む）	なし	
P274	C5区	土層図あり	なし	
P275	C5区	大粒の炭含む	土器，鉄器	
P276	C3区	暗褐色土	土器	
P277	C3区	不明	なし	
P278	C4区	暗褐色土（地山ブロック含む）	土器	SI1柱穴
P279	D3区	暗褐色土	土器	
P280	不明	不明	なし	
P281	不明	不明	土器	
P282	C3区	不明	焼石	
P282	C3区	不明	焼石	
P283	C3区	不明	なし	
P284	C3区	不明	土器	
P285	C3区	不明	土器	
P286	C3区	不明	土器	
P287	C3区	不明	土器	
P288	不明	不明	土器	
P289	不明	不明	土器	
P290	D2区	不明	土器	
P291	C3区	不明	土器	SK28内
P292	D2区	不明	土器	SK64内
P293	不明	不明	土器	
P294	不明	不明	土器	
P295	B3区	不明	土器，炭化木	SK57内
P296	C5区	不明	土器，石	
P297	C5区	不明	土器，石	
P298	B3区	不明	土器	
P299	D2区	不明	土器	
P300	D2区	不明	土器	
P301	C0区	不明	土器	
P302	B2区	不明	土器，石	
P303	C4区	焼土，炭含む	炭化木，焼土塊	
P304	D1区	不明	土器	
P305	D1区	不明	土器	
P306	D3区	不明	なし	
P307	C3区	暗褐色土	なし	SK3内
P308	C3区	暗褐色土	なし	SK3内
P309	D3区	不明	土器	SI1柱穴
P310	D3区	不明	なし	
P311	D4区	不明	鉄器	P14と同一
P312	D4区	不明	なし	
P313	C4区	不明	なし	
P314	C5区	暗褐色土（地山ブロック含む）	土器，石	
P315	D1区	不明	土器，石	
P316	不明	不明	土器	
P317	E1区	不明	なし	
P318	C3区	土層図あり	なし	SI1柱穴，SK2内
P319	C3区	不明	なし	SI1柱穴
P320	C3区	不明	なし	SI1柱穴，SK3内
P321	E1区	不明	なし	SI3柱穴
P322	C4区	不明	なし	SI7柱穴
P323	C4区	不明	なし	SI7柱穴，SK45内
P324	C2区	不明	なし	SB1柱穴か
P325	D3区	不明	なし	SB3柱穴，SK7内
P326	D2区	不明	なし	SB5柱穴
P327	E1区	不明	なし	SB7柱穴
P328	E1区	不明	なし	SB7柱穴
P329	C4区	不明	なし	SB8柱穴
P330	C4区	不明	なし	SB8柱穴
P331	C4区	不明	なし	SB8柱穴
P332	D2区	不明	なし	
P333	D1区	不明	なし	
P334	C4区	不明	なし	SB8柱穴

V　遺　物

1　弥生土器

図29の１～11は建物出土。１は甕で、重複するＳＩ１周溝とＳＢ８柱穴の境で出土した。頸部内面に面が作り出される特徴から、後期終末に降る時期と考える。２は高杯で、ＳＩ１柱穴出土。高座型式に含まれる器形で、１とほぼ同時期である。よって１もＳＩ１に伴う可能性が高い。３は甕、４は壷で、ともにＳＩ２周溝出土。４は精製壷で、類例には球形の胴部が多い。５は甕、６は器台で、ともにＳＩ３周溝出土。３と５はともに月影甕で、その発達度から３が後期終末の新相、５が古相に位置付けられる。６の器台もやや大型であるが薄手の作りであり、５の時期が下限となる。７は器台で、ＳＩ４柱穴出土。重厚な作りで口縁の有段部分が短く、後期後半の時期で捉えられる。８は甕、９は脚部、10はミニチュア土器で、ＳＩ５周溝出土。９は全体に作りの良い小型の脚で、後期終末の高杯と思われ、８・10の時期も暗示している。11は器台の柱部で、重複するＳＩ５柱穴とＳＩ６周溝の境から出土した。遺構の先後関係からも後期終末を遡る資料ではない。

図29の12～図30の８は溝出土。12は甕で、ＳＤ13出土。ＳＤ13はＳＤ14の北に位置するきわめて浅い溝で、図化できなかった遺構である。13・14は甕、15は壷、16は鉢で、ＳＤ15から出土。13と14は同一個体と思われる。ただし、外面が磨耗した14は内面の頸部に面が作り出されているが、擬凹線が遺存する13では認められず、不整で連続していないことがわかる。15は甕と調整が共通する粗製壷で、胴部は球形であろう。16は器高が小さく口縁が立つ精製鉢。13～16は後期終末に位置付けられる資料である。図30の１は甕、２は底部、３は壷、４は鉢、５は柱部で、ＳＤ７から出土。２の調整は甕に通有であり、甕か粗製壷であろう。３は精製で、口縁が長く伸びる無頸壷。胴部とは継ぎ目で剥離している。類例は有台が多い。４は精製鉢。類例は有台・無台の両方がある。５は高杯か器台の円筒状の柱部。１～５は後期後半に位置付けられる資料である。６は甕、７は壷でＳＤ17出土。６は後期後半に通有で、法仏甕とでも言うべき器形。７の浮文の付く精製壷もほぼ同時期であろう。８は甕でＳＤ22出土。頸部内面が鋭く屈曲する特徴は６に共通し、後期後半の時期に多い。

図30の９～図31の４は土坑出土。９は壷でＳＫ４出土。全体に厚手で、口縁部と頸部のバランスから、長胴器形の粗製壷と考える。10は甕でＳＫ10出土。11・12は壷でＳＫ13出土。11は長頸の粗製壷、12は精製壷である。13は甕、14は壷底部、15は蓋で、ＳＫ14出土。16は壷、17は鉢でＳＫ30出土。16は長頸の粗製壷で、口縁部内面の「＋」記号は「｜」・「―」の順の刻みが２回繰り返されている。さらに、前者が断面Ｖ字で深く、後者はＵ字で浅くなっており、施入の原体や段階が異なる可能性がある。17は粗製鉢で、ＳＢ３柱穴出土の破片と接合する。図31の１は甕、２は壷、３は高杯でＳＫ35出土。４は甕でＳＫ36出土。近江系の受口口縁甕である。図31の５～７は落ち込み出土。５は高杯か器台で、ＳＸ２出土。赤彩は彩文の可能性がある。６は甕でＳＸ９出土。７も甕でＳＸ14出土、やや小型のくの字口縁で、希少な存在である。図31の８～13は小穴出土。８は脚部でＰ130出土、９は甕でＰ133出土、10は底部でＰ135出土、11は甕でＰ156出土、12は底部でＰ234出土、13は甕でＰ261出土である。図31の14～19は遺構検出面出土。14～17は甕、18は高杯、19は有段の脚部である。

出土した弥生土器は全般に遺存が悪く、図化できた点数も決して多くないが、概ね弥生後期後半から終末の時期に位置付けられる資料であり、弥生後期の集落が存続した時期を示すと考えられる。

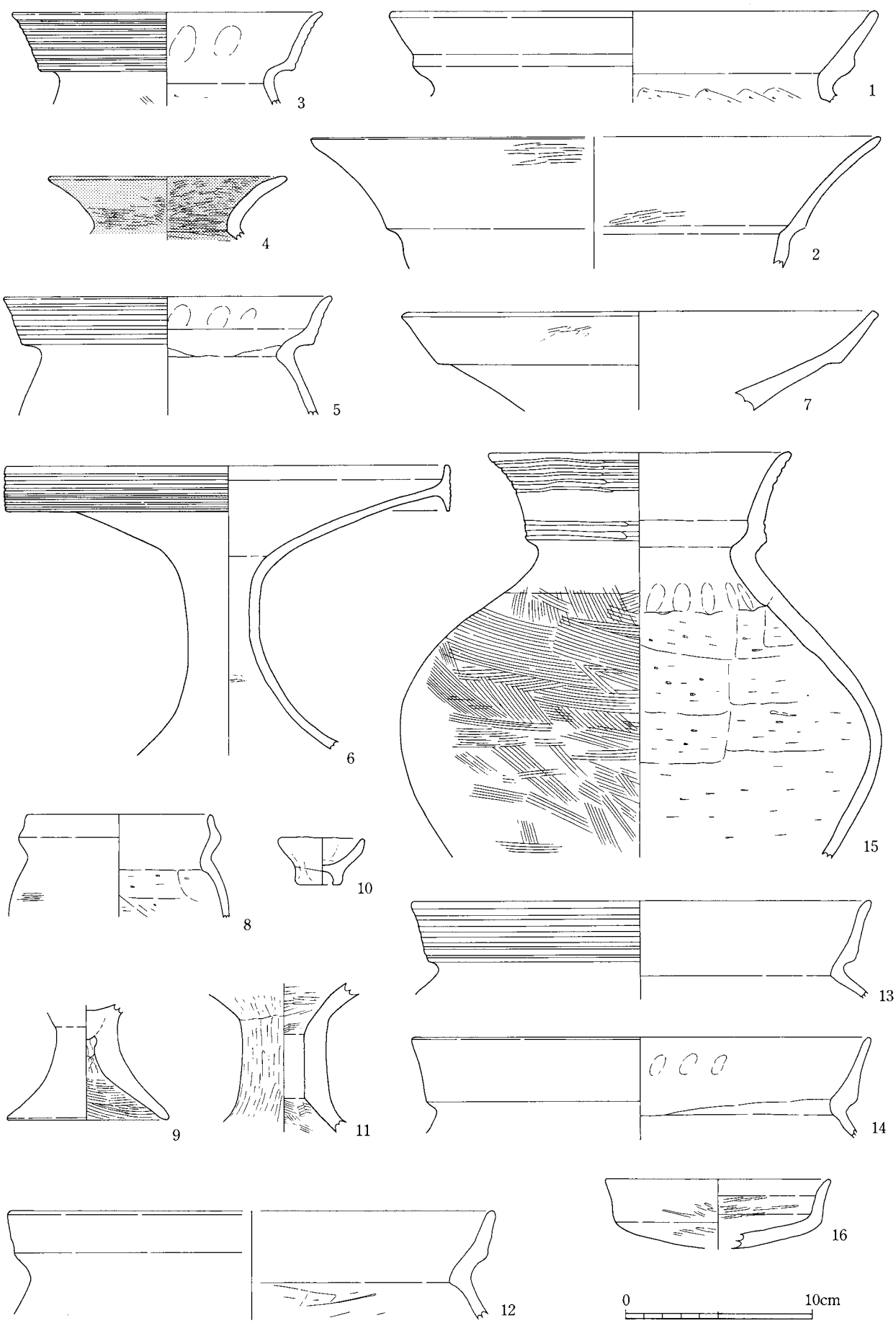


図29　弥生土器1（S=1/3）

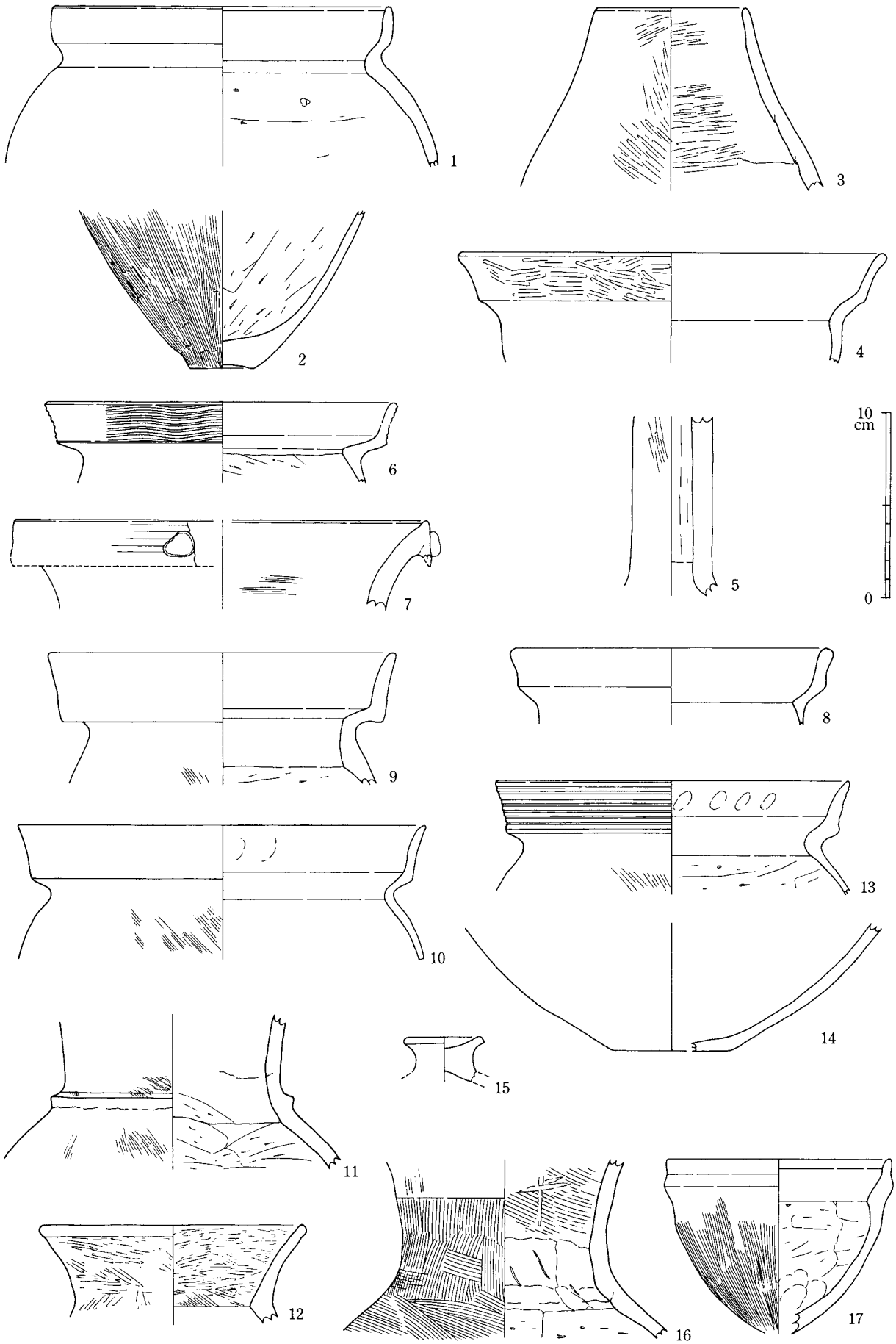


図30　弥生土器2（S=1/3）

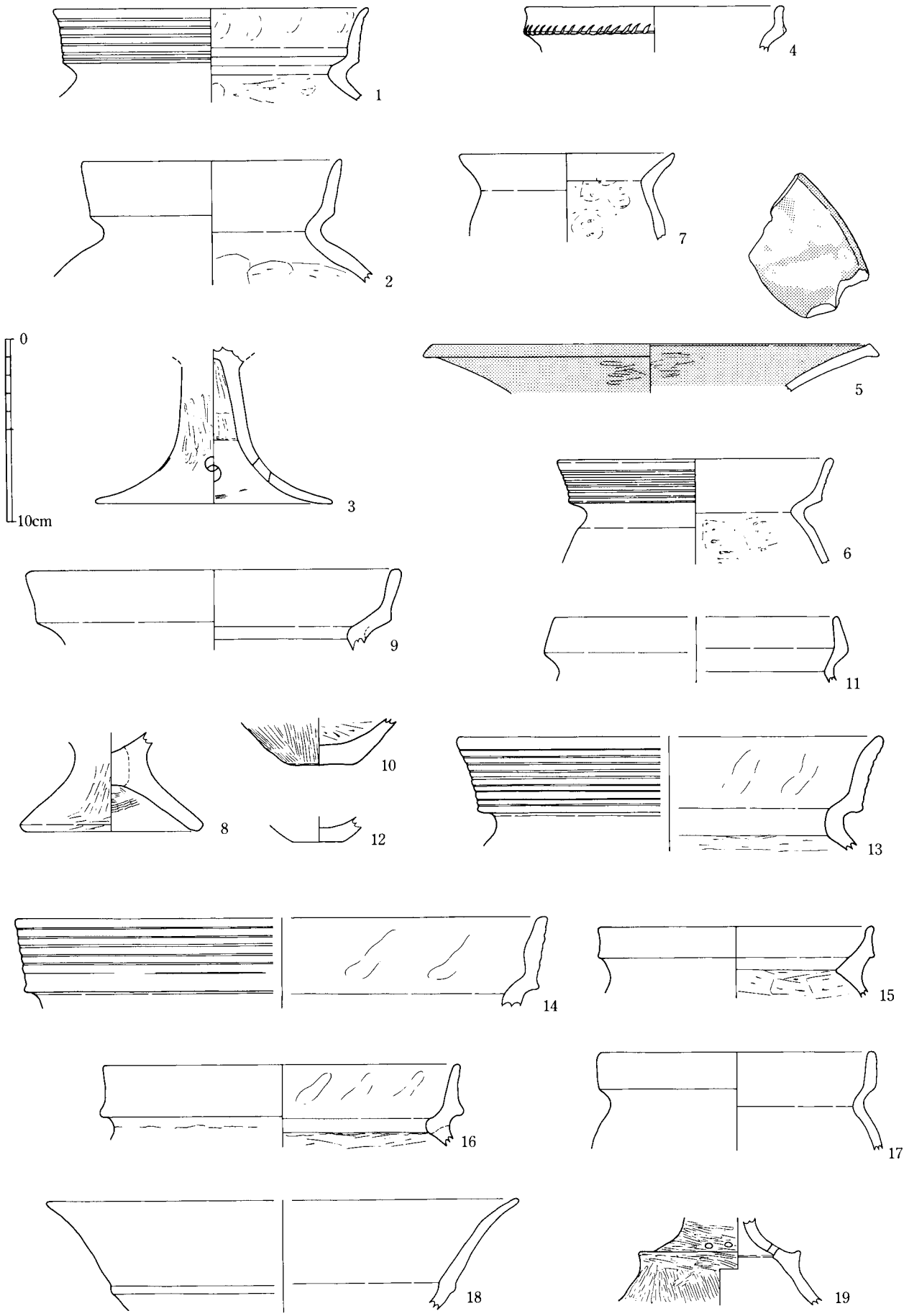


図31　弥生土器3（S=1/3）

2　土師器・陶磁器・銭貨

近世・近代の火葬墓ＳＫ70からは図32の１（蓋）・２（身）の土師器（蔵骨器）が出土した。ともに縁の約1/4が欠失する程度であり、よく遺存している。よく水被された胎土がロクロ成形（ナデ・ケズリ）で仕上げられ、１は外縁に、２は底部外縁に「○」が墨書きされている。蓋１は身２内に落ち込んでいたためか、器面の残りがよい。２はやや外面が風化しているが、全体が墨をかぶったように薄黒くなっている。土坑ＳＫ１からは３の蔵骨器、４の陶器が出土した。３は２の縮小型とでも言うべき品で、大きさ以外はほとんど同巧で、器面も同様に薄黒い。４は産地不明陶器の丸碗で、明黄褐色の釉薬は高台付近で境が不揃いになっている。火葬場ＳＸ19では検出面、排土から磁器、石板、銭貨が得られている。５は肥前系磁器の丸碗で、呉須は淡い藍色で植物文を描く。６は瀬戸美濃系磁器と思われる端反碗で、呉須は濃いコバルトブルーで植物文を描く。11は一銭銅貨である。また、ＳＸ12からは７～10の銭貨が出土している。10は２枚が錆着しているので計５枚、全て寛永通宝の新寛永で、被熱している。５枚の類例もあることから[6]、火葬に伴う六道銭と理解したい。

なお、図化しなかった陶磁器は、ＳＫ64から肥前系磁器、ＳＸ12から瀬戸美濃系陶器、他には産地不明の磁器も断片的に出土している。陶磁器は、肥前系磁器が概ね大橋編年Ｖ期[7]を上限とし、この他は明治以降の年代が与えられる。蔵骨器については年代的な定点を４との共伴に求めて、陶磁器の時期幅で考えたい。以上から、火葬遺構の幕末から明治にかけての展開が想定できる。

3　石器・石製品

図33の１・２は打製石斧。製作技術は同巧ながら１は長方形、２は撥形を指向する。３・４はすり石類。４は主面の一方が平坦であり、台石的な使用がうかがわれる。５は砥石。全ての面が平滑であり、もともとは直方体の砥石が欠損したと思われる。６は石板。７～10は剥片。いずれも硬質な石材が使われており、７・８の剥離面はとても鋭利で、８は楔状に形が整っている。この他の石器は、断片的な出土状況であるが台石、すり石、石斧、石錘、剥片、石核がある。時期と性格については、２・４・５は弥生後期の遺構から土器を伴って出土しており、同時代の集落に伴う石器と考えたい。６は火葬遺構の出土から近代以降の時期であろうがその関連は不明である。７～10の剥片は石材的にも縄文時代に遡ると考えたい。１は近世・近代の遺構に混入したもので、３と共に時期は不明である。

4　その他の遺物

縄文土器、土師器、須恵器はいずれも小破片で、詳しい時期は不明である。鉄器はＳＤ３・ＳＫ12・ＳＫ53・ＳＫ68・ＳＸ３・ＳＸ９・ＳＸ15・Ｐ14・Ｐ275から出土している（写真XV）。位置からＳＤ３例がＳＩ３、Ｐ275例がＳＩ４かＳＩ５、Ｐ14例がＳＩ１に伴うと考えられ、錆がひどいがいずれも鉈状で、弥生後期の工具の可能性が高い。ＳＸ９例は刀子状、ＳＫ68例は鋤先状の鉄板、その他の例は小鉄片である。ＳＫ68例は近代以降の時期と推定される。骨は小骨片で、火葬遺構に加えて、ＳＫ62・ＳＸ１・ＳＸ10・ＳＸ11・ＳＸ13から出土しているほか、遺構の周囲に散布しており、近世・近代の火葬に伴うものであろう。焼土塊・炭化木は弥生後期の建物を含む多くの遺構から出土しており（写真XV）、大半は弥生後期の集落に伴うと思われる。その性格については不明確であるが、土器の焼成や建物の壁材・部材が広範囲の火災を被ることによって生じた可能性があろう。

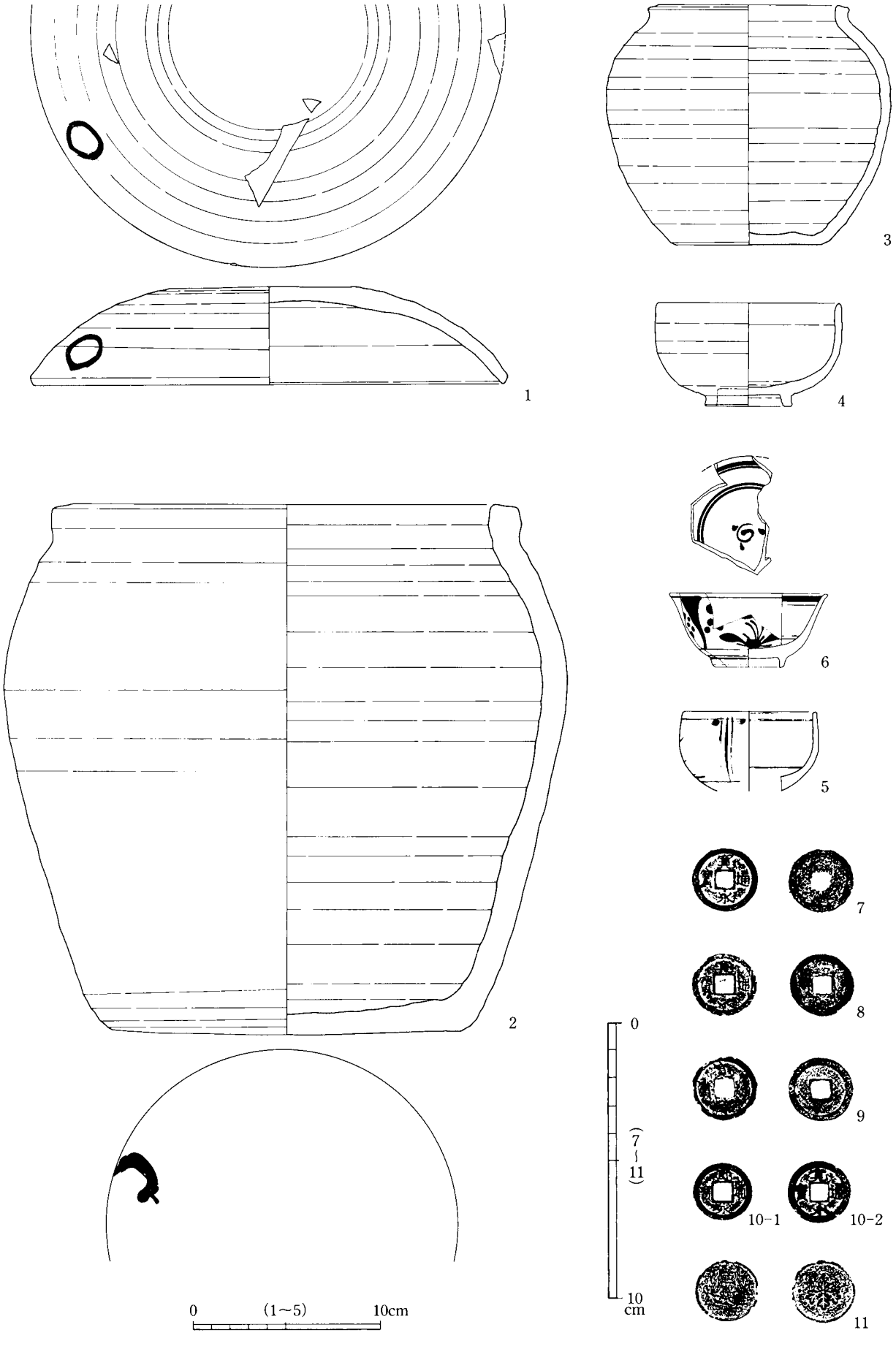


図32　土師器・陶磁器・銭貨（S＝1/3・1/2）

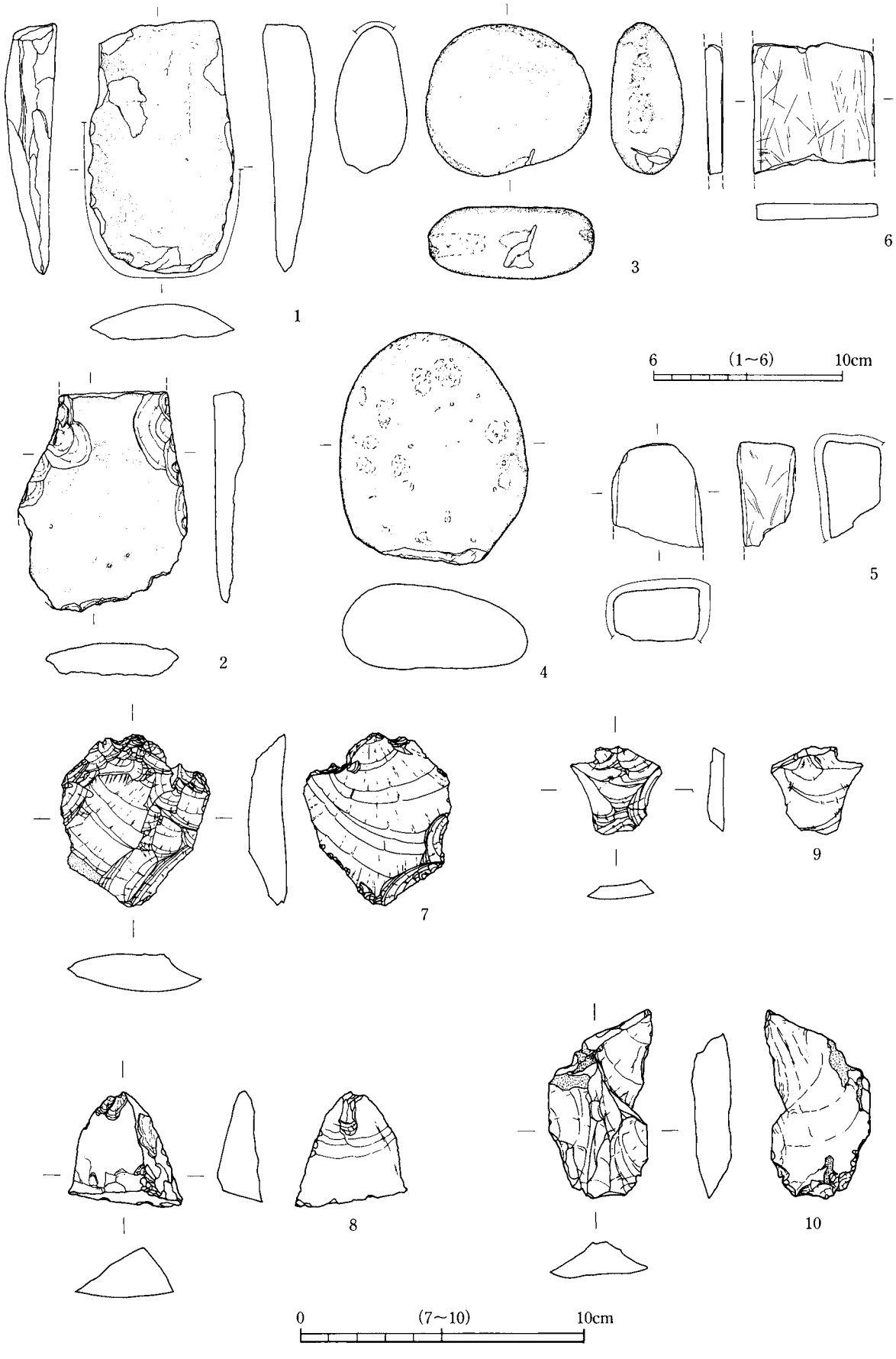


図33　石器・石製品（S=1/3・1/2）

遺物表凡例

［　図　No.］「遺物実測図を掲載した図の番号－図内の遺物個々の番号」である。
［位置・遺構］遺構出土の遺物は遺構名、それ以外の遺物は出土した地点（グリッド等）を判明している限り詳しく記載した。遺構の地点については遺構一覧表を参照のこと。
［　種　類　］遺物観察表は弥生土器、石器、土師器・陶磁器、銭貨の別でまとめているが、土師器・陶磁器についてのみ土師器・陶器・磁器の別を記載した。
［　器　種　］銭貨を除くすべての遺物について、形態・機能差で分類される器種を記載した。
［調整・文様］弥生土器のみ記載した。まず内外面で大別して外面から、次に口縁から底までの各部位を細別して上位から示し、同一部位の調整・文様の重複は施入の古い順に示して「・」で区切った。「外口…・…・胴…／内…」となる。
［　色　調　］弥生土器のみ記載した。色彩と名称は新版標準土色帳に準拠し、内外面で異なる場合は「外…／内…」と示した。
［　胎　土　］弥生土器のみ記載した。粘土地に含有される砂礫の粒径と量、その他特徴的な含有物について主に裸眼で観察した。砂礫は概ね粒径２㎜以上をＬ、１㎜前後をＭ、0.5㎜以下をＳとし、粉状のものをシルトと表記した。量は微・少・多の３段階で示した。その他の含有物では角閃石、海綿骨片、雲母、焼土塊を示した。
［サ　イ　ズ］石器は長さ（図で見た縦）・幅（同横）・厚さ（同奥行）、土師器・陶磁器は口径・底径・器高、銭貨は外径・孔径・厚さをそれぞれ示した。単位は㎝で、読み取りは0.1㎝まで。欠損品については数値を（　）書きしたが、石器剥片はそのままにした。弥生土器については遺存が悪く正確さを欠く数値と思われるため、記載しなかった。
［　重　さ　］石器と銭貨について記載した。単位はｇで、読み取りは0.1ｇまで。欠損品については数値を（　）書きしたが、石器剥片はそのままにした。
［　石　材　］石器のみ記載した。埋文センター職員の教示をもとに安が判断したものである。
［遺　存　度］弥生土器、土師器・陶磁器の分割同心円上で測定される各部位の遺存度を上位から分数で示した。「口…／…・底…／…」となる。
［実　測　No.］実測原図の整理番号。銭貨や剥片等の微細なものを除いては、遺物そのものに注記されており、実物との照合の便を図った。
［　銭　貨　］銭貨のみ記載した。芝田悟氏の調査による。鋳込まれた銭貨の銘柄である。
［　名　称　］銭貨のみ記載した。芝田悟氏の調査による。寛永通宝については、主な鋳造所から発した通称である。
［鋳　造　年］銭貨のみ記載した。芝田悟氏の調査による。右に年号を示し、西暦年は左に（　）書きした。

表5　弥生土器

図No.	位置・遺構	器種	調整・文様	色調	胎土	遺存度	実測No.	備考
29－1	ＳＩ1かＳＢ8 (SD14・P272)	甕	外ヨコナデ／内口ヨコナデ・胴ケズリ	外褐灰／内にぶい褐	砂礫Ｌ少ＭＳ多，角閃石，雲母，海綿	口1/9	C17	
29－2	ＳＩ1（Ｐ8）	高杯	ミガキ	浅黄橙	砂礫Ｍ多	口1/6	C45	
29－3	ＳＩ2（ＳＤ2）	甕	外口ヨコナデ・擬凹線・胴ハケ／内口ヨコナデ・指圧痕・胴ケズリ	浅黄橙	砂礫ＬＭ多	口1/9	C11	外面黒斑，煤
29－4	ＳＩ2（ＳＤ2）	壷	外ミガキ／内口ミガキ胴ケズリ	浅黄橙	砂礫ＭＳ少シルト多，海綿，焼土塊	口1/4	C12	内外面赤彩
29－5	ＳＩ3（ＳＤ3）	甕	外口ヨコナデ・擬凹線・胴摩耗/内口ヨコナデ・指圧痕・胴ケズリ	外にぶい橙/内灰褐	砂礫Ｍ多	口1/6	C13	
29－6	ＳＩ3（ＳＤ3）	器台	外受擬凹線・柱摩耗／内摩耗	にぶい橙	砂礫ＭＳ	脚1/1	C19	
29－7	ＳＩ4（P185）	器台	外ミガキ／内摩耗	にぶい黄橙	砂礫Ｌ少Ｍ多	受3/8	C28	外面黒斑、Ｐ288と接合
29－8	ＳＩ5（ＳＤ19）	甕	外口ヨロナデ・胴ハケ・ナデ／内口ヨコナデ・胴ケズリ	にぶい黄橙	砂礫ＬＭＳ少	口1/4	C23	
29－9	ＳＩ5（ＳＤ19）	高杯	外摩耗／内脚ハケ	にぶい黄橙	砂礫ＭＳ	脚1/1	C19	
29－10	ＳＩ5（ＳＤ19）	ミニチュア土器	指圧痕・ナデ	外にぶい橙／内褐	砂礫ＬＭ多Ｓ少	完形	C6	外面黒斑，ＳＫ37と接合

図No.	位置・遺構	器種	調整・文様	色調	胎土	遺存度	実測No.	備考
29－11	ＳＩ５かＳＩ６(SD20・Ｐ187)	器台	外ミガキ／内受ナデ・脚ハケ	にぶい橙	砂礫ＬＭ少Ｓ多，雲母		C24	
29－12	ＳＤ13	甕	外ヨコナデ／内口ヨコナデ・胴ケズリ	にぶい橙	砂礫ＬＭ多	口1/13	C20	
29－13	ＳＤ15	甕	外ヨコナデ・口擬凹線／内口ヨコナデ・胴ケズリ	にぶい橙	砂礫ＬＭ多	口1/9	C27	外面煤，14と同一個体か
29－14	ＳＤ15	甕	外摩耗／内口縁ヨコナデ・指圧痕・胴ケズリ	にぶい橙	砂礫ＬＭ多	口1/8	C51	外面煤，13と同一個体か
29－15	ＳＤ15	壷	外口ヨコナデ・擬凹線・胴ハケ／内口ヨコナデ・頸指圧痕・胴ケズリ	橙	砂礫ＬＭＳ多	口1/1	C26	外面黒斑
29－16	ＳＤ15	鉢	ミガキ	にぶい橙	砂礫ＬＭ少Ｓ多	口1/2	C29	
30－ 1	ＳＤ7	甕	外口ヨコナデ・胴摩耗／内口ヨコナデ・胴ケズリ	にぶい橙	砂礫ＬＭＳ多，雲母，海綿	口2/9	C16	
30－ 2	ＳＤ7	底部	外胴ハケ・底ナデ／内ケズリ	外にぶい橙／内灰褐	砂礫Ｌ少Ｍ多	底1/1	C50	内外面黒斑，外面煤，ＳＫ57と接合
30－ 3	ＳＤ7	壷	外ミガキ／内ミガキ・下位ナデ	外にぶい黄橙／内灰黄褐	砂礫ＭＳ少，海綿	口1/6	C18	内面接合痕
30－ 4	ＳＤ7	鉢	外口ミガキ・胴摩耗／内摩耗	外にぶい黄／内にぶい黄橙	砂礫ＬＭ多	口1/12	C15	外面黒斑
30－ 5	ＳＤ7	柱部	外ミガキ／内シボリ・ナデ	外灰白／内褐灰	砂礫Ｍ少		C14	
30－ 6	ＳＤ17	甕	外ヨコナデ・口擬凹線／内口ヨコナデ・胴ケズリ	外褐灰／内にぶい橙	砂礫Ｍ多	口1/6	C22	
30－ 7	ＳＤ17	壷	外ヨコナデ・口浮文／内上位ヨコナデ・下位ハケ	灰褐	砂礫ＭＳ多，雲母	口1/16	C21	
30－ 8	ＳＤ22	甕	外ヨコナデ／内口ヨコナデ・胴ケズリ	外橙／内にぶい橙	砂礫Ｌ少Ｍ多，海綿，焼土塊	口1/10	C25	
30－ 9	ＳＫ4	壷	外ヨコナデ・胴ハケ／内口頸ヨコナデ・胴ケズリ	にぶい橙	砂礫ＬＭＳ少	口1/36	C43	
30－10	ＳＫ10	甕	外口摩耗・胴ハケ／内摩耗・口指圧痕	外にぶい黄橙／内浅黄橙	砂礫Ｍ多	口1/12	C36	外面黒斑，煤
30－11	ＳＫ13	壷	外ハケ・凸帯ヨコナデ／内口ハケ・ナデ・頸ユビオサエ・胴ケズリ	外浅黄橙／内にぶい黄橙	砂礫Ｌ微ＭＳ多		C2	
30－12	ＳＫ13	壷	外ミガキ・端ヨコナデ／内ミガキ	外にぶい橙／内にぶい黄橙	砂礫ＭＳ少，海綿，焼土塊	口1/6	C1	
30－13	ＳＫ14	甕	外口ヨコナデ・擬凹線・胴ハケ／内口ヨコナデ・指圧痕・胴ケズリ	外にぶい黄橙／内灰褐	砂礫ＭＳ多	口1/6	C3	外面煤
30－14	ＳＫ14	底部	摩耗	外にぶい黄橙／内灰褐	砂礫ＬＭ多	底1/3	C3	
30－15	ＳＫ14	蓋	外ヨコナデ/内ナデ	にぶい褐	砂礫ＭＳ多，海綿	摘1/1	C4	
30－16	ＳＫ30	壷	外ハケ・口ヨコナデ／内口ハケ・「十」記号・頸指圧痕・胴ケズリ	にぶい黄橙	砂礫ＬＭＳ少，焼土塊		C8	外面黒斑
30－17	ＳＫ30	鉢	外口ヨコナデ・胴ハケ／内口ヨコナデ・胴ケズリ	にぶい橙	砂礫ＭＳ多	口1/4	C41	外面煤，内面炭化物，ＳＢ３と接合
31－ 1	ＳＫ35	甕	外ヨコナデ・擬凹線／内口ヨコナデ・指圧痕・胴ケズリ	にぶい橙	砂礫ＬＭＳ多，角閃石，海綿，焼土塊	口1/4	C7	
31－ 2	ＳＫ35	壷	外摩耗／内口摩耗・胴ケズリ	浅黄橙	砂礫Ｌ微ＭＳ多	口1/4	C5	
31－ 3	ＳＫ35	高杯	外ミガキ／内上位シボリ・ケズリ・下位ハケ・ナデ	外にぶい橙／内にぶい黄褐	砂礫ＬＭ少Ｓ多，角閃石	脚2/3	C9	４方透孔
31－ 4	ＳＫ36	甕	外口ヨコナデ・下端キザミ／内ヨコナデ	外明赤褐／内明褐	砂礫Ｌ少ＭＳ多	口1/8	C10	外面煤
31－ 5	ＳＸ2	口縁部	ミガキ	橙	砂礫ＭＳ微	口1/12	C30	赤彩
31－ 6	ＳＸ9	甕	外口ヨコナデ・擬凹線・胴摩耗／内口ヨコナデ・胴ケズリ	浅黄橙	砂礫Ｌ少Ｍ多	口1/6	C31	外面煤
31－ 7	ＳＸ14	甕	外摩耗／内口摩耗・胴指圧痕・ケズリ	外にぶい黄橙／内にぶい橙	砂礫ＭＳ多，焼土塊	口1/4	C32	外面煤
31－ 8	Ｐ130	脚	外ミガキ／内ハケ・ナデ	浅黄橙	砂礫Ｍ少Ｓ多	脚1/4	C44	外面黒斑
31－ 9	Ｐ133	甕	外ヨコナデ／内口ヨコナデ・胴ケズリ	浅黄橙	砂礫ＬＭＳ多，シルト，海綿，焼土塊	口1/10	C48	
31－10	Ｐ135	底部	外胴ハケ・底ナデ／内ケズリ	外にぶい橙／内にぶい黄橙	砂礫Ｌ少Ｍ多	底1/1	C47	内外面黒斑
31－11	Ｐ156	甕	ヨコナデ	浅黄橙	砂礫ＭＳ多，角閃石，海綿	口1/6	C42	
31－12	Ｐ234	底部	ナデ	外明赤褐／内黒褐	砂礫ＬＭ多Ｓ少，角閃石	底1/1	C49	
31－13	Ｐ261	甕	外ヨコナデ・擬凹線／内口ヨコナデ・指圧痕・胴ケズリ	外黄橙／内浅黄橙	砂礫Ｍ多，シルト	口1/10	C46	
31－14	調査区中央部検出面	甕	外ヨコナデ・擬凹線／内指圧痕・ヨコナデ	外黒褐／内浅黄橙	砂礫Ｍ多，角閃石	口1/12	C34	外面黒斑

図No.	位置・遺構	器種	調整・文様	色調	胎土	遺存度	実測No.	備考
31－15	C５区検出面	甕	外ヨコナデ／内口ヨコナデ・胴ケズリ	橙	砂礫Ｌ少Ｍ多	L11/8	C38	外面煤
31－16	調査区北西部検出面	甕	外ヨコナデ／内口指圧痕・ヨコナデ・胴ケズリ	にぶい黄橙	砂礫Ｌ少Ｍ多，海綿	L11/6	C37	
31－17	調査区北東部検出面	甕	外口ヨコナデ・胴摩耗／内摩耗	外にぶい橙／内浅黄橙	砂礫Ｍ多Ｓ少，角閃石，雲母	L11/5	C33	外面煤
31－18	調査区南東部検出面	高杯	外摩耗・稜付近ヨコナデ／内摩耗	浅黄橙	砂礫ＭＳ多	杯1/10	C35	
31－19	C５区検出面	脚部	外ミガキ／内ナデ	外黒褐／内橙	砂礫ＭＳ多		C39	外面黒斑，透孔２孔１対

表6　土師器・陶磁器

図No.	位置・遺構	種類	器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	遺存度	実測No.	備考
32－1	ＳＫ70	土師器（蔵骨器）	蓋	25.6	10.1	5.3	口3/4・頂1/1	D1	外面に墨「○」
32－2	ＳＫ70	土師器（蔵骨器）	身	24.6	19.0	28.7	口3/4・底1/1	D2	器形やや歪み、外底面に墨「○」
32－3	ＳＫ１	土師器（蔵骨器）	身	9.5	7.7	13.0	口1/4・底1/1	D3	
32－4	ＳＫ１	陶器（京焼系）	丸碗	9.6	4.5	5.6	L11/2・底1/1	D4	
32－5	ＳＸ19検出面	磁器（肥前系）	丸碗	7.1			口1/4	D6	染付
32－6	ＳＸ19排土	磁器（瀬戸美濃系）	端反碗	8.2	3.5	4.0	口3/7・底1/2	D5	染付

表7　銭貨

図No.	位置・遺構	銭貨	名称	鋳造年（西暦）	外径（cm）	孔径（cm）	厚み（cm）	重さ（g）	実測No.	備考
32－7	ＳＸ12	寛永通宝	上野銭	元文３年（1738）	2.4	0.6×0.5	0.1	2.2	金1	被熱（新寛永）
32－8	ＳＸ12	寛永通宝	亀戸銭	宝永５年（1708）	2.3	0.7×0.6	0.1	1.9	金2	被熱（新寛永）
32－9	ＳＸ12	寛永通宝	小梅銭	元文５年（1740）	2.3	0.7×0.7	0.1	1.9	金3	被熱（新寛永）
32-10-1	ＳＸ12	寛永通宝	藤沢銭	元文４年（1739）	2.3	0.6×0.6	0.1	3.9	金4	被熱（新寛永）２と銹着
32-10-2		寛永通宝	亀戸銭	宝永５年（1708）	2.1	0.7×0.7	0.1			被熱（新寛永）１と銹着
32－11	ＳＸ19検出面	一銭銅貨	一銭銅貨	大正11年（1922）	2.3		0.1	3.2	金5	

表8　石器・石製品

図No.	位置・遺構	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	実測No.	備考
33－１	ＳＫ１	打製石斧	(13.5)	7.8	2.5	(351.0)	安山岩	石6	基部欠損
33－２	ＳＩ３（ＳＤ３）	打製石斧	(11.9)	9.1	1.9	(208.6)	砂岩	石5	基部欠損
33－３	ＳＸ８	すり石類	9.0	8.2	3.9	402.2	石英斑岩	石7	側面敲打痕
33－４	Ｐ183	すり石類	12.5	10.3	4.7	901.3	安山岩	石8	側面敲打痕，主面すり面
33－５	ＳＤ22	砥石	(5.6)	4.9	3.2	(94.4)	凝灰岩	石9	一部欠損
33－６	ＳＸ19検出面	石板	(6.7)	6.5	0.9	(72.6)	粘板岩	石10	部分的に黒色の被膜あり
33－７	ＳＤ５	剥片	6.2	5.4	1.4	44.4	フリント	石1	
33－８	調査区南西部検出面	剥片	4.2	4.2	2.1	23.2	頁岩	石3	
33－９	Ｐ84・85間	剥片	3.2	3.3	0.7	5.8	鉄石英	石2	
33－10	調査区北東部木根	剥片	6.9	3.8	1.3	30.6	流紋岩	石4	

Ⅵ　まとめ

1　弥生時代の建物と集落

検出された竪穴系建物

額谷遺跡の発掘調査で検出された10軒の竪穴系建物については、全般に後世の削平が著しく、竪穴壁を捉えた例は皆無であり、当然ながら床面や地床炉の存在は認識できなかった。しかし、検出された周溝と主柱穴の配置によって、大まかながら建物の規模が類推できたことは、Ⅳで述べたとおりである。今回の発掘調査で見いだされた竪穴系建物の検出パターンは次のＡ～Ｃのように提示される。

A　ＳＩ３～５が相当。周溝と主柱穴の間隔が主柱穴間と同等かそれ以上に広く、周溝は弧状で断面がＵ字状の深いものが付属する。主柱穴はＳＩ５の４本、ＳＩ３・４の５本か６本の配置が見られる。

B　ＳＩ１・２・６が相当。周溝と主柱穴の間隔が主柱穴間を下回るような狭いものが多く、周溝は直線的で断面が皿状の浅いものが付属する。主柱穴はＳＩ１が外側８本以上・内側４本の特異な二重の主柱となるが、その他は４本の配置となる。ＳＩ１と同様な主柱配置は現在までのところ、県内では野々市町御経塚遺跡デト地区、小松市八里向山Ａ遺跡、同八幡遺跡で確認されている[8]。

C　ＳＩ７～10が相当。主柱穴のみが検出されたものである。柱穴はＳＩ８・９の２本、ＳＩ７の４本、ＳＩ10の６本の配置が見られる。

竪穴系建物の構造

Ａ～Ｃは調査区内でほぼ同じ位置で近い時期に重複して検出されており、後世に削平された深さには大きな差がないはずであるから、立体的な構造の差によって生じたと考えるのが妥当である。これを前提条件として、各パターンの構造を次に示すように類推した。

A　周溝の内側に垂木尻が接地する構造を示すもので、周溝は外周溝と考えられる。この組み合わせは「平地式建物」、「周溝をもつ建物」、「周壁盛土式建物」[9]などと呼ばれる建物と平面的には同じである。この種の建物は外周溝とその内側に周堤を備え、周堤盛土を竪穴壁として利用し、竪穴自体はほとんど掘削せずに地山床を設ける構造とされている。額谷遺跡において、削平を受けながらも深い外周溝が遺存しているＡもほぼ近い構造と想定するが、全く同一のものかどうかは判断を控えたい。外周溝は先学の分類によれば南久和氏の「細深タイプ」、岡本淳一郎氏の「狭溝タイプ」[10]に相当しよう。規模的には周溝部分を差し引いたとしても、比較的大型の部類でまとまっている。

B　周溝の外側に垂木尻が接地する構造を示すもので、周溝は壁周溝と考えられる。一般に言われる「竪穴式建物」であり、Ａよりもはるかに深く掘削された竪穴の存在を想定できる。規模的にはＳＩ１が特大型、ＳＩ２が大型、ＳＩ６が比較的小型の部類にはいる。ＳＩ１はかなり特異な建物であり、周溝が外周溝の可能性もあることから、この分類に当てはまらないものかもしれない。

C　Ａ・Ｂとは竪穴の掘削などの面で異なる構造が想定されるが、柱穴以外の遺構がすべて削平されているのか、もともと存在しなかったのかを検証することができない。規模はＡ・Ｂに比べて全般に小型であり、特にＳＩ８・９はもっとも小さい部類に入ろう。

竪穴系建物の機能と立地

以上からＡ・Ｂは、竪穴壁・地山床の構造は共通するが、竪穴の掘削と床面の設定に関しては別型式の建物ということができ、ここからはＡタイプ・Ｂタイプと表記する。Ａタイプの指標とした「平地式建物」etc.については、Ｂタイプの指標とした「竪穴式建物」よりも排水・防湿機能を高めた建

物とされており、前者は平野・低湿地[11]、後者は山地・丘陵地の遺跡に主な分布を見せている。しかし、平野・低湿地においてもBタイプの例は比較的多く、金沢市上荒屋遺跡では両タイプが群を分けるが同時期に認められる。また、山地・丘陵地においても額谷遺跡では近接した時期に両タイプが認められる。両タイプの立地にはこうした例外が確実に存在し、単純な機能差と割り切ることは難しい。一方で、両タイプは弥生後期以降は同規模の建物間で主柱配置や床平面形がほぼ共通するという類縁性も見られる[12]。両タイプは特にAタイプに立体的な構造を示す事例がなく、対比し辛い状況が続いてきたが、近年遺存が良好な竪穴系建物の調査が相次ぎ、徐々に様相が明らかになりつつある。

例えば、富山県下老子笹川遺跡では周堤を伴う竪穴系建物が数軒検出されており、金沢市梅田B遺跡、小松市八里向山A遺跡でもそれに近い状況の竪穴系建物が1軒ずつ検出されている[13]。時期はいずれも弥生後期である。Aタイプで特徴的とした外周溝は全てに認められる、前2遺跡では平野・低湿地で大溝や自然流路に接続し、後1遺跡では山地・丘陵地で建物の高所を取り巻くように巡る。外周溝の配置は県内の類例に見る典型を示しており、見る限り防湿・排水面に効果が大きい存在と言える。外周溝については、溝底が床面よりも高いかあまり比高差のないものは、床面にまで削平が進むと失われてしまうことから、現在確認されている[14]以上に建物に付属する頻度が高くなりうると考えるべきであろう。周堤についても同様である。Bタイプで特徴的とした壁周溝も大半で認められる。「平地式建物」etc.・「竪穴式建物」のどちらの構造であっても、竪穴壁が存在して土止め板を据える必要性から、本来はほぼ普遍的に備わっている可能性が高い。前2遺跡の竪穴系建物はきわめて浅くほとんど掘削がないに等しいのでAタイプ、後1遺跡はBタイプに比定したい。3遺跡の竪穴系建物がそれほど特殊な性格でないとすれば、外周溝、壁周溝は立地にかかわらず両タイプに伴うことがあるといえる。すなわち、両タイプは竪穴掘削・床面設定を除く外周溝、壁周溝、主柱配置、床平面形など多くの遺構属性を共有している可能性が高い。額谷遺跡などの、立地とタイプが必ずし

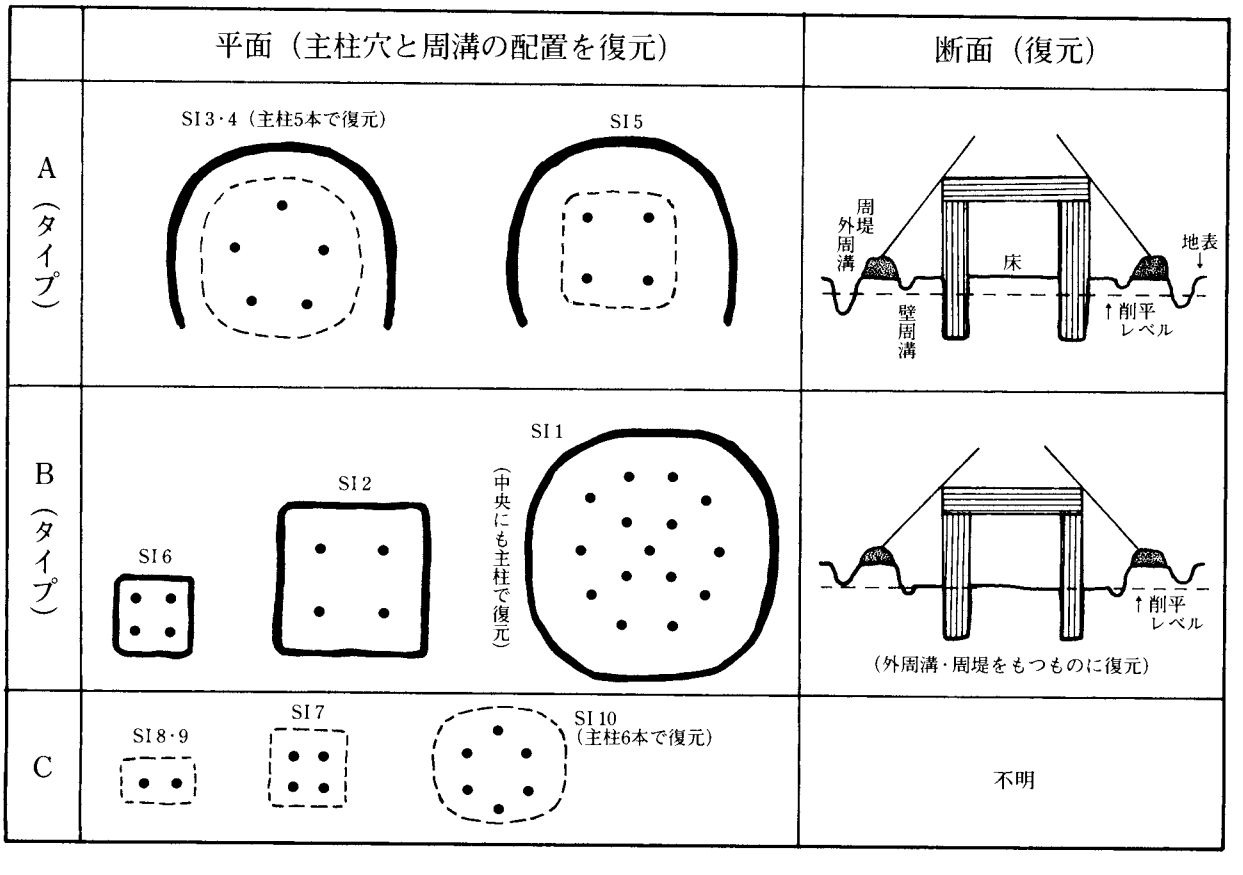


図34　竪穴系建物の分類模式（平面はS＝1/500）

も相関しない例外的な存在は、おそらく、共通する遺構属性が多い両タイプ間に、構築の手法を調整することによって、本来の適性を超えた互換性が生みだされていたことを示唆するものと理解したい。

建物と集落の推移

額谷遺跡の弥生後期の集落については、遺跡の全てを調査したわけではないので、その全体的な構造は把握できていない。しかし調査区内で検出された多くの建物遺構については、出土土器から編年上の絶対的な時期が、切り合いから相対的な先後が判明し、Ⅰ～Ⅳ期に区分することができた。また、時期不明で切り合いもない建物についても、位置関係から併存が矛盾しない段階に比定するように努めた。ここでは弥生後期の額谷遺跡Ⅰ～Ⅳ期の様相を提示し、集落の推移について概観する。土器編年との対応はⅠ・Ⅱ期が弥生時代後期後半、Ⅲ・Ⅳ期が同じく後期終末に相当する。

Ⅰ期［ＳＩ７～９とＳＢ５］多くの遺構に切られる先行的な竪穴系建物と、他の段階と併存しない掘立柱建物をまとめた。ＳＩ７～９は併存しないので、複数段階を包括する。竪穴系建物の構造、時期など実態は不明確で、後期後半を遡る可能性もあるが、現状での集落の最初の段階と捉えられる。

Ⅱ期［ＳＩ４・10とＳＢ３・４・７・８］北側でＳＩ10、南側で大型のＳＩ４という竪穴系建物、それぞれに付属するように小型の掘立柱建物ＳＢ８とＳＢ７が位置する。そして南北の竪穴系建物に挟まれて掘立柱建物ＳＢ３・４が存在する。ＳＢ４は土器が出土したＳＢ３と主軸が似ること、ＳＩ２・３とは併存しないことからここに含めた。

Ⅲ期［ＳＩ１・３・５とＳＢ２］北側でＳＩ３、南側でＳＩ５という大型の竪穴系建物、その間に掘立柱建物ＳＢ２、特大型の竪穴系建物ＳＩ１が位置する。ただし、ＳＩ４を切り、ＳＩ５に切られる後期後半段階の溝ＳＤ17の存在や、ＳＩ３ａ・ｂの主柱穴のズレが大きいことから、前段階との間に空白期が存在する可能性がある。

Ⅳ期［ＳＩ１・２・６とＳＢ１・６］北側で大型のＳＩ２、南側で小型のＳＩ６の竪穴系建物、その間に掘立柱建物ＳＢ１・６、特大型の竪穴系建物ＳＩ１が位置する。ＳＢ１・ＳＩ１は建て替えを想定したが、どの程度の時期幅を持つのかは、不明である。集落の最後の段階と捉えられる。

結び

Ⅵ１では額谷遺跡の弥生時代後期の竪穴系建物の構造、集落の推移について若干の考察を加えた。

竪穴系建物の構造は、実体不明のＣや特異なＳＩ１を除けば、ＡタイプからＢタイプへ推移し、大型建物は多角形か円形プラン・多主柱から四角形プラン・４本主柱へと変化していく。主柱・プランに関しては、北陸地方全般での変化にほぼ一致した動向と言える。竪穴掘削・床面設定の型式が変化した背景については、集落に居住する集団の系譜や移動が重要な鍵を握るように感じられ、おそらくは弥生中期以前の段階に遡ってＡ・Ｂ両タイプの成立と普及の過程を探る作業が必要になろう。

集落の推移では、Ⅱ期に南北に竪穴系建物、その間に掘立柱建物という位置関係が生じて、さらに竪穴系建物単位に小型の掘立柱建物が付属するように位置していたありかたが、Ⅲ期に竪穴系建物・掘立柱建物の位置関係は継承するが、小型掘立柱建物が消え、特大型竪穴系建物が加わると同時に、掘立柱建物が大型化する、そしてⅣ期は竪穴系建物がＡタイプからＢタイプへ、掘立柱建物に布掘構造が現れるなどの構造の変化が見られるが、位置関係は前段階を踏襲している、と理解できよう。

弥生時代後期において、額谷遺跡の周辺には高橋川水系に属する平野立地の集落遺跡が多く存在することは、Ⅰで述べたとおりである。各遺跡の社会的・政治的な関係についてはにわかに論じがたいが、額谷遺跡で見られた、水系を一望する希少な丘陵地立地の選択、特大型竪穴系建物の存在、多くの鉄器の出土等を、周辺の集落より卓越した様相と指摘することで、遺跡の評価にかえたい。

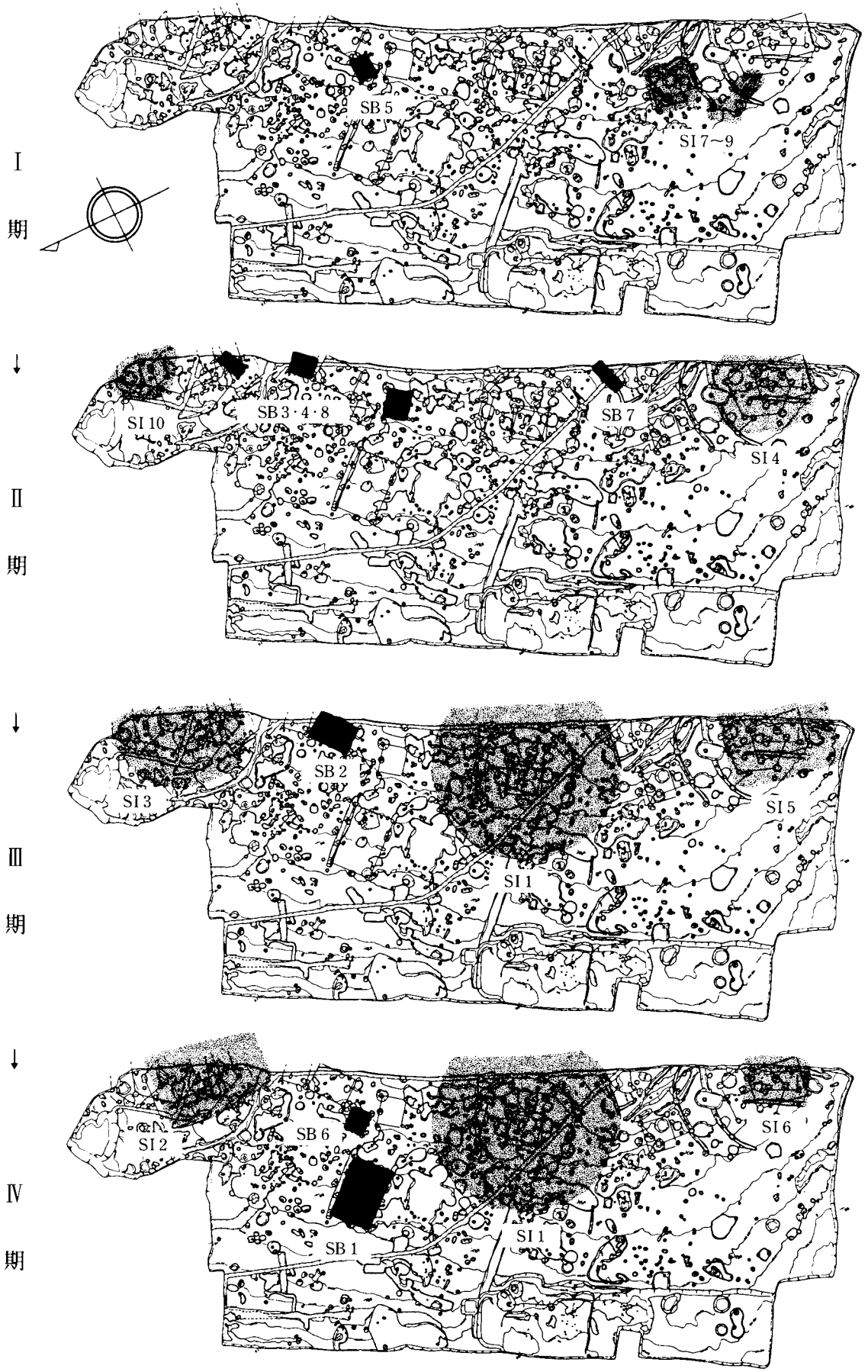
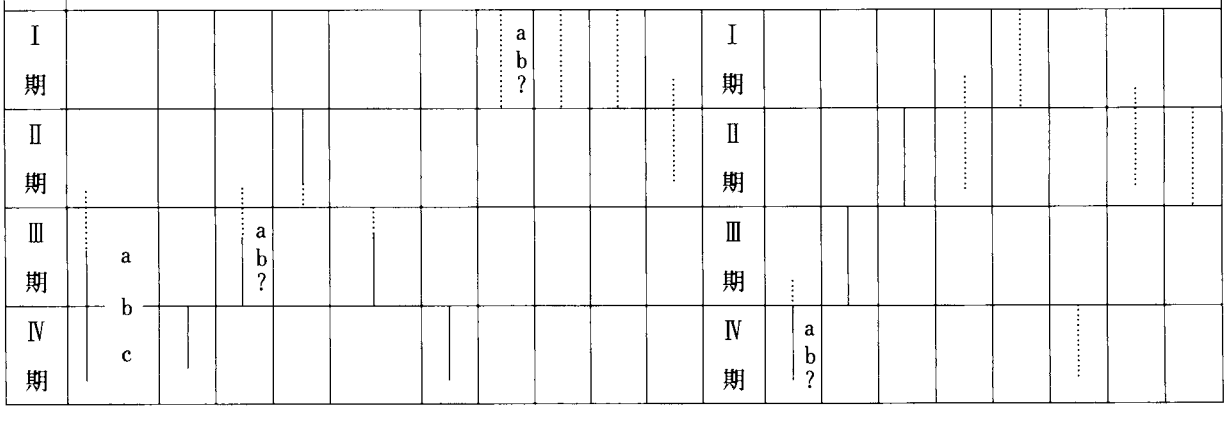


図35　建物と集落の推移（S＝1/500）

表9　建物

	竪穴系建物（SI）									
No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
地区	C3～D4	E1・E2	D0～E2	C5	C5	C5・C6	C4・C5	B5	B5・C5	E0・E1
周溝	壁周溝か	壁周溝	外周溝	外周溝	外周溝	壁周溝	未確認	未確認	未確認	未確認
主柱	二重多主柱	4か	5か6	5か6	4か	4か	4	2か	2か	5か6
タイプ	B	B	A	A	A	B	C	C	C	C
備考	特大型建物 SB7より古	SI3より新	SI2より古	SI5より古	SI6より古 SI4より新	SI5より新	SI4より古	SI4より古	SI5より古	

	掘立柱建物（SB）							
No.	1	2	3	4	5	6	7	8
地区	C2・D2	D2	D2・D3	D2・E2	D2	D2	E1	C4
梁行×桁行	1×3	1×2	1×2	1×2以上	1×2	1×1	1×2	1×2か
桁行軸方位	N－43°－W	N－51°－W	N－63°－W	N－40°－W	N－81°－W	N－48°－W	N－70°－W	N－68°－W
備考	片側布掘建物							SI1より古



凡例

主柱：単位本

梁行×桁行：単位間

推移：太実線が確定、点線が想定した消長

2　近世・近代の火葬場と墓

額谷遺跡の発掘調査が開始されてまもなく、全く予想もしていなかった近世・近代の遺構・遺物が見つかった。ＳＫ70を墓と考えた以外は性格がわからず、頭を悩ませていると、作業員として参加していた地元の人が自分の記憶にある「火葬場」と状況がよく似ていることを指摘され、色々と話を聞かせていただいた。それによると「火葬場は昔は村ごとにあった。額谷村のものは山の中に平場をつくり、礫を集めた上に棺桶を置いて藁で包み、棺の中にも藁や炭を入れてかなり長時間焼く。夜間は遠方からも炎が見えた。焼いた後、骨を拾って骨壺に入れ、燃え残りは近くに穴を掘って埋める。集められた礫は崩されて次に使う時までその辺りに転がしてある。」というものであった。

検出された遺構にあてはめると、ＳＸ19が火葬場で、ＳＸ19内の集石が火葬時の棺台、ＳＫ１はかたづけ穴となり、見事に状況が一致した。近世・近代の火葬場は、県内では加賀市敷地天神山遺跡Ｆ区がほぼ全域に調査が及んだ唯一の調査例である。火葬施設として焼けた溝と土坑が錯綜して検出されており、近世後期の敷地村の共同火葬場と位置付けられている。また、柳田村和住下遺跡でも幕末から明治の溝状の火葬施設と墓と「かたづけ」土坑が検出されている。集石や石組を棺台とした報告は福井県松岡町の帝王三昧でなされている。ＳＸ19には敷地天神山遺跡のような錯綜した遺構がなく、継続した使用は窺えないが、使用の度に集石をかたづけていたとすると痕跡が残りにくい可能性がある。ＳＫ１は完形に近い蔵骨器、陶器など、出土遺物が内容的に揃いすぎており、「かたづけ」とするより、墓そのものか、中世の例であるが富山県福光町梅原安丸遺跡ＳＫ19のように火葬場の廃絶時の祭祀に使用された可能性がある。ＳＫ70は墨書した蔵骨器蓋身をおさめた火葬墓である。同時期の火葬墓と火葬場は敷地天神山遺跡のように地点を分ける場合と、和住下遺跡や額谷遺跡のように近接して見られる場合がある。その意義や同時性については火葬墓の検討と合わせて今後の課題である。

火葬場と墓の時期は、出土した陶磁器から幕末が上限である。一方、地元の人の記憶にある火葬場はこの場所ではなく、もっと山奥にあったという。明治36年生まれの人の記憶でも同じであったことから、明治年間を下限とする。常に集落から忌避された存在である火葬場がより山中へ移動するとすれば、額谷村の拡大が関係している可能性を考えたい。その他、六道銭と考えられる寛永通宝、焼けて白くなった骨片が出土している。六道銭については墓に備えられたものが攪乱を受けたのであろう。骨片については小片が多く、火葬場と墓のどちらに伴っていたものかは不明である。

今回の発掘調査によって、額谷遺跡では近世・近代の火葬場と墓が存在したことが明らかになった。しかし、調査時の認識不足と、まだまだ調査例が少ないこともあって、ほとんどを聞き取りに頼って遺跡を復元したような状況である。ここにそのまま報告することが今後の調査・研究に益するならば幸いである。

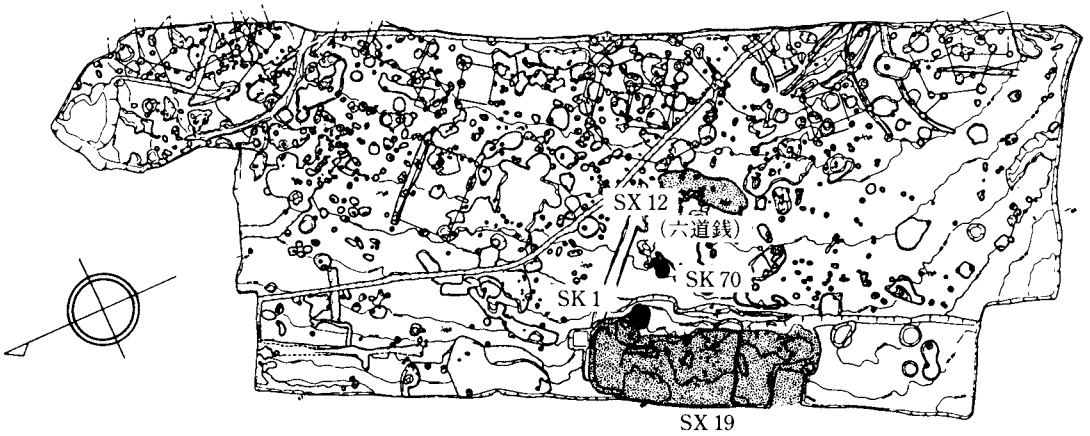


図36　火葬遺構の配置（S=1/500）

注

1　角川書店1981、金沢市教委1995ｂ。
2　石川県教委1992、金沢市教委1991、及び遺跡地図改定後の発掘調査事例から。
3　本書の弥生時代後期の時期区分について、「後半」は「法仏式」、「終末」は「月影式」が相当する。
4　宮本1993。
5　「竪穴系建物」という用語は、外接円主柱・地山床構造の建物という栃木英道氏の理解（栃木1994）にもとづいて使用する。
6　芝田1997。
7　大橋1989。
8　御経塚遺跡デト地区については野々市町教育委員会が平成元年度に発掘調査を行っている。八里向山Ａ遺跡については石川市町村埋文連協1997、八幡遺跡については社石協1996。それぞれ調査担当者から教示を得ている。
9　「平地式建物」は田嶋1991・出越1995、「周溝を持つ（有する）建物」は楠1989・南1991・浜崎1993、久保1995・岡本1997、「周壁盛土式建物」は栃木1994等で使用されている用語である。
10　前者は南1991、後者は岡本1997。
11　楠1989等で指摘がある。
12　浜崎1993等で指摘がある
13　下老子笹川遺跡については岡本1997、梅田Ｂ遺跡については社石協1997、八里向山Ａ遺跡については８に同じ。それぞれ調査担当者から教示を得た。
14　外周溝を伴うＢタイプは、県内に加賀市小菅波遺跡１・２号住居跡、金沢市上荒屋遺跡ＳＢ52～54、七尾市万行赤岩山遺跡第２号竪穴住居跡、七尾市奥原遺跡第７号住居址、松任市旭遺跡群ＳＩ38・39・73・84、松任市八田小鮒遺跡Ⅲ区３号住、津幡町谷内石山遺跡第２号住居址、押水町宿東山遺跡１・５・10・14号住、鹿島町在江遺跡第５～７・15号竪穴、鹿島町徳前Ｃ遺跡ＳＢ03等があげられる。

参考文献

石川県教育委員会『石川県遺跡地図』1992
石川県内市町村埋蔵文化財連絡協議会『第５回石川県内市町村埋蔵文化財連絡協議会資料』1997
石川県立埋蔵文化財センター『七尾市奥原縄文遺跡・奥原遺跡』1982
石川県立埋蔵文化財センター『宿東山遺跡』1987
石川県立埋蔵文化財センター『敷地天神山遺跡』1987
石川県立埋蔵文化財センター『高橋川の改修工事と遺跡の発掘調査　扇台遺跡第２次発掘調査』1992
石川県立埋蔵文化財センター『石川県鹿島郡鹿島町徳前Ｃ遺跡』1993
石川県立埋蔵文化財センター『和住下遺跡－1993年度調査の概要－』1994
石川県立埋蔵文化財センター『石川県金沢市・石川郡野々市町扇が丘ハワイゴク遺跡』1995
大橋康二『考古学ライブラリー55　肥前陶磁』ニュー・サイエンス社　1989
岡本淳一郎「周溝をもつ建物について」『埋蔵文化財調査概要－平成８年度－』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　1997
加賀市教育委員会『小菅波遺跡』1989
鹿島町教育委員会『在江遺跡』1993
角川書店『角川日本地名大辞典』17　石川県　1981
金沢市教育委員会『金沢市額谷ドウシンダ遺跡』1984
金沢市教育委員会『金沢市遺跡地図（改訂版）』1991
金沢市教育委員会『金沢市馬替遺跡』1993
金沢市教育委員会『金沢市扇台遺跡』1994
金沢市教育委員会『金沢市額新町遺跡』1995ａ
金沢市教育委員会『金沢市額谷カネカヤブ遺跡』1995ｂ
金沢市教育委員会『平成７年度金沢市埋蔵文化財調査年報』1996
金沢市立扇台小学校『扇台地いきたんけん読本　ふれあえばふるさと』1997
久保有希子「第４章第２節　周溝を有する建物について」『金沢市上荒屋遺跡Ⅰ』第１分冊弥生時代編　金沢市教育委員会　1995
楠　正勝「第４章第１節　遺構」『金沢市西念・南新保遺跡Ⅱ』金沢市教育委員会　1989
財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所『梅原加賀坊遺跡・久戸遺跡・梅原安丸遺跡・田尻遺跡発掘調査報告－東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告(4)－』1996
芝田　悟「第６章第４節　六道銭・一括埋納銭」『石川県考古資料調査・集成事業報告書　祭祀具Ⅱ』石川考古学研究会　1997
社団法人石川県埋蔵文化財保存協会『社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報７　平成７年度』1996
社団法人石川県埋蔵文化財保存協会『社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報８　平成８年度』1997
田嶋明人「北陸の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物』埋蔵文化財研究会　1991
栃木英道「周壁盛土式・竪穴系・建物について－弥生時代～古墳時代前半期－」（第３回村落遺跡研究会発表資料）1994
出越茂和「第２章考察　北加賀における弥生終末～古墳中期の村落構造」『金沢市上荒屋遺跡Ⅰ』第２分冊古墳時代編　金沢市教育委員会　1995
浜崎悟司「北陸南西部Ⅱ２　加賀における集落の構成要素」『日本考古学協会1993年度新潟大会　シンポジウム２　東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会　1993
松任市教育委員会『旭遺跡群』1995
宮本哲郎「額谷御廟谷遺跡について」『石川考古学研究会々誌』第36号　石川考古学研究会　1993
南　久和「第５章第１節　溝について」『金沢市新保本町東遺跡』金沢市教育委員会　1991
七尾市教育委員会『万行赤岩山遺跡』1983

分布調査

表土除去

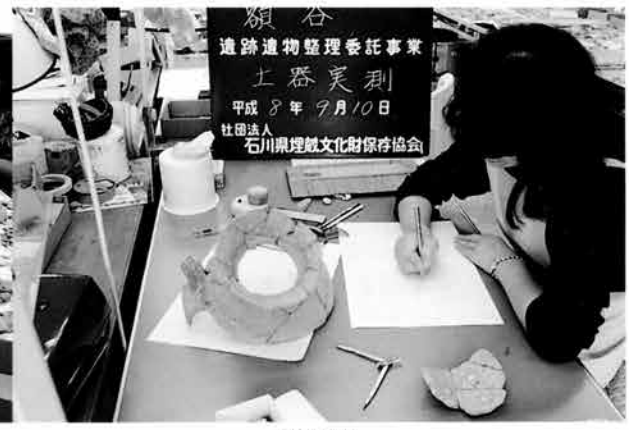
火葬遺構のおはらい

現地調査作業

現地説明会

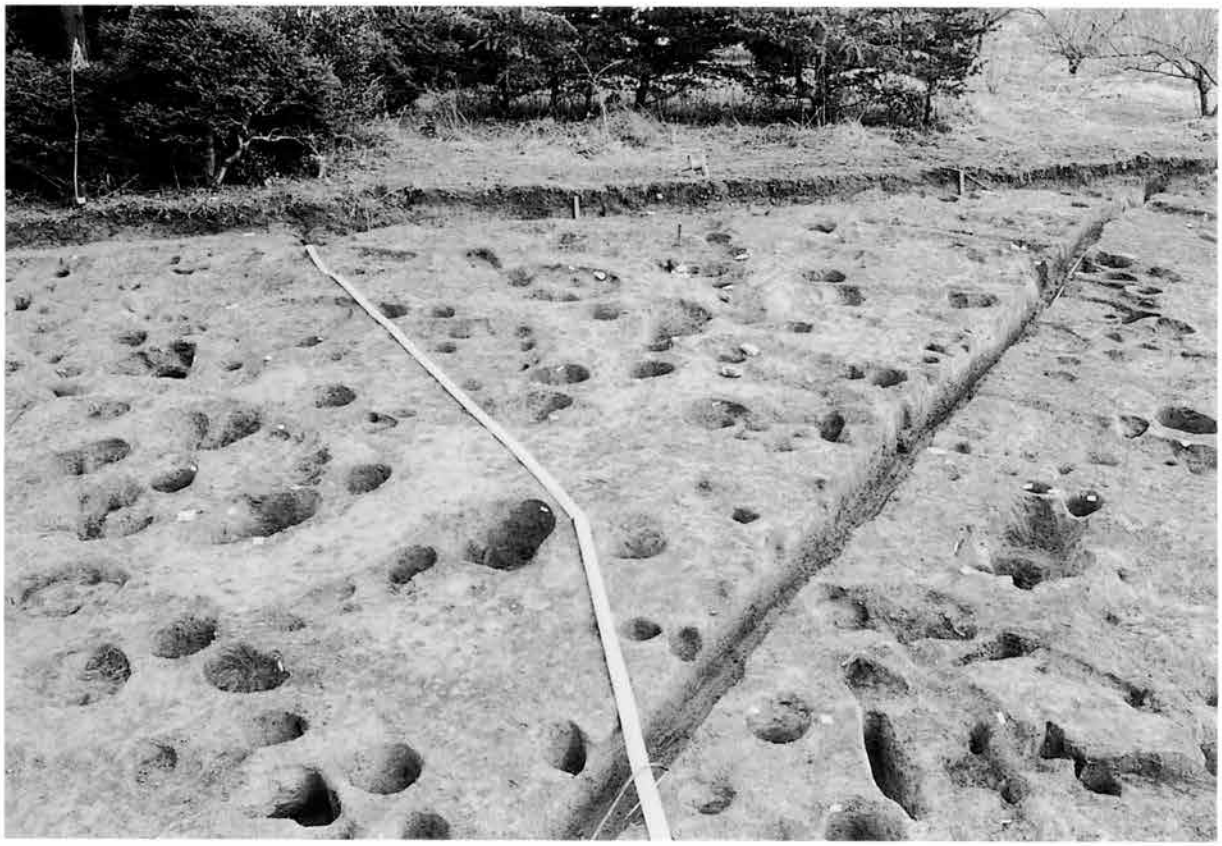
遺物洗浄

遺物接合



遺物図化

写真Ⅲ　竪穴系建物ＳＩ１

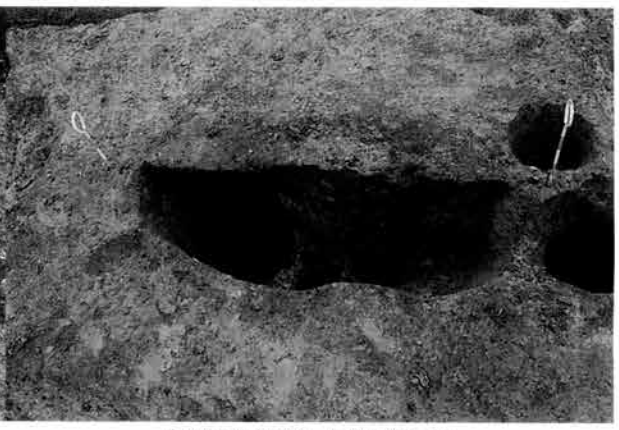


SI 1 全景（西から）

中心部（北西から）

主柱穴（P 2）（南東から）

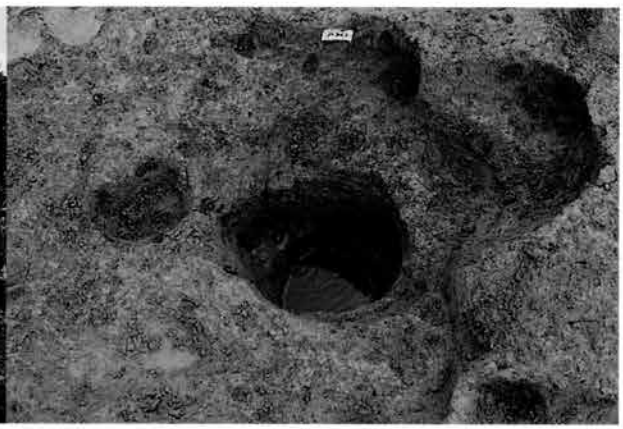
主柱穴（P 26・P 27）土層（西から）



中心柱穴（P 22）土層（南から）

SI 2・3・10 全景（北西から）

調査区の拡張作業（南から）

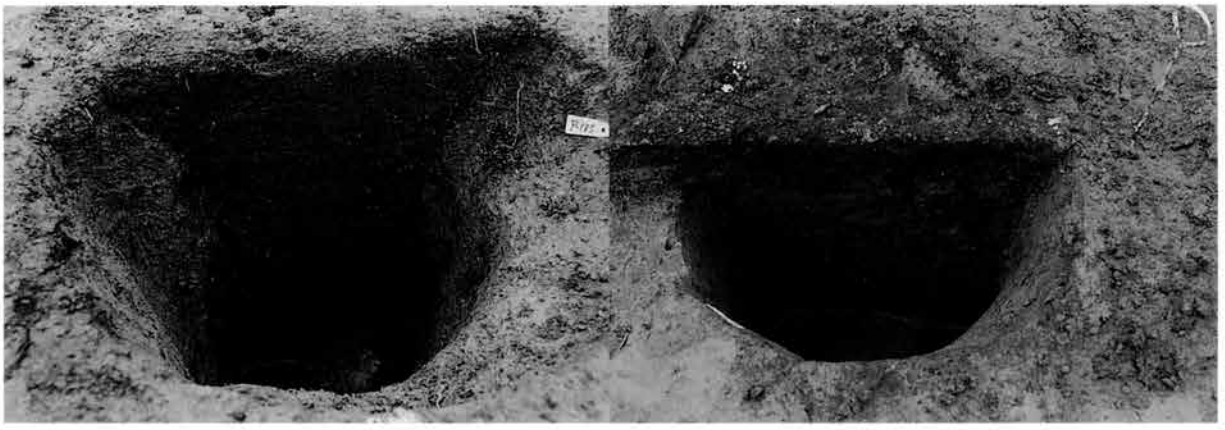


SI 2 主柱穴（P 263）（西から）

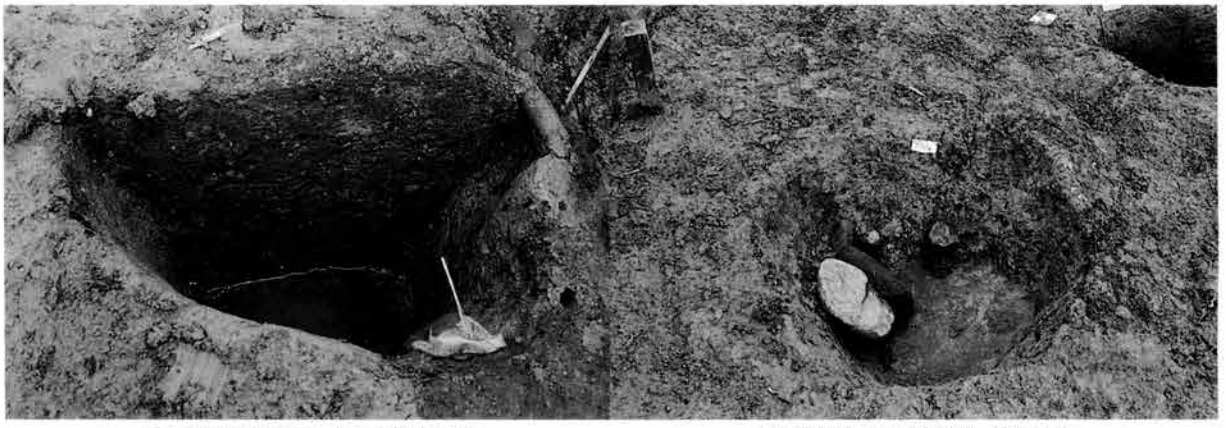
SI 10 主柱穴（P 268）（東から）

SI 3 弥生土器出土状況（北西から）　周溝（SD 3）検出時・図29-6の器台

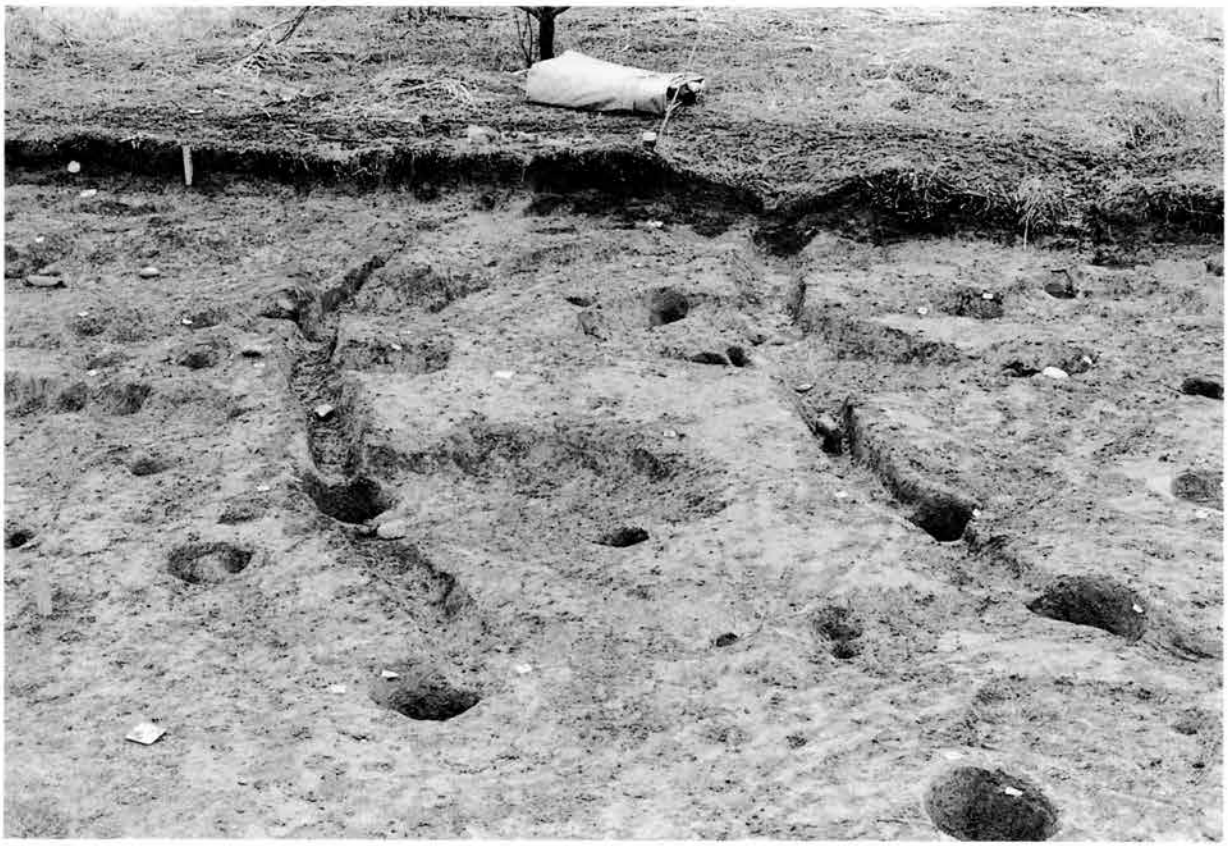
SI 4～6 全景（北西から）



SI 4 主柱穴（P 185）土層（南から）　　SI 4 主柱穴（P 228）土層（東から）

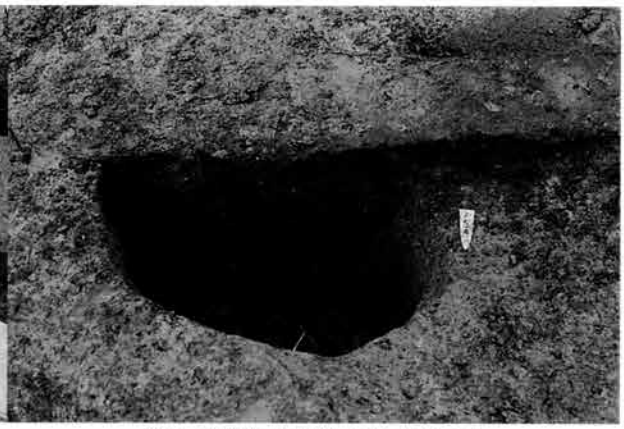


SI 5 主柱穴（P 229）土層（南西から）　　SI 5 建物内土坑（P 209）（北から）

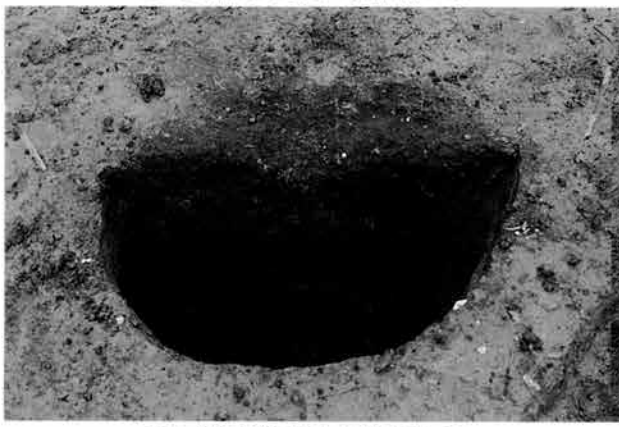


SI 7～9 主柱穴群（北西から）

SI 7a 主柱穴（P 178）土層（南から）



SI 7a 主柱穴（P 179）土層（南から）



SI 8 主柱穴（P 192）土層（南から）

SI 9 主柱穴（P 191）（北東から）

写真Ⅶ　掘立柱建物ＳＢ１

SB１全景（西から）

SB１布掘溝（SD４）土層（北西から）図24CD間

SB１主柱穴（P 83・P 84）（北東から）

SB１主柱穴（P 86・P 87）土層（南西から）

SB１主柱穴（SK 12）（南東から）

SB 2 全景（北東から）

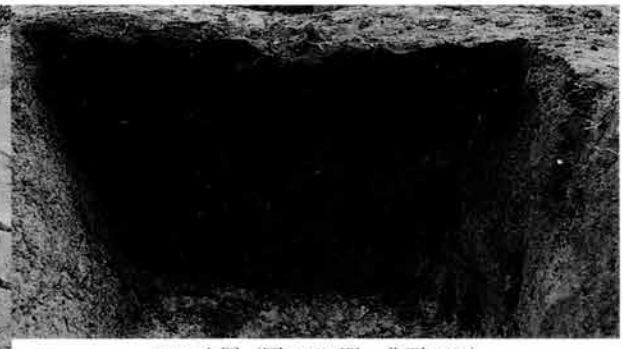
SB 2・SB 4 主柱穴（P 65）土層（南西から）

SB 2・SB 4 主柱穴（P 65）（南から）

SB 6 主柱穴（P 61）土層（南西から）

SB 6 主柱穴（P 61）（東から）

SD 5 全景（南東から）



SD 7 土層（図26 AB間、北西から）

SD 7 全景（南東から）

SD 7 土層（図26 CD間、北西から）

SD 7 土層（図26 EF間、北西から）

SD 15 全景（南から）

SD 23 全景（東から）

SX 7 全景（北東から）

写真X　火葬遺構・調査区全景

SK 1 全景（北西から）

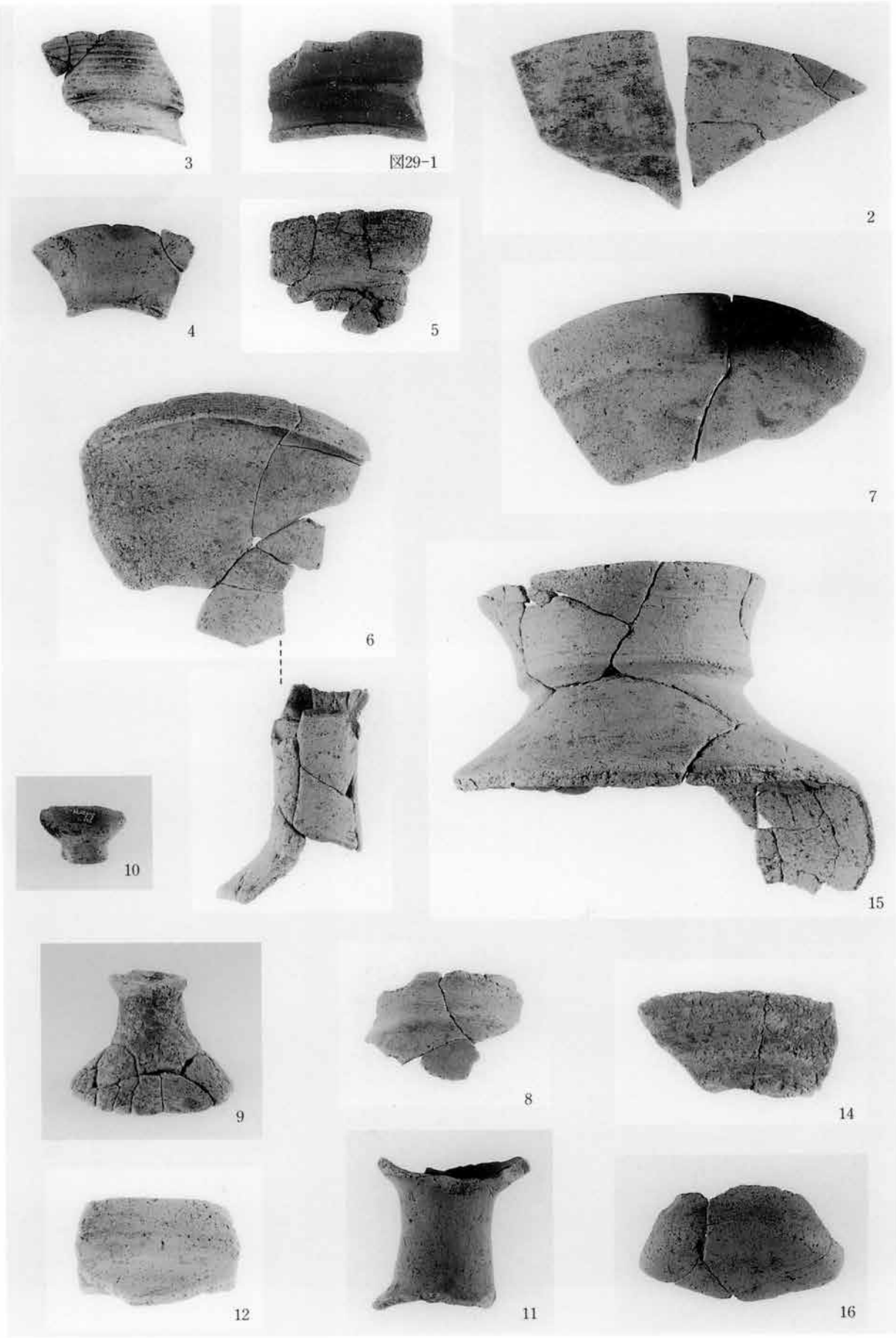
SK 70 全景（北西から）

SX 19 集石（北東から）

SX 19 全景（北東から）

調査区全景（北東から）

写真XI　弥生土器1



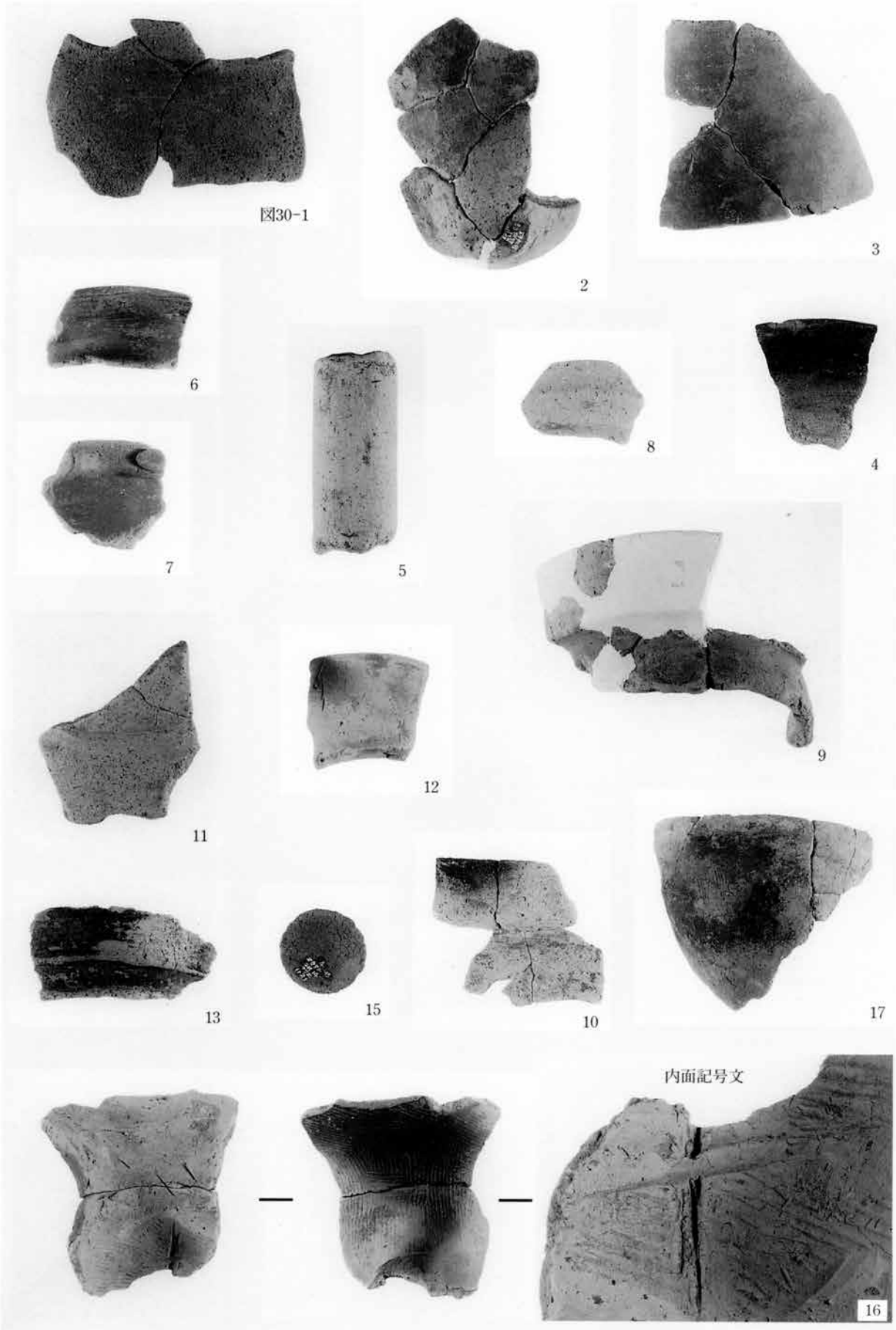
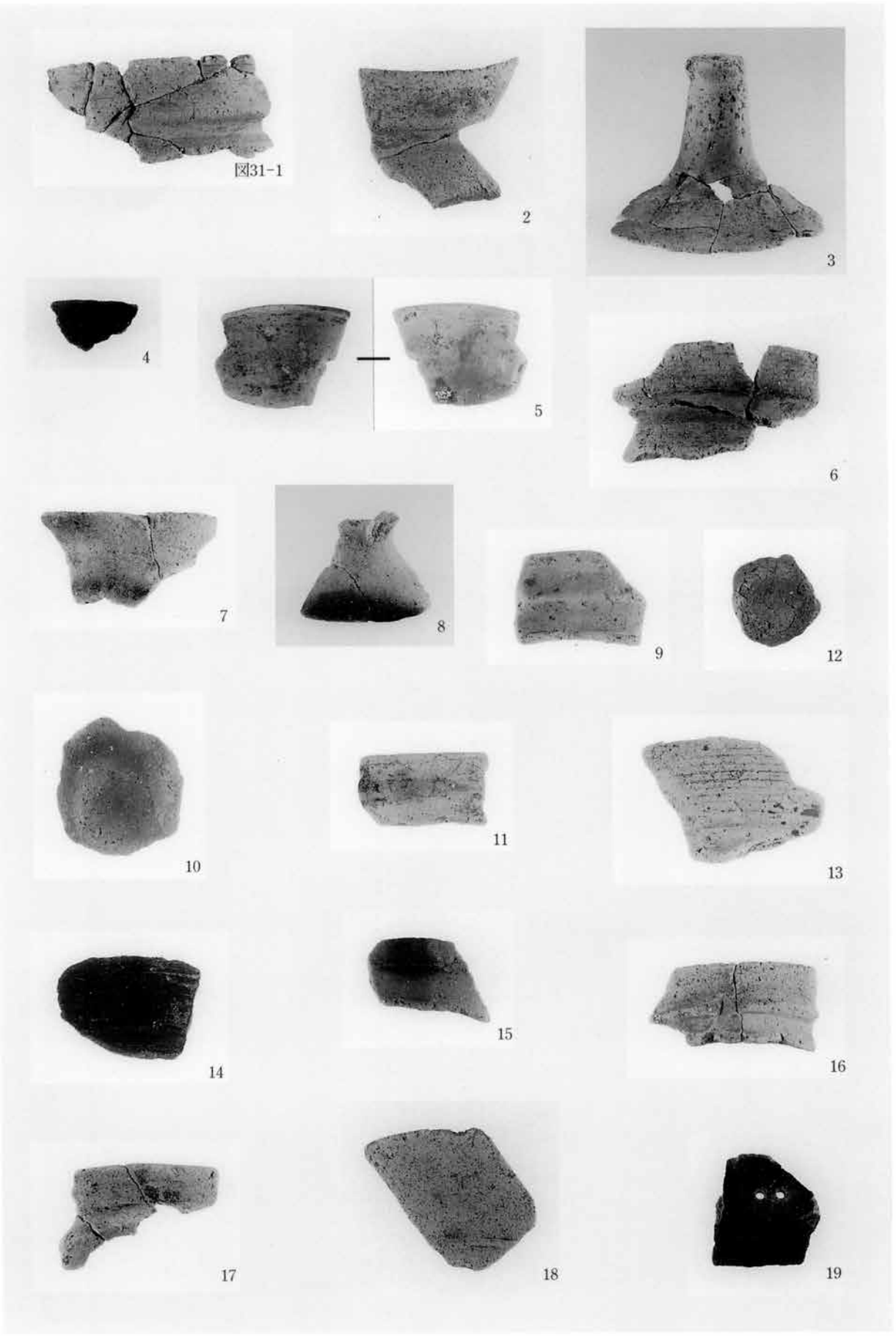


図30-1
2
3
6
5
8
4
7
9
11
12
13
15
10
17
内面記号文
16

写真XIII　弥生土器3



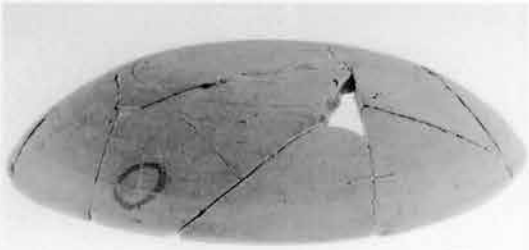
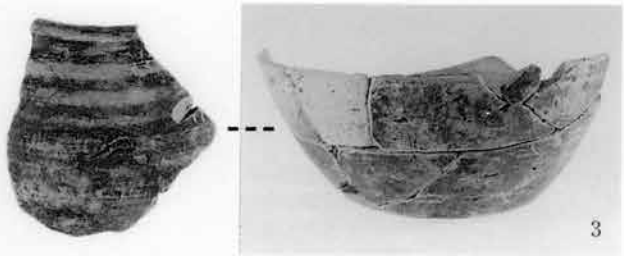


図32-1



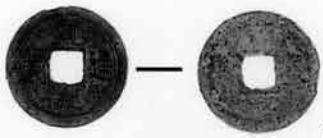
3

2

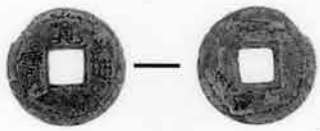
4

5

6

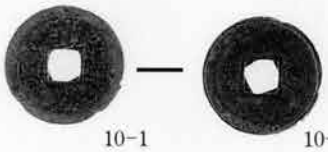


7

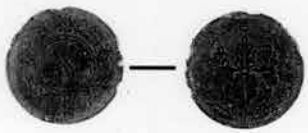


8

9



10-1　10-2



11

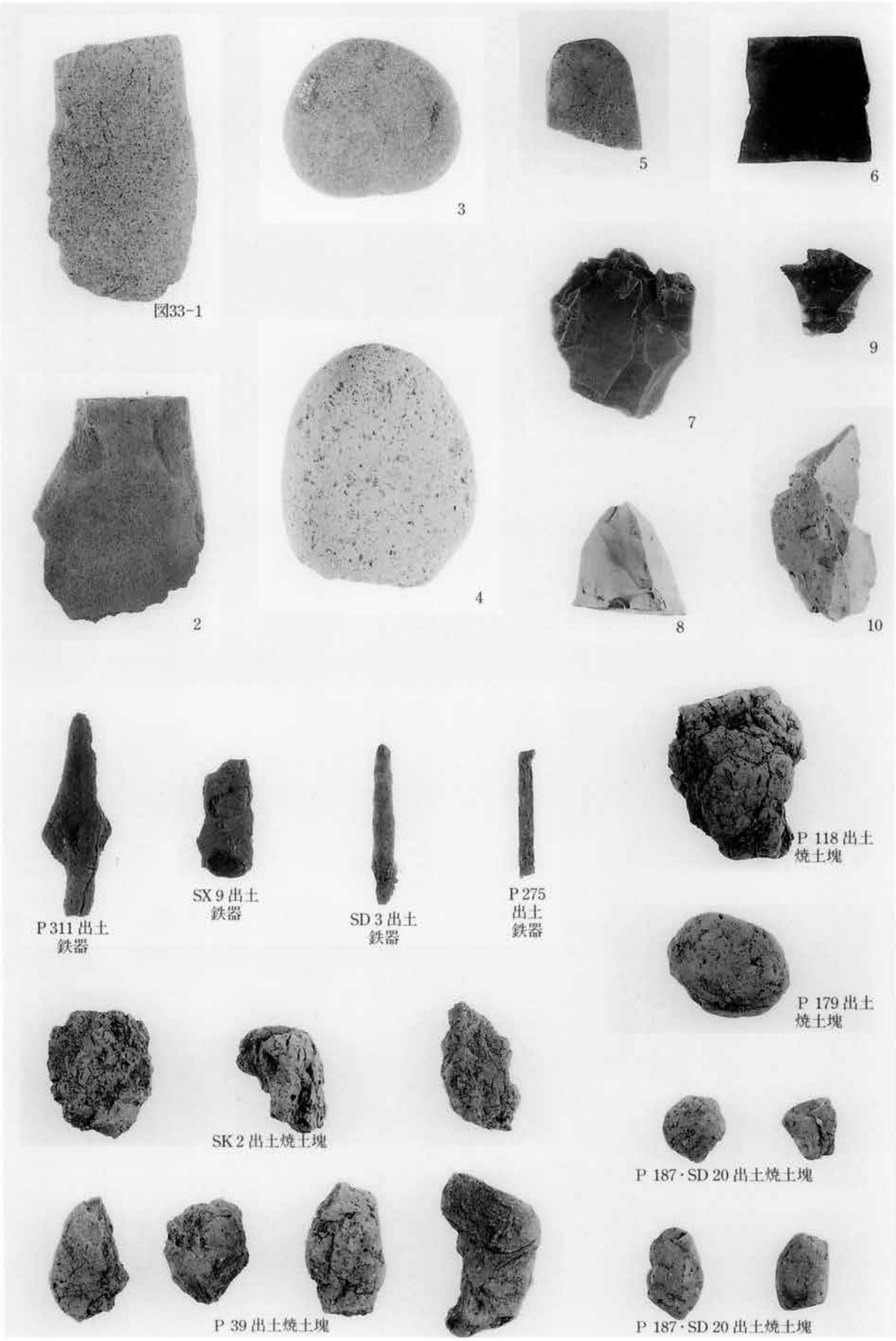


図33-1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
P 311 出土
鉄器
SX 9 出土
鉄器
SD 3 出土
鉄器
P 275
出土
鉄器
P 118 出土
焼土塊
P 179 出土
焼土塊
SK 2 出土焼土塊
P 187・SD 20 出土焼土塊
P 39 出土焼土塊
P 187・SD 20 出土焼土塊

金沢市額谷遺跡
―郡市計画道路鈴見新庄線整備事業
に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―

用紙（中性紙）　表　　紙：153kg（再生アートポスト）
本　　文：86.5kg（再生コート）
写真図版：86.5kg（　〃　）

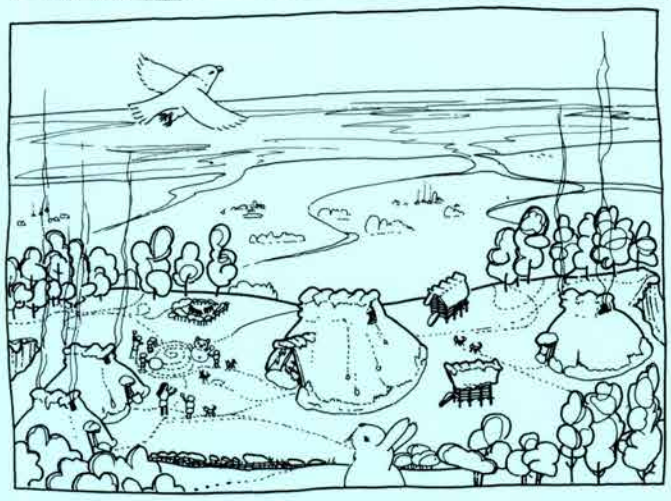
平成10年２月16日　印刷

平成10年２月16日　発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町４丁目133番地
〒921-8044　電話（076）243-7692
印　　刷　㈱ハクイ印刷

「額谷弥生ムラの四季」

秋・収穫



冬・大雪